

教会学校教案誌

2008.7.8.9月号



No.30

日本キリスト改革派教会
中部中会日曜学校委員会

2008年7～9月カリキュラム（第30号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
7月6日	三位一体の神（一）	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデル25
		ヨハネ15:26-27	ヨハネ15:26（部分）
父・子・御霊として三位一体の命の交わりに生きておられる神を知ろう			
13日	三位一体の神（二）	問10	ウ小6、ウ大9、ハイデル25
		使徒20:28-32	使徒20:28（前半）
教会を通してご自身をお示しくださる三位一体の神との交わりを喜ぼう			
20日	主権者なる神	問11	ウ小7、ウ大12、ハイデル26
		詩編139:1-10	ローマ11:36
天地を統べ治め、わたしたちをとらえておられる主権者なる神をあがめよう			
27日	天地創造（一）	問12	ウ小9、ウ告白4章
		創世記1章	創世記1:31（前半）
この世界は神の作品である。そこに在ることの喜びと感謝をささげて生きよう			
8月3日	天地創造（二）	問12	ウ小57-62、ウ告白21章
		創世記2:1-4a	創世記2:3（後半）
七日目に主は安息された。安息日の交わりを喜び、礼拝をささげよう			
10日 （平和）	平和を創り出す	—	—
		マタイ26:47-56	マタイ26:52（後半）
平和主日。剣を取る者は剣で滅びるとの御言葉から平和を考えよう			
17日	摂理の神（一）	問13	ウ小11、ハイデル26-28
		ローマ8:28	ローマ8:28
主なる神がわたしたちのために働いておられる。神への信頼と平安の中を歩もう			
24日	摂理の神（二）	問14	ハイデル94-95
		使徒16:16-24	使徒16:18（後半）
占いは人を捕らえ縛りつけてしまう。解き放たれて、神に依り頼んで生きよう			
31日	人間の創造	問15	ウ小10、ハイデル6
		創世記1:26-31	創世記1:27（前半）
人は神に似せて、神のかたちに造られた。人として生きることの幸いを知ろう			
9月7日	人間の罪	問16	ウ小13、ハイデル7
		創世記3:1-7	ヨハネ4:10
神の愛と慈しみのまなざしの中で、人間の犯した罪を見つめよう			
14日 （敬老）	罪と堕落	問17	ウ小14-16、ハイデル7-8
		創世記3:8-24	ローマ5:8
人の罪の広がり、なお与えられている神の憐れみに目を留めよう			
21日	罪の悲惨	問18	ウ小17-19、ハイデル3-11
		創世記4:1-16	ガラテヤ6:17（後半）
罪は現実の悲惨となって現れる。神から離れて生きる苦しさ目に向けよう			
28日	わたしも罪人	問19	ウ小16、ハイデル5-7
		ルカ18:9-14	ホセア6:6
罪のない人はだれもない。自らの罪を認めて、悔い改めを新しくしよう			

も く じ

2008年7・8・9月カリキュラム

まえがき	牧田吉和	4
巻頭説教	宮崎彌男	5
日曜学校・教会学校訪問		
岡山西伝道所教会学校の紹介	中田 稔	8
特別寄稿・諸教派の教会教育事情		
日本キリスト教会の教会教育	澤 正幸	13
副読本再刷のお知らせ		17
自由募金のお願い		18

聖書研究・説教展開例・分級展開例

7月6日	20
7月13日	28
7月20日	36
7月27日	44
8月3日	52
8月10日	60
8月17日	68
8月24日	76
8月31日	84
9月7日	92
9月14日	100
9月21日	108
9月28日	116

いのちのパン（こども聖書日課）

2008年10・11・12月カリキュラム	138
2008年度年間カリキュラム	139
2007年度会計報告	141
執筆者よりひとこと・あとがき	142

まえがき

牧田吉和（山田教会牧師）

中部中会教育委員会が、献身的な奉仕を通して「日曜学校教案誌」の刊行を続けておられることに心からの敬意を覚えています。このような「教案誌」の刊行は、日本キリスト改革派教会の歴史の中でも“画期的”と評価されるべき仕事でしょう。他の日曜学校教案誌と比べて見ても内容的に高い水準を示していると思います。

「教案誌」の整備を感謝しつつも、「教案誌」を使用する教会学校の現状に目を向ける時、状況は危機的です。山田教会を例にとれば、生徒がゼロでしばらく休校せざるを得ませんでした。昨年からやっと活動を再開し、この4月には新しい校長の就任式も行い、これから本格的に再建に取り組もうとしているところです。四国中会全体も事態は深刻です。昨年の中会主催サマーバイブルキャンプの参加者は、幼稚科1名、小学科2名、中学科7名、高校科4名でした。小学校までで見れば、わずかに3名の参加者です。各教会の教会学校も細々と存続している状態です。

このような現状から見ますと、教会学校の教育内容の充実は当然取り組まなければならない課題ですが、同時に教会学校生徒数の量的な面も真剣に問題にしなければなりません。この点で、特に思いますことは契約の家庭の両親が契約の子供たちを“何としても教会学校に出席させるのだ”という強い決意の必要性です。結局は、親の信仰の生き方と本音が問われているのだと思います。クリスチャンホームの親も塾や習い事にどうしても熱心が向かってしまっているような気がします。しかし、私たちは今日そのような時代の精神が子供たちにかなる病をもたらしているかを目の当たりしてはなりません。“神を畏れる者”として子供たちを育

てることこそが親の責任の中心であることを深く認識すべきでしょう。この点を本気になって実行するだけでも教会学校は再建の確かな手がかりを掴むことができるはずです。

以上のことに加えて、私たち改革派教会は全体としてあまりにも教育的に傾き過ぎているようにも思います。教会学校の問題も“契約の子の教育”という面を重視しています。“契約の子の教育”という思想は日本の教会には欠けていたもので大きな意義をもっています。この点を認めた上で、なお指摘したいことは伝道地にある教会として日本の教会は子供たちに対してもっと伝道的な側面を強化すべきであるという点です。私たちの教会の場合には“児童伝道”の面における具体的方策が弱いと思います。

また、地方の教会に赴任して最近特に考えることは、積極的な意味で“キリスト教的習俗や慣習”の形成の必要性です。教会にとって信仰的伝統の継承は不可欠な課題だからです。契約の家庭として“家の宗教”を根付かせ、信仰的伝統を長く継承して行くためには、新しいキリスト教的習俗や慣習の形成に努力すべきでしょう。クリスマスやイースターの教會的行事が子供たちの信仰形成に大きな意味をもっていることを思い起こすならば、この点を容易に理解していただけるでしょう。新しいキリスト教的習俗や慣習の形成なしに契約の家庭を何世代にもわたって存続させることは難しいことです。これは教理的教育と対立するものではないはずですが、キリスト教を生活化させる点で重要な意味をもっているとして私自身は考えています。この問題提起は誤解を招きかねないものですが、問題点をも含めて様々な角度から真剣に議論されることを私自身としては心から願っています。

（大会教育委員会委員）

「若者のための詩編」

—詩編119編9～16節による説教—

宮崎彌男（筑波みことば伝道所宣教教師）

（ペト）

どのようにして、若者は

歩む道を清めるべきでしょうか。

あなたの御言葉どおりに道を保つことです。

心を尽くしてわたしはあなたを尋ね求めます。

あなたの戒めから

迷い出ることのないようにしてください。

わたしは仰せを心に納めています

あなたに対して過ちを犯すことのないように。

主よ、あなたをたたえます。

あなたの掟を教えてください。

あなたの口から与えられた裁きを

わたしの唇がひとつひとつ物語りますように。

どのような財宝よりも

あなたの定めに従う道を喜びとしますように。

わたしはあなたの命令に心を砕き

あなたの道に目を注ぎます。

わたしはあなたの掟を楽しみとし

御言葉を決して忘れません。

（詩編119編9～16節）

わたしが牧会している筑波みことば伝道所の今年の年間標語は「御言葉による教会形成」です。そして、標語聖句として、使徒言行録20章32節を掲げています。すなわち、「この（御）言葉は、あなたがたを造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせることができるのです」。このような教会の標語を掲げるとき、私たちは、何となく、教会の成人会員だけを念頭においているようなことはありませんか。もしそうならば、私たちは聖書の宗教から大きく離れてしまっていると言わざるを得ません。なぜならば、私たちの信条によれ

ば、「見える教会は、福音のもとでは、やはり共同または普遍的教会であり、全世界にわたって、真の宗教を告白するすべての者と、その子らとから成る」（『ウエストミンスター信仰告白』25章2）からです。この『信仰告白』によれば、教会の成人会員だけではなく、小児会員、すなわち、子供たちや青年たちも、明らかに御言葉の養いを必要としています。そして、かれらもまた、御言葉によってはじめて「造り上げられ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継ぐ」ことができるのです。

詩編119編の「ペト」（9～16節）は、若者た

ちがどんなに神さまの御言葉を必要としているかを歌い上げています。

詩編119編は、日本的に言えば、「いろは歌」のような韻を踏んでいます。この他にも、ヘブライ語アルファベットによる同類の詩が詩編全体の中にいくつかありますが、119編はその中でも最大のものです。ヘブライ文字22の各文字で始まる8行が22あって合計176行（節）に及ぶ長い詩編となっています。しかし、主題は一貫して、「御言葉」です。驚くべきことに、各節に、ほとんどの場合、「御言葉」を言い表す言葉が、少なくとも1回は出てきます。「ベト」（9-16節）の場合、「御言葉」、「戒め」、「仰せ」、「掟」、「裁き」、「定め」、「命令」、「律法」、「御言葉」が各節ごとに出てきます。これはすごいです。教育的な意図を持って書かれたと思われる。全体が若者への呼びかけとなっています。詩編全編の講解を公にされたある先生は、この「ベト」につき、「ゴスペル調で歌い、若者の歌として味わってみたいものです」と言っておられます。

9節の「若者」（ナアル）は、幼子、若者、従者、家来を指す場合にも用いられており、基本的には、年令ではなく、「まだ成長途上にある者」を意味しているようです。ですから、この「ベト」は、確かに若い人に向けて書かれた詩編ですが、自分自身もまだ成長途上にある未熟な者という自覚があるならば、自分に関わる詩編として、もちろん読むこともできるわけです。

「歩む道を清める」。これは、特に道徳的な罪の事を念頭において言われているようです。特に若き日において、私どもは罪の誘惑を受けやすいものです。それで、この詩人は「どのようにして、若者は歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです」（9）と言って、この「ベト」の詩編を始めるのです。彼の答えはずばり「御言葉」です。御言葉を聞いて悟る、御言葉を聞いて実行する、そこに若者が罪や過ちから守られる道があると言

うのです。

「心を尽くして私はあなたを尋ね求めます」（10）。御言葉とは、天地万物を造られた、唯一のまことの神の言葉です。この御言葉において御自身を啓示された神は慈しみ深い、真実な神です。実に、「神」という名にふさわしい神です。イエス・キリストにおいてご自身の真実と愛をいやが上にもお示し下さった神です。この神を真実に、心を尽くして尋ね求めることは、若者にふさわしいことであります。神は心を尽くして尋ね求める者に誠実に応えてくださいます（ルカ11:9, 10）。

そして、聞いた御言葉を「心に納める」（11）。新改訳聖書では「心にたくわえました」と訳されています。たとえ、周囲の者たちが、「若いのに聖書を読んだりして変わっているなあ」などと言って馬鹿にしても、聖書の中に宝を見出した者のように、ひそかに読み続け、御言葉を心にたくわえるのです（マタイ13:44と比較）。

しかし、まことの宗教の究極的な喜びは、「神をたたえる」（12）ことにあります。神をたたえることは、個人的な祈りの中でももちろん行うことができるし、行うことが私たちにふさわしいことなのですが、それと共に、主の日ごとに行われる公同の礼拝に出て、兄弟姉妹と共に神を讃美し、共に御言葉を学ぶこと、ここにキリスト者の最高の喜びがあります。

13、14節はこの「ベト」詩編のクライマックスとも言うべき箇所です。ここでの「裁き」（ミシュバト）は、「神がお決めになったこと、すなわち、御言葉」の意。「あなたの口から与えられた裁き（御言葉）」は、マタイ4章4節において主イエスが申命記より引用しておられる御言葉を思い起こさせます。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」（申命記8:3）。そして、これは、次の14節の解釈にも関係してきます。

14節では、この世のあらゆる財宝と神さまの御言葉に従う道とが、あたかも天秤にかけら

れるように、対置されています。「定め」(エドワード)も、ここでは、神さまの定め、すなわち、「御言葉」を意味しています。

今の時代の私たち、特に、若い人たちの生活環境を見てみますと、自分たちの心を奪うような、面白いことがいっぱいあります。生活を楽しませる宝物がいっぱいあります。そのこと自体は結構なことでしょう。

けれども、神さまの御言葉に対する関心はどうでしょうか。こちらはもう空っぽに近いような状況なのではないでしょうか。もし、家庭でも御言葉を教えない、学校でも教えない、教会に行く暇もない、これでは、もう滅びです。この点でばかりと穴が開いてしまっています。これが今の私たちの社会の現状ではないでしょうか。

もっとも、このような状況は、必ずしも今の時代に限られたことではなかったのでしょうか。この詩人が「ベト」詩編を作ったときも同じような状況があったのかも知れません。それで、彼は祈るのです。「どのような財宝よりも、あなたのために従う道を喜びとしますように」(14)と。どのようにたくさんの財宝に恵まれていたとしても、それが私たちに命を与えるのではない。「あなたのために従う道」ここにこそ、いのちがあり、ここにおいてこそ本当の喜びで満たされるのだ、と。

この点で、先程ご紹介した申命記(そして、イエス様)の教えも実に適確です。「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つひとつの言葉で生きる」。何が人を生かすのでしょうか。私たちは毎日の生活のためにパンが必要だと思っています。確かにそれは必要です。言うまでもありません。しかし、それだけで生きるものではないのです。私たちが、先ず第一にわきまえ知るべきことは、神に造られた者として、人は神の口から出る一つひとつの言葉によってこそ生きる、ということです。このようにモーセは教え、主イエスは、悪魔の誘惑を退けるために、この言葉を引用されたのであ

ります。

私たちも、特に今成長しつつある若い私たちは、この教えの真理性を深く認識したいものです。そして詩編119編の詩人の祈り(13-14節)を私たちの祈りとしてほしいものであります。

今の時代に生きる若い者たちは本当に御言葉を必要としております。ある米国のキリスト教誌の記事によりますと、米国では、若い人たちの間で、今一度、きちっと教理を教える正統的なキリスト教の教えに聞きたいという傾向が見られるようになってきたということです。本当に、この時代、いかに生きるべきかを体当たりの模索している世代にとって、聖書に従ってイエス・キリストの福音を正しく教えようとしているキリスト教会に帰ろうとする傾向が強くなっているとのことです。これは、私ども改革派教会として青年伝道、教会学校教育を熱心に推進しようと願っているものとして、勇気づけられることではないでしょうか。

映像文化の支配的な時代に生きている若者に聖書の教理を教えても、耳を傾けないだろうと悲観的な見方をする人がいるかも知れません。しかし、だからといって、私たちは聖書の教え／教理を教えないわけには行かないのです。もし、聖書の教え／教理を教えないければ、若者は何によって生きるのでしょうか。「財宝」ですか。「パン」ですか。「どのようにして、若者は、歩む道を清めるべきでしょうか。あなたの御言葉どおりに道を保つことです」。

私たちは、今の時代環境の中で、たとえ困難であっても、若者のために祈り、御言葉を伝え、教え続けなければならないのです。これ以外に道はないのです。聖霊が若い人たちの心を開いてくださるでしょう。そして、それは、幾千代にも及ぶ祝福につながるのです(出エジプト記20:6、申命記5:10)。

御言葉には、確かに(若者も含めて)私たちが「造り上げ、聖なる者とされたすべての人々と共に恵みを受け継がせる」力があるのです。

岡山西伝道所教会学校の紹介

中田 稔（岡山西伝道所宣教教師）

1. はじめに

岡山西伝道所は、2000年1月から、十数名の信徒が集まって、岡山駅西口にある奉還町商店街の中に集会所を借りて、集会所を始めた伝道所です。

集会所の開始当初は、教会学校は、本校（日曜日）の教会学校として、小学科（5名）、中高科（4名）、成人科の3科を置き、主に教会員及び契約の子供たちのための教育を行ってまいりました。一方、分校として、妹尾分校、東畦分校（岡山市南西部、瀬戸大橋線妹尾駅を隔てた両側にある地域）が、木曜の午後、木曜学校として、教会員の家庭を解放して行なわれてきました。また、2002年3月からは、岡山市東部に門田分校が、同じく教会員の家庭を解放して開かれましたが、2006年3月に、契約の子の小学校卒業と同時に、残念ながら休止を余儀なくされました。

そのような状況の中、現在は、年月の経過と共に、本校の生徒は中高科の4名となり、分校は2校が引き続いて活動を続けている状況です。何か特徴的なことをやっているということではありませんが、当伝道所のありのままの教会学校の様子を紹介させていただきたいと思えます。

2. 教会学校の歴史と現状

(1) 小学科

小学科は、最初の二年間は、『成長』（CS成長センター発行）を使用して分級を行なってきました。しかし、改革派の立場に立った教材で教えることができないかと考え、松戸小金原教会で独自のテキストを作成していることを聞いて

ていましたので、お願いし譲っていただきました。そして、2002年から2年間、その教材で学びました。聖書物語と教理をバランスよく教えることの出来る教材として、良く出来ていたので、本当に感謝して使わせていただきました。ただ、教師用の教材はありませんでしたので、教師が十分に祈りと準備を持って臨む必要があり、教師にとっても必要な訓練を与えられたのではないかと思います。

小学科の教師は、最初の2年半は、大人の会員が主になり、その教師と共に、教師養成のため、青年会員二人に補助教師として奉仕してもらいました。2002年の10月からは、2名の青年会員が教師となり、次第に青年会員の教会学校奉仕者を増やしていきました。2006年3月には、契約の子供たちの小学校卒業に伴い、小学科は廃止となりました。



教会学校風景

(2) 中高科

中高科は、生徒の人数が少ないため、中学生と高校生を一緒にして、クラスを編成しました。

最初の学びに用いたテキストは、正統長老教会日本ミッションが発行しています『キリスト

を告白するために』でした。このクラスは、具体的な信仰告白の対象者を視野に入れながら、祈りを持って2002年までこのテキストで学びが進められ、2002年の12月には、二人の信仰告白決心者を出すことが出来、感謝でありました。

2003年から2006年3月までは、『ウェストミンスター小教理問答案内』（鈴木英昭著）を用いて、改革派教会員としての教理を身につけるための学びを行ないました。教師も2005年からは、伝道所委員から小学科で教師として訓練を受けた青年会員にバトンタッチし、子供たちも、おじさんからお兄さんお姉さんに替わって、より親しみを増した教会学校となりました。

2006年4月からは、中学の新一年生が入ってきて、年齢差が広がったため、中学科と高校科を分離し、中学科は中部中会教育委員会発行の教会学校教案誌を参考に独自のプリントで旧約の学びを行ないました。高校科では、ウェストミンスター小教理の学びを継続して行ない、終了後は、『聖書の歴史』（ジョージ・ストブ著）により、中学科と同じように旧約の学びを始め

ました。

2007年には、再度中学科と高校科を合同して、『聖書の歴史』を用い、生徒と教師が、当番制で問題を作成し、発表を行うという方式で授業を行ない、生徒たちの自主性と、学習意欲を高めるのに役立つことになりました。

(3) 成人科

私たちの伝道所では、婦人会とか男子会とは別に、教会学校の成人科を設置して、月一回のペースで、大人の教会員の学びの時を持っています。集会開始当初は、『改革派信仰とは何か』（牧田吉和著）により、改革派教会員としての基本的学びを行ないました。その後は、教会設立を目指しながら、『聖書の教会観』（R.B. カイパー著、山崎順治訳）を用いて、学びました。その間、女性役員問題が大会で大きな課題となった時期には、『聖書の教会観』の学びを中断して、女性役員問題についても、学びを深めました。

昨年でやっと『聖書の教会観』の学びを終了し、新しく、『神中心の伝道』（R.B. カイパー著、山崎順治訳）を用いて、伝道について聖書によって教えられている伝道が出来るよう願いながら、学びを進めていく予定です。

(4) 分校

地域における教会の役割を意識して始められたのが、教会学校の分校です。最初に来た妹尾分校は、始めてから、すでに20年以上経過しています。教会員の子供の成長に合わせて、教会学校も成長し、一時は20名を越える子供たちが集まるようになりました。しかし、中学進学と同時に中学科を新設しましたが、部活などで中学科は継続できませんでした。小学科も教会員の子供たちが卒業すると、人数は極端に減ってしまい、妹尾分校も生徒一人、教師一人の状況が続いています。また、門田分校についても、同じことが起こっています。

◆第2課：偉大な王、ダビデ◆	
1：どのようにしてダビデは民に神礼拝が必要なことを示しましたか。	答： <input type="text"/>
2：ダビデは最初に契約の箱をエルサレムに運ぼうとしたとき、どんな誤りを犯したか、その結果はどうであったか。	答 <input type="text"/>
3：ダビデは契約の箱のために何をしようとしたのですか。神はそれを許しましたか。	答 <input type="text"/>
4：神はダビデのために何をするといわれたか。	答 <input type="text"/>
◆次回予告◆	
来週は、臨落した王ダビデです。(Ⅱサムエル11-20章)	

生徒作成の旧約聖書の問題

それとは反対に、東睦分校は成功した事例としてあげられます。2003年には20名を超える生徒が集まりましたが、同じように、教会員の子供が小学校を卒業すると、生徒は半減しました。しかし、今なお、9名近い子供たちが集まってきて、神様のお話を聞くことが出来ていることを、神様に感謝しています。

(5) その他

これらのほかにも、青年たちのために、「結婚の備え会」を開いて、聖書から、神様が教える結婚、夫婦などについての、学びを行っています。若い青年たちが、神様の御心にかなった結婚が出来るように、教会全体で祈っています。

また、若い女の子が多い群れです。KBK(キリスト者べっぴん会)と自ら称して、年上のお姉さんたちが、今まで経験してきた信仰的事柄や、KGK(キリスト者学生会)で受けた恵みを分かち合ったり、『のんちゃん&おかあさん性について話そう』(長谷川はるひ著)を用いて、若い女性たちだけで学び、また語り合うときを持っています。

3. 教会学校に伴う各種行事について

(1) 夏季キャンプから夏季修養会へ

2000年から2004年までの5年間は、岡山市内の施設、及び蒜山バイブルキャンプ場で、二泊三日の教会学校夏季キャンプを行ないました。神様への礼拝、御言葉の学びを中心に、工作、牧場見学、花火、スイカ割り、バーベキュー、星空観察、ゲーム等々、様々な企画に、生徒はもちろん、教師たちも自然の中で、神様の創造の御業を感謝しながら、神様を喜ぶときを持つことができました。また、日常的には交わりの無い、本校と分校の生徒たちが、共に暮らし、交わりをもてる良い機会として用いられてきました。

しかし、子供たちも成長し、対象となる子供も少なくなり、2005年からは一日または一泊

修養会として、教会について、信仰生活についてなど、大人も子供も共通した課題の学びを行っています。



夏季キャンプ—小学校下級科授業風景



夏季キャンプ—牧場にて子牛とのふれあい



一日修養会にて

(2) お楽しみ会

私たちの伝道所は、安息日を聖く守るという聖書的観点から、日曜日の学校行事に不参加を表明する家庭が多くあります。ある面、それは子供たちが、寂しい思いになることも否めない

ため、子供たちへの配慮として、体育館を借りてミニ運動会を開いてきました。分校の子供たちもさそって、毎年秋に開催し、楽しいひと時を持っていました。しかし、子供たちが大きくなるにつれて、今では、中高青年会が企画して、



ミニ運動会・大縄跳び

様々なお楽しみの会を持つようになっており、教会学校としての企画としては、終了しました。

(3) クリスマス祝会

クリスマス祝会は、教会学校行事というより、教会全体の行事です。かつては、教会学校の各分級ごとに、英語での賛美、聖句暗唱、楽器演奏、創造物語絵巻、影絵によるクリスマス物語など、多種多様な企画で、神様を賛美し、イエス様の御降誕をお祝いしていました。しかし現在は、婦人会・家長会や、中学生以上の子供たちが属する、中高青年会などの各部会が中心に



クリスマス祝会—創造物語絵巻

なっています。中高生年会が行なう、聖書劇や、指人形での聖書劇のビデオなど、毎年思いもかけない企画に、祝会は最高潮に達します。

4. 最後に

私たちの伝道所の教会学校の様子をつらつらと書き連ねてきましたが、この8年間のあゆみを振り替えるとき、教会学校の果たす役割の大きさに驚きます。契約の子供たちにとっては、大人の礼拝に出席するのと同様に、この教会学校による聖書の学びは、知らず知らずの内に、一人一人の子供たちの心の内に、聖霊の働きによって御言葉が確実に刻み付けられていることを実感します。このような働きの中で、信仰を告白する子供たちが出てくることは、教会にとって大きな喜びであります。

また、地域における未信者の子供たちを対象にした教会学校も大きな役割を果たしています。ここに、東畦分校の教師から寄せられた原稿の一部を掲載させていただきます。

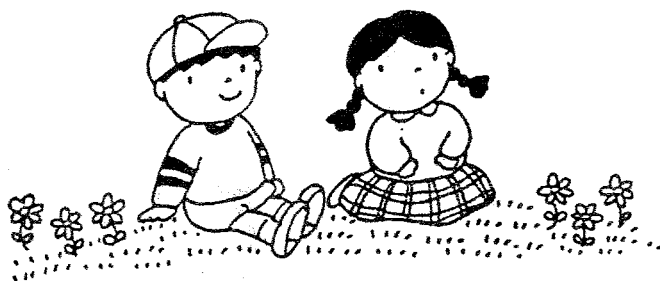
この10年を振り返ると、様々なニーズに応えようと、子供達が小さかった頃はCS兼託児のような事をしたり、おもしろい工作をアレコレ用意したり、また少し大きくなってからは英語を取り入れてみたり、色々工夫してきました。「何となく楽しそう……」と沢山の子供達が来てくれました。でもこれがただのお楽しみ会だったら、きっとすぐに行き詰っていたことでしょう。いつも中心に神様がいて、祈りを重ねていくとき、神様が働いてくださると思えました。かつてはワンパクすぎる男の子達に手を焼いた事もありましたが、大きな事故もなく今まで守られてきて感謝しています。

地域のこの様な教会学校を通して一人ひとりの子供と、またそのご家庭にも神様のことが伝わるよう願っています。嬉しいことに、保護者の方々との交わりも守られ「聖書を共に読む会」を定期的に続けています。何より筆者自身が、

かつて自分の子供が通っていた地域の教会学校（妹尾分校）を通して、教会へと導かれ救われたひとりなのです。

地域の教会学校に託された使命は、地域伝道であると思います。それは、子供だけのかかわりでなく、子供を通した親同士のかかわりが

そこに生まれて、この東睦でも保護者との定期的な集会が行なわれるようになりました。いまだ、数的な成果は上がってはいませんが、神様は確実にこの働きを祝福してくださることを確信し、さらに、多くの場所で、継続的に教会学校が持たれるよう、教会全体で祈っていきたいと思っています。



日本キリスト教会の教会教育

澤 正幸（日本キリスト教会大会教育委員）

はじめに 「感謝をもって」

このたび、『教会学校教案誌』の誌面をおかりして日本キリスト教会（以下「日キ」と略記）の教会教育について紹介する機会をいただいたことを感謝します。日本キリスト改革派教会と日キは2000年以來、公的友好関係に基づき、互いの大会を議長が訪問しあうだけでなく、毎年一回、それぞれの渉外担当の委員が会合をもち、年々、伝道・神学教育・礼拝式などテーマを掲げて、着実に交りを積み重ねています。今回、ここに日キの教会教育の歩みと現状、課題を知っていただくことによって、両教会の相互理解と協力が前進することを喜び、感謝しています。

以下、日キの大会教育委員会の活動を中心に紹介させていただきたいと思っておりますが、今回あらためて日キの教会教育全般について記すに当たり、二つの文献を参照しました。一つはNCC教育部が日本日曜学校協会設立百周年を記念して編纂・出版した『教会教育の歩み—日曜学校から始まるキリスト教教育史』（教文館）であり、もうひとつは中部中会教育委員会から送っていただいた、『教会学校教案誌』No.25に特別企画として掲載された文章、特にその中でも「宗教教育・徳育を越えて—私どもの目指すべき日曜学校伝道？」と「本誌の基本方針～教会（日曜）学校像について」（いずれも相馬伸郎牧師執筆）です。

日キの教会教育の歩みを、日キの創立以來の歩みから切り離して記すことはできません。日キは日本キリスト改革派教会の創立に遅れること五年、1951年に旧日基の流れをくむ39個の教会が教団を離脱して歩み出した教会です。（そ

の沿革については日キのホームページ <http://www3.ocn.ne.jp/~nikkits/> に掲載されていますので参照してください。）

教会創立とその後の教会形成にこめられた信仰的契機は、旧日基の批判的継承でした。その中には旧日基の日曜学校教育に対する批判的継承が当然含まれていました。NCC教育部から出版された『教会教育の歩み—日曜学校から始まるキリスト教教育史』を読みますと、そこに記された日本における百年の日曜学校の歩み—その中に旧日基の日曜学校も含まれています—を今日わたしたちはどう受けとめ、今後どう担ってゆくべきかを問われます。

『教会学校教案誌』No.25に掲載された「宗教教育・徳育を越えて—私どもの目指すべき日曜学校伝道—」と「本誌の基本方針～教会（日曜）学校像について」は、それに対する日本キリスト改革派教会からの明確な応答となっていることを敬意をもって読みました。では、それに対して日キはどう応えるのか、日キの教案誌の基本方針は何か、またどのような日曜学校像を追い求めようとしているのか、それを示すのが本稿に与えられた課題であろうと思います。その本題に入る前に、前提としていくつかのことを紹介しておきたいと思っております。

大会教育委員会の活動

日キは1951年の創立大会において日曜学校委員を挙げ、翌年4月から日曜学校誌の発行を開始しました。1974年に教育委員会と改称して今日にいたっていますが、現在は大会で挙げられる四名の委員によって日曜学校誌（季刊）の発行、定本の編集・発行を行っています。その

詳細は日キのホームページの諸活動の項から教育委員会のページにアクセスしてご覧いただけます。

日曜学校誌：発行部数は732冊。日キ134教会中113教会で620冊が用いられているほかに、他派（アライアンス、教団、改革派）でも用いられています。また書店を通じても販売されています。日キ全体の日曜学校教師数は611名ですので、全教師に行き渡っている計算になります。



日曜学校誌2008年4～6月号

内容：説教教案 教会暦に従った三年サイクルの「聖書朗読日課」により、福音書を取りあげています。見開き二頁の片面は説教に向けての釈義と準備、もう一頁に説教例が掲載されています。

聖書教案 これは分級教案としても、また説教教案としても用いることができるものです。三年間で旧・新約聖書の救いの歴史を網羅するものです。

定本 日曜学校誌に連載された教案をもとに編集・発行された定本が別記のようにあります。『青少年のためのキリスト教教理』（永井春子著）はこの中では息の長いベストセラーです。

このほか現在教育委員会が取り組みに力を入

教育委員会の出版物

人生の指針、あなたの愛する方へのプレゼント、
受洗記念のお祝いなどにも、ぜひ、ご活用下さい。

キリスト教教理	永井春子 著	1,000円
わたしたちの信仰	久野 牧 著	800円
主の証人たち	宇田達夫 著	700円
キリスト教会の歴史	小林泰雄 著	1,000円
創世記	林 嗣夫 著	1,000円
出エジプト記・レビ記	今村正夫 著	1,400円
旧約読本Ⅰ	平出亨・中家誠 著	800円
旧約読本Ⅱ	〃	700円
神は生きておられる	菊地純子 著	1,000円

定本の一覧

れているのは2009年完成予定の「聖書教案合本」の編集・発行作業と、毎年夏に神学校を会場に開催する「日曜学校セミナー」です。聖書教案合本については後で取り上げますが、後者の日曜学校セミナーは教育委員会が発行している「日曜学校誌」の充実をはかるためのもので、日キの四つある中会から、それぞれの日曜学校委員会の代表と、日曜学校現場の声を反映させるモニターとしての日曜学校教師、それに主催者の教育委員を加えて20名ほどのメンバーが集まり、教案の内容、方向性などを検討しています。また毎年、教会教育に関する基礎的な学びを講師の講演を通して続け、その講演録は日曜学校誌に連載されます。昨年の講演のテーマは「これからの日曜学校教育を考える 小児陪餐について～日曜学校は未陪餐（小児）会員を育ててきたか～」、講師は前神学校校長、小坂宣雄牧師でした。

大会教育委員会の歩み

一日曜学校誌カリキュラムの変遷を通して—

日キ創立の翌年から発行され続けている日曜学校誌のカリキュラムの変遷を通して、これまでの大会教育委員会の歩みを三つの時期に分けることができるように思います。

第一期 創刊から1960年まで

第二期 1961年から1968年まで

第三期 1969年以降、今日まで

この区分は第二期において、日キがNCCの総合制教会学校リキュラム、通称「神とその民」カリキュラム（『教会教育の歩み』NCC教育部186頁）を採用したのに対して、第一期はそこに引き着くまでの模索や試行錯誤のあった時期であり、第三期はNCCの総合制教会学校カリキュラムから離れて日キ独自でカリキュラムを編成するようになった時期です。先に挙げたさまざまな定本はこの第三期に日曜学校誌に連載された教案の中から生み出されたものです。

そして、現在、教育委員会が努力を傾けているのが第三期の日曜学校誌に掲載された30年分の聖書教案をもとに、それらを素材として、旧新約聖書全150課からなる聖書教案合本の編集・発行作業です。

この企画にはモデルがあります。オランダで出版されている『泉のほとり』（Bij de Bron）Ten Have 著、旧約は創造からネヘミヤの活動までを63課に分け、新約は祭司ザカリアからパウロのローマ行きまで82課からなっています。各課は主題聖句、讃美歌、釈義、時代背景の説明、教理、展開に向けての指針、展開例、設問という構成です。巻末にはカリキュラムが複数載せられていて、さまざまなカリキュラムにそってこの本が使用できることを示しています。考えてみるとわたしたちがカリキュラムと称しているものは、要するに、旧新約聖書の主要な箇所を年間の学びのサイクルの中にどう並べるかの一覧表に過ぎないと言ったら過言でしょうか。カリキュラムはそれぞれが状況に応じて組むことにして、カリキュラムのマテリアル、素材、原材料となるのは聖書であり、それを教案にしたものであるのですから、そちらを整えて提供することを願って今回の企画を立てています。

教会教育の基本線と今後の課題

NCC 教育部『教会教育の歩み』によって示さ

れた日曜学校百年の歴史を読んで問われるのは、教会教育の基礎、その根底となる神学は何かという問題に尽きているように思います。教案作成、また日曜学校教育の実践、こどもへの伝道といったものはいかなる神学的土台の上でなされようとしていたのかを問わずにおれないのは、文字通り、ここ百年の日曜学校は岩の上に家を建てる人ではなく、砂の上に家を建てたために、ひどく倒れてしまった人に似ていることを認めずにおれないからです。砂の上に家を建てた人というのは他者を批判しているのではありません。それは自分自身のことで、いま求められているのは旧日基や現在に至る日キを含めての自己批判です。

日キの創立とともにその日曜学校教育がスタートしたとき、当時の謄写版印刷の創刊号に渡辺信夫牧師が「歴史的に見た教会学校の本质と課題」を書いています。そのプリントは今日黄ばんでいますが、その内容は60年以上を経た今日でも色褪せていません。そこには宗教改革の伝統、カルヴァンがジュネーブで取り組んだ信仰問答教育の線が打ち出されています。小児洗礼から陪餐にむかう教理の教育をなすつと



「日曜学校」創刊号

めを教会は主から受けているという、教会のつとめ、ミニストリーとしての教会教育の確認です。そのような確認は、旧日基以来、日本の教会が息ってきたことだと思います。

日基は旧日基を継承する教会として、旧日基も含めてかつて盛んだった日曜学校へのノスタルジアもあってのことでしょうか、こどもたちへの伝道の重要性が叫び続けられてきました。それが教会学校ではなく「日曜学校」という名称が残っている所にもあらわれています。しかし、教会のつとめとしての信仰問答教育と旧来の日曜学校伝道とが、日基の中でどう神学的に統合され、一貫した教会教育の立場に立って進められてきたかと言えば、残念ながら今日までそれはなされないまま、どっちつかずの歩みを続けてきたのが、正直な反省だと思います。それゆえ、ここに今後の課題があります。

確かに、日本は宣教地であって、オランダやスコットランドのような社会状況とは違う環境におかれていることは事実です。しかし、イスラエルの信仰の伝統、今日に至るユダヤ人の信仰継承などを考えるとき、戦前の日本の「盛んな日曜学校」（1920年、世界日曜学校大会に際して日比谷公園で二万人の生徒大会が開かれた。『教会教育の歩み』NCC 教育部10頁）の方こそ特異な現象であって、神の民の歴史に中では本流に属さない出来事なのではないでしょうか。わたしたちはもっと冷静に、目を凝らして歴史と世界を見つめて、教会教育の基本線が何かを見極めてゆくべきだと思います。つまり、今日、オランダやスコットランドでも若者の教会離れは激しい中で、古い伝統をもつこれらの教会が今日、どのように教会教育に取り組もうとしているのか、その基本線を変えようとするのか、それともそれを守りながらも苦闘しているのかを知ることは大切です。なぜなら、そ

のとき、わたしたちもかれらと同じ戦い、苦闘をしていることが明らかにされるだろうからです。

かつてオランダを訪れたときハッとさせられたのは、ある教会でカテキズムのクラスがもたれる教室を訪れた時のことです。その教会の牧師が受けもっているクラスの人数は数名でした。会員数が数百名の教会でも、信仰告白準備の年齢に達している子供の数がそう多いはずはないわけです。

ですから今後、教会はこどもたちへの伝道を相馬牧師が提唱されるような「ディアコニア」としてであれ、新しい観点のもとに積極的に取り組み、進めてゆくことは大切でしょう。けれども、教会が本来のつとめとしての教会教育に着実に取り組んでゆくことを怠るならば、日本の教会の次の百年もまた、先の百年と同じ失敗を繰り返すことになるでしょう。わたしはそれを恐れます。

日基は聖書教案の合本制作や、教会教育の神学的基礎作業の継続に取り組むことを通して、教会の教えのつとめの確立を目指したいと考えています。今後、その意味で両教会が協力し合っていて、日本における教会教育の前進に仕えて行けるなら幸いです。日基の日曜学校誌に日本キリスト改革派教会の教会教育についての紹介を掲載させていただけるなら、大きな恵みとなるでしょう。（日本キリスト教会福岡城南教会牧師）



日曜学校バッジ

副読本再刷のお知らせ

『主は羊飼―中高生のための教理入門―』

価 格 800円
著 者 木下裕也

(名古屋教会牧師・教会学校教案誌編集委員・神戸改革派神学校講師)

再刷発行いたしました。ぜひお買い求めください。ご注文は教案誌編集部まで。

❶ 人生の目的―神礼拝

もうかなりのお年になってから教会に通い始められた方と聖書の学びをしていたときのことです。そのときまたま一緒に、ウェストミンスター小教理問答の間1を読みました。その問いは「人のおもな目的は何であるか」です。

この問いを読まれて、その方はつばやくようにおっしゃいました。わたしはもう何十年も生きてきたのに、人生のほんとうの目的などということを考えてこともありませんでした、と。

人生の目的とは何か。このことをはっきり知っているのと、知らずにいるのでは、やはり生きかたが大きくことになってくるのではないのでしょうか。

さまざまなことが人生の目的になり得ます。お金をもうけること、地位や名誉を得ること、仕事で成功をおさめること、熱烈な恋愛をすることなどです。これらのことは人生にある幸せをもたらすでしょう。

けれども一方で、そのどれもが不確かです。お金は一瞬にして失われることがあります。地位や名誉を得たとしても、たった一度のあやまちでそのすべてを棒にふることもあります。熱烈な恋もさめることがあります。とすれば、これらはいずれも人生の究極の目的とはなり得ないでしょう。

さらに、私たちの命そのものも不確かなのです。明日この地上に生きているという保証を、私たちはだれひとり持たないのです。

では、私たちはついに人生の確かさ、人生のほんとうの目的を見出すことはできないのでしょうか。

いいえ、私たちは人生の真の目的を知ることができます。ほんとうに確かで、生きがいのある命と人生を生きることができるのです。

もういちどウェストミンスター小教理問答の間1を見ましょう。

問 人のおもな目的は何であるか。

答 人のおもな目的は、神の栄光をあらわし、永遠に神を喜ぶことである。

もうひとつ信仰問答を見ましょう。ジャン・カルヴァンの手になるジュネーブ教会信仰問答の間1はこうです。

問 人生の目的は何ですか。

答 神を知ることです。

人生の目的は神さまを知り、神さまの栄光をあらわし、神さまを喜ぶことにあります。すなわち、神さまを礼拝することこそが人生の真の目的なのです。

人生の確かさは私たち自身の中にはありません。私たち自身何かを頼りにしているかぎり、私たちの人生は不確かです。

けれども神さまは確かなお方です。神さまこそ私たちの人生のゆるぎなき土台、岩、命のとりです。なぜなら神さまは天地の造り主であられ、私たちの命の与え手であられ、この世界のいとなみと私たちの人生の歩みのすべてをみ手のうちに握っておられるお方だからです。

『教会学校教案誌』発行のための 自由募金のお願い

教会のかしらなる主イエス・キリストの御名をあげます。

中部中会日曜学校委員会（2007年4月中部中会第一回定期会で教育委員会から改組）は、日本キリスト改革派教会をはじめとする改革・長老主義諸教会の教会学校・日曜学校教育に資することを目的として、『教会学校教案誌』を発行しています。2001年4月に始まり、すでに満7年となり、第30号まで発行して参りました。中部中会では7割ほどの教会により採用され、改革派教会全体でもおよそ60教会で採用されています。大会教育委員会もご支持を表明してくださっています。皆様のご支援に心からの感謝を申し上げます。

『教案誌』の発行は中部中会の事業として行われておりますが、中部中会日曜学校委員会では、あわせて皆様からの自由募金によってご支援いただきたいと願っています。子どもたちの信仰教育のために、ぜひ皆様からのお祈りと募金のご支援をいただきたく、よろしく願い申し上げます。教案誌を購入していただきやすくするために、教案誌の頒布価格を印刷・製本単価ぎりぎりにおさえています。『教案誌』をご購入くださることも発行のための支援となりますので、ご購入いただくことによってもご支援くださいますよう、お願いいたします。

目標金額	30万円
送金先	郵便振替 伊藤治郎
	00890-2-148183

※通信欄に「教案誌のための自由募金」と明記してください。

聖書研究・カテキズム研究・説教展開例・分級展開例

〈わたしたちと共にいてくださる慰め主、聖霊〉

ここで語られる聖霊の働きの一つは、聖霊はわたしたちの内に内在し、いつまでも共にいてくださるということです。「父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである」(14章16、17節)。聖霊は、わたしたちに臨在してくださる主です。ここで主は聖霊を「弁護者」と言い表されました。弁護者とは、パラクレートスという言葉で、「助け主、慰め主」とも訳されます。聖霊は「慰め主」だと言われるとき、その「慰め」とは、「人を強くするために、その人の傍らに並んで立つ」ということで、その人に力を与えて、人生の様々な現実に対処させることでした。頼れるのは自分だけという孤独に苦しむのではなく、その傍らに自分を支えてくださるもう一人の存在がいて、自分よりもっと確かなその存在が、孤独で頼れない自分をしっかりと支えていてくれることです。そしてそこで悩みの人生の現実に対処させるべく力を与え、そのために傍らに並んで立ってくださり、その力をくださる方がおられる、それが慰め主ということです。そのような慰めの中で、孤独なわたしたちを支え、励まし、助けてくださる、そのためにいつも傍らに共にいてくださっている方こそ、聖霊なのでした。だから、聖霊は「慰め主」と呼ばれるのです。

〈真理を指し示す真理の霊〉

しかし聖霊の働きには、もう一つ大切な働きがあります。わたしたちの内において、いつも共にいてくださるのは聖霊ですが、それではわたしたちは、その聖霊に感謝を捧げるかという、そうではなく、むしろ聖霊において臨在してくださる主イエス・キリストを信じ、礼拝します。わたしたちと共にいてくださるのは、実は聖霊において臨在される主イエス・キリストご自身なのです。天において、わたしたちを日々執り成し続けてくださ

る主が、霊において共におられる、だから聖霊をキリストの霊とも言うのです。そしてわたしたちの内において、わたしたちにいつも働き続けておられる聖霊は、その働きによって自分自身ではなく、主なるキリストご自身へと、わたしたちの信仰の目を向けさせていきます。わたしたちを、聖霊自身ではなく、キリストへと向けさせていく働き、それが聖霊のもう一つの働きです。「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」(14:26)。「真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである」(15:26)。「その方、すなわち、真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる」(16:13)。

ヨハネ福音書において、真理とは抽象的な概念ではなくて、人格となられた真理の神、イエス・キリストご自身のことです。真理であるキリストから遣わされて、真理であるキリストご自身を明らかにする、だから聖霊は真理の霊と呼ばれるのです。聖霊の働きは、キリストをわたしたちに指し示し、信仰へと導くことでした。わたしたちが聖書の学びをして、それを理解し、悟り、信じ、従うことができるのは、聖霊の働きです。悟るとは、知的に了解するだけではなくて、それを自分自身のものとして主体的に受け入れるということで、それは聖霊がわたしたちの心を開いてくださる中で、実現する恵みの業です。わたしたちがキリストを主として信じ、信頼できるようになるのは、自分の努力や熱心に基づくことではなくて、聖霊の働きです。聖霊は、キリストが啓示された恵みの事実を、わたしたち一人ひとりのものとなるように、心を導き、真理を悟ることができるように照らしてくださる方なのです。そして聖霊は、わたしたちにこの唯一の慰めである主イエス・キリストを指し示し、信じさせることで、この慰めにあずからせてくださいます。だから聖霊は、わたしたちにとって「慰め主」なのです。

(三川栄二)

子どもカテキズム

問10 私たちの神さまにはいくつの位格がありますか。

答 真の神さまには三つの位格があります。

御父なる神さまと御子なる神さま（イエスさま）と聖霊なる神さまです。

この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

〈子供たちの視点で三位一体を考える〉

有り体に言えば、三位一体の神様のことは、大人のクリスチャンでもよく分からないというのが正直なところではないでしょうか。「位格」とか「同質」とか言われても、ハテ何のことやら？ と思ってしまうのが、普通だと思うんです。ということは、逆に考えれば、子供たちの視点で考え、子供たちに分かるように説明しようとする時にこそ、三位一体のことが深く理解できるようになるのではないかと思うのです。

三位一体の教理は、特にギリシャ・ローマの文化圏で確立されていきましたから、哲学的な様相を呈しています。そのために、殊更難しく思えてしまいますし、一つが同時に三つで、三つが同時に一つだということを、どれだけこねくり回してみても、分かったような分からないような、と感じるのが当然だと思うのです。しかしながら、使徒信条にも見られますように、初代・古代教会の時代から、体系的にまとめられてはいないにしても、三位一体の信仰が生き生きと受け継がれていました。三位一体の教理は、その生き生きとした信仰を、異端との数多くの戦いを通して、万遍なく、またバランス良くまとめたものなのですね。初代・古代のクリスチャンたちは、三位一体の「哲学」を信じたのではなく、生きておられる三位一体の「神様」を信じて生きたのです。

〈異端の間違ひを通して三位一体を知る〉

三位一体の教理を豊かに理解するための、一つの大きな鍵は、異端の人々の考え方を知ることです。異端の人たちがどういう信仰を持っていたかを見ていきますと、意外にも自分たちも同じ過ちに陥っていたということを見出すかもしれません。三位一体の教理は分かりにくいだけに、危険性も大きいと言えましょう。

三位一体の異端として現れた、二つの大きなものは「勢力的モナルキア主義」と「様態的モナルキア主義」です。言葉が小難しいので、ますます分かんない！ と思う方もいることでしょう。「勢力的モナルキア主義」とは、要するに「憑依説」ですね。人間イエスに神が乗り移ったとする考え方です。「様態的モナルキア主義」とは、簡単に言えば「アシュラマン説」です（キン肉マンを知らない方はごめんなさい）。アシュラマンに「笑い」「冷血」「怒り」の三つの顔があるように、神様が三つの顔を使い分けしているとする考え方です。こうして見てみますと、異端の人たちがこだわっているのは、イエスは神か人かということと、神様は絶対に一人でなきゃ駄目だという二つのことなの分かります。異端の人たちにとって、神様は一人であると同時に、イエス・キリストも神、聖霊も神、というのは、どうしても受け入れられなかったのです。それで、納得できるような説を考え出したという訳です。（梶浦和城）

7月6日

「三位一体の神（一）」

説教展開例

テキスト ヨハネによる福音書 15章26、27節
カテキズム 子どもカテキズム 問10

〔単元のねらい〕

この単元では、キリスト教の基本教理である「三位一体」を学びます。「カテキズム研究」に記されているとおり、この主題は「大人のクリスチャンでもよく分からないというのが正直なところ」です。この教理の大切な部分を、いくらかでも学び取り、神が三位一体であられることが、教会とそれぞれの信仰生活に、どれほどの豊かさや確かさを与えてくれているかを、子どもたちと分かち合うことができれば、と願います。今回の教案では、「三位一体」の要（かなめ）を、聖霊の存在と働きに置いています。聖霊の教理は「キリスト教教理のシンデレラ」（J・I・パッカー）と言われるように、注目されず素通りされているのが実情です。聖霊なる神への信頼を通路として、三位一体信仰の恵みの扉を、子どもたちと共に開きましょう。教師の皆さんも、それぞれ聖霊に心を照らしていただいた経験を持っているはずです。子どもたちに証してみましよう。

「もっとイエスさまを知りたい！」

イエスさまのこともっと知りたいと思ったら、皆さんはどうしますか？ 何よりも聖書を学ぶことですね。でも一人で聖書を学ぶことができるでしょうか。だれかと一緒に学び、そしてだれかに教えてもらうことが必要です。そしてもっとよく考えてみましょう。日曜学校の先生や、皆さんのお父さんお母さんは、神様のことイエスさまのことを教えてください。でも日曜学校の先生方は、自分の知識だけで皆さんを教えているではありません。先生方が、聖書のお話をされるとき、きっと皆さんのためにお祈りしておられるはずです。「どうか、イエスさまの恵み、神様の素晴らしさが、どの子どもにもよく分かり、そして神様を心から愛することができますように！」。そのお祈りに答えて、皆さんの心にイエスさまの恵みを運んでくださる方、それが聖霊の神様です。

イエスさまは、十字架につけられる前に、お弟子さんたちにとっても大切な約束をしてくださいました。十字架にかかり、復活してのち、イエスさまは天のお父様のところに帰られます。イエスさまが天に帰られたのち、お弟子さんたちはいった

いどうなるでしょう。イエスさまと一緒におられた時にも、弟子たちはイエスさまの「良い生徒」とは言えませんでした。イエスさまがどんな方であるか、イエスさまがどのように私たちを救ってくださるか。いちばん大切なことさえ、よく分からないまま、仲間の間で「だれが偉いか」などと言い争っていたのです。そんな弟子たちを残して、イエスさまは安心して天の父である神さまのもとに帰ることができるのでしょうか？

イエスさまが天に帰られたのち、弟子たちのため、そして弟子たちに続いてイエスさまを信じる世界中の人びとのために、「弁護者」「助け主」を送る。イエスさまはそう約束されました。「わたしが父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさるはずである」（26節）。弟子たちにとって、イエスさま以上の「弁護者」「助け主」があるでしょうか。イエスさま以上の方はいませんし、いる必要もないはずですが、イエスさまは、ご自分が選んだ人びとのために、罪の赦しの働きを完成なさるため、どうしても天の父なる神様のもとに帰らなければなりません。それで、イエスさまと

同じ恵み、イエスさまと同じ力、イエスさまと同じ愛で、弟子たちを守ってくださる、もう一人の「助け主」が、どうしても必要なのです。それが「聖霊」と称ばれる方です。

この方は「真理の霊」と称ばれていますね。神様のすべての恵み、すべての愛を、のこりなく、間違いもなく、弟子たちに教えてくださるから、真理の霊と称ばれるのです。イエスさまの弟子たちは、イエスさまと一緒にいられた間、イエスさまから多くの恵みを学びました。神様が、どんなに大きな愛で、私たちを愛してくださるか。神様が、私たちを罪と死から救い出すため、どんなにすばらしい計画をもっておられるか。イエスさまが、ご自分の命を与えるために、世に来てくださったこと。イエスさまは、世の終わりまでいつでも私たちと一緒におられること。そうしたすべてのことを、弟子たちに約束してくださいました。

イエスさまが約束された「真理の霊」である聖霊は、このようなイエスさまの約束を、弟子たちの心にはっきりと教えるために、天の父なる神様のもとから送られるのです。真理の霊・聖霊は、天の父と共におられました。この真理の霊は、父である神さまと、まったく一つであります。そして、真理の霊が来られることは、イエスさまの強い御心でした。天の父と、御子であるイエスさまが、真理の霊を送って弟子たちを助けてくださるのです。天の父である神さま、独り子イエスさま、そして真理の霊。ひとりの神さまが、このように力と栄光と恵みを傾けて、私たちの救いのために働いてくださるのです。なんといいましょうか。

真理の霊である神は、とくにイエスさまについ

て、誤りのない証しをしてくださいます。イエスさまのことを、教えてくださいます。弟子たちは、あまり良い生徒ではなかったのに、聖霊が来てくださったおかげで、イエスさまのこと、信仰のこと、天国のこと、すべてのことを、はっきり理解することができました。イエスさまのことを、人びとに教えることができるようになりました。弟子たちが、真理の霊から教えられ、学んだ一つ一つが、私たちの持っている聖書に記されています。

真理の霊は、私たちが聖書を学び、日曜学校の礼拝をしているときも、私たちを教えておられます。日曜学校の先生の言葉から、イエスさまの恵みが私たちに伝えられます。先生の口を用いて、私たちに真理を教えてくださいますのは、真理の霊・聖霊です。聖霊の神様は、私たちがお祈りするとき、聖書を読んでいるとき、賛美歌を歌うとき、いつも私たちの心において、私たちがまっすぐイエスさまの恵みを信じるように、働いておられます。

わたしが聖書を読み始めたある日、ちょうどヨハネ福音書11章のラザロさんのところを読んでいます。ラザロさんが死んで、人々は嘆き悲しんでいます。でもイエスさまは、ラザロの姉妹マルタに言われました。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる」。聖書を読んでいるとき、この文字が、ピカピカと光り輝くように思えました。聖書の文字が、光を放つように見えました。そのとき、「復活であり命であるイエスさま」を信じようと、心に決めたのです。あのとき、真理の霊・聖霊が、わたしの心を照らしてくださったのだと思います。

聖書の言葉が、少し分かるようになった！ そんな素晴らしい恵みを受けるときは、かならず、父と御子と聖霊である神さまが、私たちのために共に働いておられるのです。 (小野静雄)

[今週の暗唱聖句] ヨハネによる福音書 15章26節 (部分)

父のもとから出る真理の霊が来るとき、その方がわたしについて証しをなさる。

〈ねらい〉

聖霊なる神に主に焦点をあてる。聖霊がたんなるパワーのようなものではなく、父なる神・子なる神と同じく人格ある神であることを教える。

〈展開例〉

礼拝で、神さまは三人だけひとりです、というお話を聞きました。三人というのは誰々でしたか？ そう、父なる神さま、子なる神さまのイエス様、そして聖霊なる神さまでしたね。この三人は別々の神さまではなく、一人の神さまですよ、と聖書は教えています。なんだか良く分からない、と思うでしょう？ そうだと思います。でも、聖書をよく読むとそう書いてあるのです。少しわかりやすくするためにお話してみます。

みんなのお父さんは、家ではあなたのパパだけだけど、お仕事をなさる会社員（父親の職業がわかれば個別に）ですし、お母さんの夫です。でも一人のお父さんです。これと同じではないけれど、少し似ています。

先生は子どもの頃、イエス様のお話をお弟子さんみたいに聞きたかったなあ、とよく思いました。イエス様のお顔を見て、本物の声が聞きたかった

のです。握手もしたかったなあ、と思いました。優しい声で「大丈夫だよ」と言って欲しいときもありました。

ところが、今もイエス様が生きていらっしゃる時と同じように、わたしたちを教えてください、守ってくださる方がおられるのです。それが聖霊の神さまです。だからわたしたちは、今もイエス様と一緒に過ごしているのと同じです。目には見えなくても、聖霊の神さまが、いつもわたしたちを抱いて、頭を撫でて、「心配ないよ」と言っています。聖霊の神さまがいらっしゃらなければ、先生は教会へ来ようとは思わなかったでしょう。聖書のお話なんか、全然わからなかったと思います。それは大人も子どもも同じです。聖霊の神さまはいつだってわたしたちの強い味方なのです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、聖霊の神さまがいつもいっしょにいてくださってありがとうございます。そして今日、教会に連れてきてくださったこと感謝します。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**「シオンテシ グァティペ」をうたいましょう**

「シオンテシ グァティペ」（日本基督教団出版局『こどもさんびか（合本、2）』142番）

- 礼拝でうたったかもしれませんが、知っている讃美歌ならなおさら良いと思います。
- 中国語の歌詞にも挑戦してみましょう。その場合は1節だけとか3節だけにしても。口伝えにはつきり教えれば意外と早く楽しんで覚えます。中国で讃美歌を歌っているお友だちがいることにも目を向けてみましょう。
- 教会に中国語をご存知の方がおられるかも知れません。発音を教えていただけると、良い交わりの中にもなるでしょう。
- もし一度も歌ったことのない場合でも、短い旋律ですから、教師が旋律を正確に覚えて臨めば大丈夫です。

〈ねらい〉

三位一体の神さまの、それぞれの働きを知る。
そして特に、聖霊なる神さまによって私たちが聖書を理解し、神さまを愛することができることを覚える。

〈展開例〉

1. 「三位一体」というのはとても難しい教えます。しかし、キリスト教でとても大事な教えます。

「三位一体」は、神さまは唯一である、ということ。決して三つの神さまが一つになっている、ということではありません。父、子、聖霊という三つの位格（難しい！）をもたれる唯一の神です。

2. この教えは、本来的に人間の理解を超えていることです。それでも、あえて人間の世界で対応するような比喻を用いて、三にして一であるお方を説明することができないでしょうか。

例えば、水は常温では液体ですが、凍れば氷になり、温めれば水蒸気になります。これらは本来同一のものですが、三つの違う状態です。

もちろん、このような説明では無理があるでしょうが、何らかの取っ掛かり、示唆は与えられるのではないのでしょうか。

3. 父なる神さまの働きは、世界を創造されたことです。

4. 子なるイエスさまの働きは、十字架と復活により、救いをもたらして下さったことです。

5. そして、聖霊なる神さまの働きは、イエスさまの救いを、私たち一人ひとりのものと、現実に、具体的に、して下さることです。

6. 主イエス・キリストは、私たちのために十字架の上で死なれました。

この主イエス・キリストを、私の救い主と信じ、告白するならば、誰でも罪赦され、救われます。

それで、何よりも大切なことは、主イエス・キリストを信じることです。では、どうしたら信じることができるのでしょうか。

7. このために働いてくださるのが聖霊です。主イエス・キリストの十字架はこの私のためであったということを、聖霊は、心から私たちに納めさせてくださいます。そのように心を照らし、励まし、導いてくださいます。

8. さらに聖霊は、神さまを信じる私たちすべてに、絶えず力と知恵と勇気を与えてくださいます。

それで、聖書の中のわかりにくい箇所も、祈って読むならば、それを理解できるようにしてください。

また、私たちがいつも神さまを愛し、神さまの恵みの中で生きようと、導いてくださっています。

9. こうして、父・子・御霊なる神さまがまさに一つとなられて、私たちの救いと信仰と生活のために、思いと力を傾けてくださっていることは、本当に感謝すべきことではないかと思います。



〈ねらい〉

わたしたちの神は「三位一体」であることを学ぶ。

〈展開例〉**○丸暗記しましょう**

わたしたちの神さまは「父・子・聖霊なる三位一体の神」です。皆さんにはぜひ、いま私が言ったとおりに丸暗記してほしいと思います。皆さんは低学年の頃にあの難しい(?)九九を覚えたはずです。あれを暗記することができたのですから、「父・子・聖霊なる三位一体の神」という言葉を覚えることくらい簡単ですよ?

「ちょ、ちょっと待って! 神さまはどうして三位一体なの?」と思う人がいるでしょうか。いるかもしれませんね。その質問に「なるほど、そうか。分かったぞ!」と納得していただけるような答えをすぐに言える自信はありません。すぐに答えられないのは、先生がちゃんと勉強していないからではありませんよ! そういうことではなくてね……その質問は「なぜあなたは人間なの?」と聞かれるのに似ているからです。そんなことをズバッと聞かれても私は「だって人間なんだもん」としか答えられません。逆に質問してみましょうか。「どうして三角形の面積は『底辺×高さ÷2』なの?」と聞かれたら、皆さんならどう答えますか。「だってそうなんだもん」とか「学校の先生がそう教えてくれたんだもん」というくらいのことしか答えられないと思いませんか。他にもいろいろありますよ。「どうして地球はあるの?」と聞かれたときにはどう答えますか。それは「地球はどのようにしてできたの?」という質問と同じではありません。「地球が存在する理由は何ですか」という質問です。「だってあるんだもん」としか答えられないという人、いませんか?

わたしたちの神さまが「父・子・聖霊なる三位一体の神」であることは、人間が決めたことではないし、教会が考え出したことでもなく、神さまが“初めから”そのような方なのです。ですから

皆さんには神さまはそういう方なのだ丸暗記してもらうしかありません。全世界のキリスト教会が神さまはそのような方(父・子・聖霊なる三位一体の神さま!)であると信じています。

○「三位一体の神」を最初に信じた人々

でも、いまの説明だけでは「ごまかされた」と思われるかもしれません。もう少しちゃんと説明してみますね。

「父」だけではなく「子」も、そして「聖霊」も神さまであるということを最初に信じた人々にとって最も大切だったことは「あの恐ろしい十字架の上にはりつけにされて死に、三日目に復活されたイエスという方が“神さま”である」ということと、「わたしたち人間の心の中にいま宿ってくださっている聖霊という方が“神さま”である」ということでした。なぜならその人々は天地万物を創造された神さまのことは昔から信じていましたし、旧約聖書を通してしっかり学んでいたからです。

その人々がイエスさまと出会い、またその人々の心の中に聖霊が宿ってくださっていると分かったとき、「あっ! あのイエスさまと、この聖霊は、わたしたちが昔から信じてきた父なる神さまと“同じ方”である」と信じたのです。“同じひとりの方”が、まず最初に天地万物を創造して下さり、次に十字架と復活を通してわたしたちを罪の中から救い出してくださり、さらに救われた人々の集まりである教会を生み出してくださり、そしてわたしたち一人ひとりの心の中に宿ってくださり、わたしたちをいつも助けてくださっているのだ、と信じたのです。

〈お祈り〉

神さま、あなたが「三位一体」であることを学びました。わたしの心の中に宿っておられるあなたを、いつも信頼することができますように。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 「三位一体」についての基本的な知識を、私たちの教会の信仰規準から学ぶ。
2. 「三位一体信仰」は神が聖書において啓示された真理であることを、聖書を読んで確認する。

〈子どもカテキズム〉

問10：私たちの神さまには、いくつの位格がありますか。

答：真の神さまには、三つの位格があります。
御父なる神さまと、御子なる神さま（イエスさま）と、聖霊なる神さまです。
この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

〈展開例〉

1. ウェストミンスター大教理問答第9問から、「三位一体」について考える

問9：神には、いくつ的人格(位格)がありますか。

答：神には、三つ的人格(位格)があります。
父と子と聖霊です。これらの三つは、人格的固有性によって区別されるけれども、本

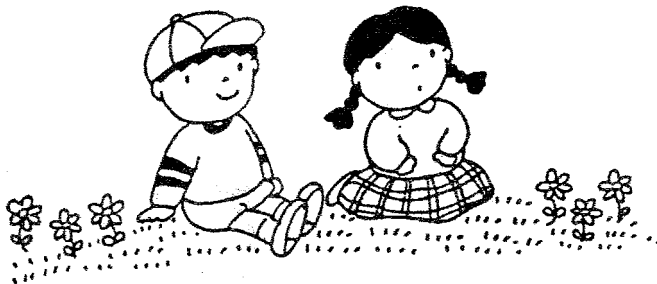
質において同一であり、力と栄光において等しい、ひとりの、まことの、永遠の神です。

- 「一つの本質を持つひとりの神」の中に「父・子・聖霊」という人格的な区別（交わり）がある。

2. 「三位一体信仰」は、聖書によって啓示された真理

- 神は、聖書を通して、「神はただお一人しかおられない（子どもカテキズム問8、申命記6:4、コリント一8:4）」ということと同時に、「その“ただ一人の神”の中に、“父・子・聖霊”という人格的な交わりがあること」を教えている。この「三位一体信仰」は、人間の想像や哲学的な思索による発見ではなく、神が、御言葉によって、「わたしは、こういう者である」と啓示された真理である（ハイデルベルク信仰問答25）。

- 三位格について教えている聖書箇所を読んで確認する（マタイ3:16～17、28:19、ヨハネ1:14、18、14:26、15:26、コリント二13:13、ガラテヤ4:6、テトス3:5～6）。



〈聖霊は教会を教え導かれる〉

使徒言行録の時代、聖霊は教会を直接導き、指導を与えておられました。アンテオケ教会にパウロとバルナバを宣教師として派遣するように命じ(13:2)、そのパウロに伝道旅行の途上でアジアではなく、マケドニアに行くように告げました(16:6,7)。また教会の将来を左右する重要な会議において指導権をとられ、その決定を導かれました(15:28)。今日聖霊は直接的に幻や啓示によって導かれることはありませんが、そのために著された聖書によって、教会の行くべき道を指し示されます。パウロはエフェソの長老たちに「聖霊は、神が御子の血によってご自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督者に任命なさったのです」(使徒20章28節)と語りました。聖霊は今日、ご自身が書き著された聖書と、それを解き明かす教師、牧師、それに群れを治める長老といった教会役員によって、ご自身の教会を治め、また導かれるのです。

〈職務に召し、任職し、能力を与える聖霊〉

そこで神がキリストのからだなる教会を建て上げ、そこで聖徒たちを整えて奉仕の業をさせ、互いに仕えあっていくために与えられた賜物が、教会に与えられた教職者と役員です。神は無秩序の神ではなく、秩序の神であり、キリストのからだの一つのものとして有機的に結び合わされ、形成されていくために、そして各部分がそれぞれの働きに応じて、ふさわしく機能し働き、また用いられていくために、この聖なる職務に召され、任職される奉仕者を立てられたのです。教会の教職者と役員は、聖霊からの賜物です。聖なる者たちを奉仕の業に適した者として、キリストの体を造り上げてゆくために、聖霊は「ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を福音宣教者、ある人を牧者、教師とされた」のです。(エフェソ4:11~16、コリントー12:28~30)

このような職務に召し、任職し、能力を与えられるのは聖霊です。バルナバとパウロを聖別してご自身の職務に就かせ、それに必要な能力と賜物を与えられたのは聖霊でした(13:4,8,9節)。その聖霊によって教会に監督者として立てられた者たちによって、福音宣教や教会形成の業がなされるように導かれるのも聖霊です。パウロの宣教を導いたのは聖霊でした。こうして真理の御霊は主イエスの約束の通りに、わたしたちを真理に導いてくださるのであり(ヨハネ16:13)、そのためにご自身の器を用いられる、それが教職者であり役員なのです。聖霊は、彼らに教会を教える務めと治める務めを与えられ、また彼らを通してその働きをなさるのです。こういった教職者と役員の権能は、教会の頭として天に挙げられ、神の右に座しておられるキリストの、贖い主としての王権に根拠づけられたものですが、その王権の代理者、代行者として、教会役員を召しだし、任職し、お立てになるのは聖霊です。それによって聖霊は、キリストの体なる教会を建て上げ、御父と御子との贖いの業を完成してくださるのです。

こうして「神は、教会の中にいろいろな人をお立てになりました。第一に使徒、第二に預言者、第三に教師、……」(コリントー12:28~30)。「わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、……精を出しなさい」(ローマ12:6~8)。それぞれを教会の働きにお立てくださった聖霊は、わたしたちにそれにふさわしい能力と賜物とを与えてくださっています。ですからわたしたちは引込み思案になって、その聖霊からの召しと賜物を無駄にしてはなりません。「あなたに与えられている神の賜物を、再び燃え立たせるように勧めます。あなたにゆだねられている良いものを、わたしたちの内に住まわれる聖霊によって守りなさい」(テモテニ1:6,14)と勧められます。(三川栄二)

子どもカテキズム

問10 私たちの神さまにはいくつの位格がありますか。

答 真の神さまには三つの位格があります。

御父なる神さまと御子なる神さま（イエスさま）と聖霊なる神さまです。

この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

〈イエス・キリストは神か人か〉

前回のところでも申し上げましたが、三位一体の教理は、哲学的な思想から始まったわけではありませんでした。むしろ、名もない普通のクリスチャンたちが、父なる神を信じ、イエス・キリストを信じ、聖霊なる神さまを信じて、祈り、礼拝し、依り頼んできた、現実の信仰生活がまずそこにはあったのです。それがあったからこそ、いろいろな異端が現れてきた時、まさに実存をかけ、命を懸けて、受け継いできた信仰を守り通そうとしたんですね。初代教会の弟子たちが実際に触れ合ったイエス・キリスト、その生の感触を伝え聞いた信仰者たちが依り頼んだイエス・キリストは、神でもあり、人でもあるお方でした。人であられるからこそ、私たち人間の弱さを真に思いやってくさるし、神で在られるからこそ全面的に身を委ねることができるのです。このような主イエス・キリストとの実際の交わりがあったればこそ、イエス・キリストのことを神でないとか人でないとか言う異端に対して、断固として反対しました。「百聞は一見にしかず」と言ったらよいでしょうか。「実際に会って話をしたこともないくせに、イエス様の何が分かるっていうの？」という気持ちと言ってもよいかもしれません。

〈二位一体にならないために〉

さて、ここで気をつけたいと思いますのは、確

かに、三位一体の教理の要はイエス・キリストなのですが、それだけが全てであるかのように考えてしまいますと、結果として「三位一体の神様」ではなくて、「二位一体の神様」を信じているということになりかねません。つまり、聖霊なる神さまにも十分注目しませんが、私たちの信仰生活は健全で十分なものにならないのです。頭の知識としては「三位一体の神様」と信じていると言いつつ、実際は聖霊なる神さまのことはほとんど忘れていて、「二位一体の神様」を信じているということが起こりうるんだと思うんです。実際、現実の信仰生活において、聖霊なる神さまはなくてはならぬお方です。なにしろ、このお方は、イエス様の代わりに天から遣わされた「もう一人の助け主」なのです。また、聖霊なる神さまが私たちの心に働きかけてくださいますと、せっかくのイエス様の救いが無駄骨になってしまうのです。つまり、どこか遠いところの話になってしまつて、「私の」救いにはならないわけです。聖霊なる神さまは、イエス様の命を私たちに分け与えて、私たちの内に住んでくださるお方ですから、このお方のことを抜きにして信仰生活を送りますと、暗く冷めた信仰生活になってしまうのです。そういうわけで、聖書からより深く、聖霊なる神さまのを知る事が、三位一体の神様を信じて歩む信仰生活にとっては、すごく大切なことなのです。
(梶浦和城)

テキスト 使徒言行録 20章28～32節
カテキズム 子どもカテキズム 問10

〔単元のねらい〕

キリスト教の基本教理である「三位一体」の真理は、それ自身が教会と世界の救いにかかわる重大な教えです。三位一体の神こそが、滅び行くはずの世界に救いの光りを届けてくださいます。独り子を与えるほど世を愛し、御言葉を啓示し、聖書を靈感し、神の恵みを証しする証人たちを送り出されるのは、三位一体の神です。使徒言行録のこの箇所では、三位一体の神が、教会の建設とその進展のため、一致して働いてくださる恵みが描き出されています。三位一体の真理は、ふだんの教会生活のなかで実際に経験している、生きた恵みです。とりわけ教会の形成と運営の中心に臨在される、聖霊の働きに目を注ぎながら、三位一体が遠い真理ではなく、身近な現実であることを学びましょう。

「教会を立ててくださった神さま」

こうして日曜学校の「子ども礼拝」を続けています。今朝も、神さまが私たちを、日曜学校に招いてくださいました。神さまが招き、神さまが導き、神さまが私たちを愛し教えてくださいます。何よりも神さまは、大きく深い愛をこの世に伝えるために、御子イエスさまを私たちに与えてくださいました。イエスさまを通して、私たちは、神さまが私たちの「天のお父様」になってくださることを知りました。「天にまします我らの父よ」と祈ることができるのは、イエスさまのおかげです。

使徒言行録で、パウロさんは、神さまの恵みと救いを、世界の人びとに伝える「伝道」の仕事を続けています。長い旅を続けました。たくさんの人びとに、イエスさまの救いと信仰の喜びを伝えました。神さまは、いつもパウロの伝道を導き強めてくださり、多くの人がイエスさまを信じて信仰にはいりました。パウロさんだけでなく、イエスさまの弟子たちが伝道したとき、かならず「教会」が生まれました。信じた人びとは、一人ひとりが勝手に信仰の道を歩んだのではなく、教会につどい、教会とともに歩み、教会のために自分の信仰をささげたのです。聖書の信仰は、教会に生きる信仰です。教会に集う信仰です。教会をと

して働く信仰であり、教会をしっかりと支えてゆく信仰です。私たちの小さな信仰は、教会に生きることで守られ、教会に集まることによって強くされるのです。

「聖霊は、神が御子の血によって御自分のものとなされた神の教会の世話をさせるために、あなたがたをこの群れの監督に任命なされたのです」。今、パウロさんは、エフェソの教会の「長老」の人びとに、お別れの言葉を語っています。エフェソの教会は、パウロさんやほかの弟子たちが、一生懸命に伝道して生まれた教会です。でも、パウロさんは今、急いでエルサレムへの旅をしているために、エフェソに立ち寄ることができません。それで、エフェソの長老たちを呼び寄せて、最後の言葉を語ったのです。

「どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください」。パウロは、祈るような気持ちで、長老たちに話しかけています。長老の仕事は、教会の群れ、教会に集う人びとのことに「気を配る」ことです。教会の人びとが、道に迷った羊のようにならないために、気を配るのです。皆がイエスさまを信じる信仰にしっかり立つように、気を配るのです。神様の恵みと愛から、決して離れないよう、互いに励まし合うよう、気を配るのです。

お互いに気を配ること。それは、「長老」という人びとだけの仕事ではありませんね。日曜学校の先生たちも、皆さんのことをお祈りし、皆がイエスさまと一緒に歩めるよう、気を配っています。私たちも、友だちや家族のことに、気を配ることができます。友だちのために祈ることが出来ます。家族のために祈ることが出来ます。家族や友だちが、イエスさまを信じて救われるようにお祈りすることができますね。そのようにして、私たちも、誰かのことに気を配ってあげる。それが「教会」に生きるということです。

教会が、どのようにして生まれたか。パウロさんは、一言で、力強く教えています。「神が御子(イエスさま)の血によって御自分のものとなさった神の教会」。教会は、「神の教会」です。集まっているのは「人」ですが、教会は「人」のものではなく神さまの教会です。なぜでしょう？

神さまが、独り子イエスさまの「血」によって、教会を生み出し、教会を自分のものとして立ててくださったからです。神さまは、独り子イエスさまを与えるほど、私たちを愛してくださいました。そして、イエスさまは、罪のなかで死ぬほかなかった私たちのために、十字架について苦しみ、そして「血」を流して罪のゆるしと永遠の命の恵みを与えてくださったのです。こうして、父なる神さまは、ご自分の御子の血という、たいへんな値打ちのあるもので私たちを滅びの中から、救い出してくださいました。ですから、私たちはイエスさまの尊い血によって、神さまのものとして買い取られたのです。私たち一人ひとりを買って取ってくださっただけでなく、同時に教会を、神の教会として買い取ってくださいました。ですから、教会は誰のものでもなく、天の父なる神さまのものです。神さまが、私たちを愛し、教会を愛し、ご自分の「ひとみ」のように大切にしてくださいるのです。

ですから、この大切な教会が、傷ついたり、失われてしまうことは、神さまをとて悲しませることです。神さまの教会が、神さまの教会らしく、元気に、生き生きと、育ってゆく。そのために「聖霊」なる神さまは、教会のなかで、特別な働きをしてくださいます。天の父が、御子イエスさまの血によって教会を買い取り、そして聖霊なる神さまが、この教会をしっかりと守ってください。ここにも、「父と御子と聖霊」の一人の神さまの、すばらしい愛の働きがありますね。私たちの小さな教会が、こうして守られて立っている。それは、「父・子・聖霊の一人の神さま(三位一体の神さま)」の、特別な恵みによることです。

聖霊の神さまは、私たちの教会、世界の教会に命を与える方です。先週も学んだように、聖霊は、「イエスさまの御心によって、父なる神さまのもとから送られた方」です。ですから、「神の教会」が命をもって力強く前進するために、聖霊は教会を見守っておられます。「長老」という働きを生み出してくださいましたのも聖霊の働きです。牧師さんや長老さん、執事さんや、日曜学校の先生たちを、私たちのために生み出してくださいるのも聖霊の神様の恵みです。

私たちは、生まれてから今まで、お父さんお母さんや、他のいろいろな人びとの世話をうけて育ちました。だれの世話も受けずに大きくなった子どもはいませんね。教会は、私たちの信仰の世話をしてくれます。牧師さんや、日曜学校の先生たちは、私たちがまっすぐに神さまの子どもとして成長するよう、世話する人たちです。神さまの愛を信じ、皆が「神の子」として成長するよう、祈りながら世話をします。

日曜学校は父・子・聖霊の神さまによって生まれ、守られる教室です。聖霊の神さまが教えてくださいる日曜学校礼拝です。安心して聖書を学び、心から神さまを信じましょう！ (小野静雄)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 20章28節前半

どうか、あなたがた自身と群れ全体とに気を配ってください。

〈ねらい〉

三位一体の神さまのお働きの目的は「人々の救い」にあること、それは「教会」（＝群）を通して働かれるということ学ぶ。

〈展開例〉

今日も教会へ来ることができて良かったですね。先生もみんなに会えて嬉しいです。

先週習ったように、聖霊の神さまが教会のみならず一人ひとりの心に「教会へ行きましょう」と教えてくださったので、みなさんも先生も今日教会へ来ることができました。「そんなことないよ、自分で勝手に来たんだよ」と思っているお友だちがいるかも知れません。聖霊の神さまは目に見えないのでそう思うのはわかります。でも、テレビを見ないで、お友だちと遊ぶのを後にして、もっと寝ていたいおふとんから起きて教会に来ることができたのは、聖霊の神さまのお働きなのです。

教会には大人も子どもも、お年寄りも赤ちゃん

もいます。元気な人もそうでない人もいますね。可愛いみんなもいます！ 牧師先生やずっと長い間教会に来ている大人の人や教会学校の先生もいます。神さまはこういう全部の人の中で、父なる神さまとイエス様のお心を教えて教会とみんなを守ってくださいます。教会はそういう大切な所です。そうして神さまに教えていただいたように生きていこう、働こうとみんなは願っているのです。大人だけでなく、子どものみんなでも神さまのために働くことができます。「一緒に教会へいこうよ！」とお友だちを誘う力も神さまはみんなにくださっています。たくさんのお友だちと教会に来られるといいですね。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、イエス様と聖霊の神さまをくださってありがとうございます。今週も毎日、一緒にいて守ってください。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

教会堂の工作をしましょう

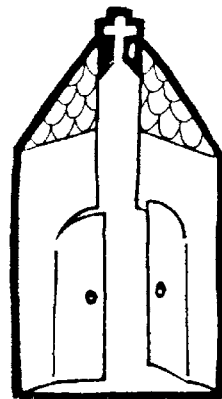
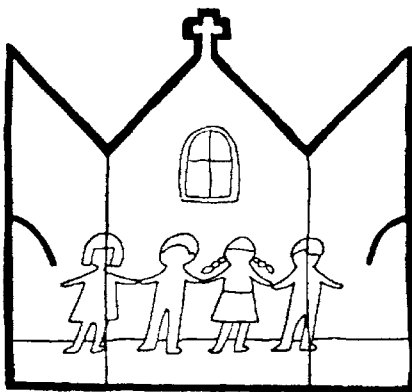
○準備するもの

下図のように下絵を描き、適当な大きさにコピーしたもの。

（あらかじめ切り抜いておいても良い）

クレヨン等。はさみ。

- 会堂の内外をクレヨン等で色をぬったり、会堂内に大勢のお友だちの顔や姿を描ける子は描いてみます。



〈ねらい〉

三位一体の神さまと教会との関係を考える。特に、聖霊が教会を整え、導かれることを覚える。

〈展開例〉

1. 「教会」って何ですか？ よく知ってますね。皆さんが今いる、このところが教会ですね。

ただし、一番大切なことは、教会堂という建物ではなくて、皆さん一人ひとりが（つまり信じる者たちが）教会である、ということです。

2. 教会はどのようにしてできたのでしょうか。皆さんのいる教会堂は、いつ頃できたのでしょうか。

世界中に教会はいっぱいありますが、どの教会も、皆同じようにしてできています。それは、主イエス・キリストが御自身の血をもって買い取ってくださった、ということです。

ですから、教会の所有者、頭は主イエス・キリストです。人間が所有しているわけではありません。人間が決定権を持つわけではありません。

3. 教会の中には、いろいろな働きをする人たちがいますね。日曜学校の先生がいます。牧師さん、長老さん、執事さん、といった人たちもいます。何をしているのでしょうか。働きは少しずつ異なりますが、共通して言えることは、神さまを誉め称え、神さまに仕えたと共に、全ての人たちと一緒に神さまを礼拝し、讃美することができるようにと、人々のため配慮し、心配りをするという働きをしています。

4. そのような働きは、困難な働きです。ですから、皆、祈りながら、その働きをしています。

御霊なる神さまが、そのような働きに必要な知恵と力を、すべて与えてくださいます。そのことを確信して、祈っています。ですから、皆さんも、そのような働きをしている人たちのことを覚えて、祈ってください。

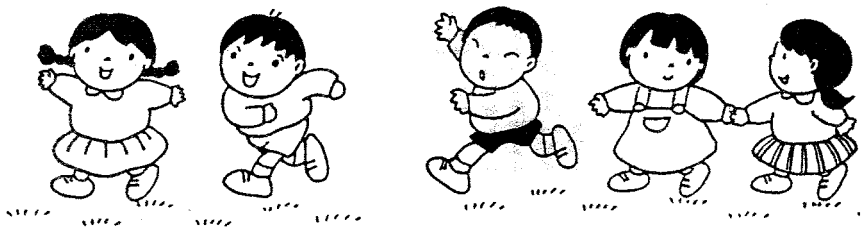
5. そして、教会における働きは、先生などの「職務、役」のある人だけのものではありません。誰でも、神さまのために必要な働きをするように招かれています。神さまへの奉仕を神さま喜んでくださいます。

6. ですから皆さんも、ぜひ教会や日曜学校における奉仕に、積極的に加わってください。恥ずかしいとか、誰か他の人がやるだろう……、というのではなく、進んで奉仕しましょう。

お祈りを忘れずに。御霊なる神さまが、助け、導き、豊かに祝福してくださいます。

教会における奉仕で大切なことは、うまくやろうとか、人に立派だと褒められるようにやろう、といったことではありません。心から神さまに信頼して、行うことです。

7. それから、教会の外でも、神さまのために、善いことは進んで行ないましょう。いつも神さまは共にいてくださり、必要な助けと祝福とを絶えず与えてくださいます。



〈ねらい〉

「三位一体の神」、特に「聖霊」がわたしたちの心に宿ってくださることの意味を学ぶ。

〈展開例〉**○人間の心に宿ってくださる聖霊**

先週お話しした、わたしたちの神さまが「父・子・聖霊なる三位一体の神さま」であるという大切な話をまだ覚えていますか。「忘れたよー」と言わないでくださいね。

さて、今日のお話は、“神さま”である「聖霊」の大切なお働きは何かということです。

「聖霊」という方は、わたしたち人間の心の中に宿ってくださる神さまです。ですからもし皆さんが他のだれから「神さま、神さまって言うけど、どこにいるの？」と聞かれたときは、「ここにいるんだよ」と自分の胸あたりを指で差して言っても決して間違いではありません。神さまは宇宙の向こう側におられると信じることも間違いではありませんが、同時にわたしの心の中にもおられるのです。

○大きな声で祈らなくても

また、皆さんは毎日お祈りしていますよね？でも、皆さんの中には、お祈りしながら、時々またはいつも、「このお祈りのことを教会の人は『神さまが聞いてくださる』とか言ってるけど、これを本当に神さまが聞いてくださっているんだろうか。お祈りって、実はわたしの独り言？」と疑問を感じている人はいませんか。

心配することはありません。神さまは皆さんのお祈りをちゃんと聞いてくださっています。なぜなら神さま（聖霊なる神さま！）は皆さんの心の中に、つまり、皆さんにとっていちばん近いところに、いつも宿っておられるからです。わたしたちの祈りの声が、わたしたちの心の中に宿っておられる神さまに、聞こえないはずがありません。わたしたちは、宇宙の彼方のような遠い場所におられる神さまにお祈りする必要はありません。大きな声を張り上げなければ、お祈りの声が神さま

には届かないということもありません。わたしたちの祈りは決して独り言ではありませんが、小さな声で自分の心に言い聞かせるように祈ることができるのです。

○聖霊は人間「と共に」働いてくださる

もう一つ大事なことをお話しておきます。「聖霊なる神さま」は、わたしたちの心の中に宿ってくださいます。しかし、その場合でも、聖霊「と共に」わたしたち自身の心もちゃんとあります。聖霊なる神さまは、人間「と共に」働いてくださり、真の信仰を与えてくださり、わたしたちを慰めてくださる方なのです。

わたしたちの心の中には、大切なものがたくさん詰まっています。家族のみんななどの思い出。学校の先生や友達が教えてくれた言葉や知識。大切な人と交わした約束。テレビや新聞やインターネットのニュースで見た社会の問題。自分の頭で一生懸命に考えたこと。それらのものがわたしたちの心の中にたくさん詰まっています。その中には、大好きだった人との別れや、涙が出るほど悲しい経験をしたけれども多くの人に励ましてもらって乗り越えることができたときの思い出などもあるでしょう。

聖霊がわたしたちの心の中に宿ってくださると、それらすべてが無くなってしまうわけではありません。聖霊は人間の心の中身を消去する消しゴムではありませんし、人生をはじめからやり直すためのリセットボタンでもありません。聖霊が与えてくださる信仰によって生きる人は、「人間らしい心を失う」わけではありません。「洗脳」という嫌な言葉を知っている人がいるでしょう。わたしたちの教会では、そういうことは絶対にしません。どうか安心してください。

〈お祈り〉

聖霊なる神さま、悲しいときには共にいて、わたしたちの心を温め、優しく慰めてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

聖霊の働きについて理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問10：私たちの神さまには、いくつの位格がありますか。

答：真の神さまには、三つの位格があります。
御父なる神さまと、御子なる神さま（イエスさま）と、聖霊なる神さまです。
この三位は同質であり、三位一体の神さまです。

〈展開例〉

聖霊なる神の働きは多様であるが、おもな働きは、「私たち一人ひとりに対する働き」と、「教会に対する働き」との二つに区別して考えることができる。この二つのおもな聖霊の働きについて、今週と先週の説教を通して教えられたことを発表しあってみよう。

1. 「真理の霊」としての聖霊

○「真理の霊」である聖霊なる神は、罪で暗く

なっている私たち一人ひとりの心を明るく照らし、聖書の御言葉をとおして、真理（＝イエス・キリスト）に対する理解と信頼を与えてくださる。

○このような聖霊の働きについて教えている聖書箇所を読んで確認する（ヨハネ15:26～27、16:12～13、コリントー2:10～12、使徒5:30-32、エフェソ1:17～18）。

2. 教会を生み出し、育み、完成へと導く聖霊

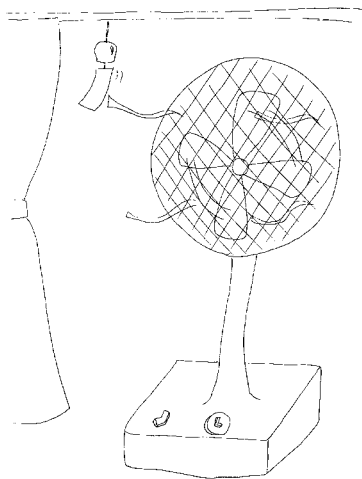
○教会を立てあげる聖霊の働きを、聖書を読みながら確認する。

ペンテコステの時に教会を生み出した（使徒1:4, 8, 2:1～4）。

弟子たちの伝道の働きを導いた（使徒13:2, 16:6～7）。

教会の会議を導き、教会が歩むべき道を示した（使徒15:28）。

教会の世話（配慮）をさせるために、役員を立てた（使徒20:28、エフェソ4:11～16、コリントー12:28）。



(1) 詩編139編の構成

詩編139編は6節ごとに4つに分類される。①神の全知(1～6節)、②神の偏在(7～12節)、③神の全能(13～18節)、④祈り(19～24節)。

ここでは1～12節までを取り扱う。二つの両極端の言葉を組み合わせることで中間項をも含む全てを意味するというユダヤ人の慣用的な表現方法を使用。(座る・立つ、歩く・伏す、前・後ろ、天・陰府、曙・海、夜・昼、闇・光)。

(2) 神はわたしを知っておられる(1～6節)

①わたしの行動と意思のすべてを(2～4節)。

言葉が口に上る前に、神は心の奥底までも読み取っておられる。

②わたしの過去・現在・未来のすべてを(2節)。

「遠くから」とは「遠い昔に」(イザヤ22:11)とも訳せる。まだ実現していないことさえ神は知っておられる。

③どのようにわたしを知っておられるか

「知る」という言葉の他に「究め」(1節)、「悟って」(2節)、「見分け」(3節)、「通じて」(3節)などという同義語が使われている。新改訳では「探る」(1節)、「読み取る」(2節)。「見分け」とは「ふるいにかける」こと。「悟って」とは「識別する」の意味。つまり、神はわたしの思いと行動の一つ一つを探り、識別し、読み取っておられるということである。

「前からも後ろからもわたしを囲み」(5節)とは、戦いのときに敵の町を包囲するように、わたしを取り囲んで(歴代上20:1)おられることをあらわす。「御手をわたしの上に置いてくださる」とは、神の支配権がわたしの上にあること。つまり、わたしを取り囲むように神の支配権がわたしの全領域にわたって及んでいることを示す。

「その驚くべき知識はわたしを越え あまりにも高く到達できない」(6節)。有限である人間は無限の神を把握できない。「ああ、神の富と知恵と知識のなんと深いことか。だれが、神の定め

を究め尽くし、神の道を理解し尽くせよう」(ローマ11:33)。

(3) 神はどこにでもおられる(7～12節)

詩人は神から逃れたいと願っているわけではない。仮定(たとい)の表現方法を用いて神の遍在性を表している。

(7節) 霊と御顔はほとんど同義。

(8節) 天は高くて人が登ることができない所。陰府は旧約では死者の住まいと考えられていた低い所で、神との関わりを断たれた所とされていた(詩編6:6)。

(9,10節) 曙は東、曙の翼とは太陽の翼(マラキ3:20)と同じ詩的描写。海はパレスチナから地中海を見て西。駆っての日本語の意味は、走らせること。右の御手とは利き腕のこと。

(11,12節) 闇、夜もわたしたちを神から隠すことはできない。

7～12節をまとめると、たとい高い天、低い所に行ったとしても、たとい光の速さで東の果てから西の果てへと走ったとしても、上下、東西、神はどこにでもあまねくおられ、神の支配から逃れることはできない、闇も神から隠すことはできないという意味。

(4) キリストにあって神にとらえられる喜び

神の全知性と偏在性から、神の目には私の思いと行動の全てが知られていることになる(ヘブル4:13)。罪ある人間にとってこれほど恐ろしいことはない。しかし、神がキリストにあってわたしたちを愛し、支配してくださるという信仰を与えられた者にとっては、神にすべてを知られていることは大きな慰めであり、励ましである。わたしたちを驚くべき力でとらえてくださる主権者なる神をあがめ、自らをゆだねるとき、「神よ、わたしを究め、わたしの心を知ってください(23節)」という祈りへと導かれる。(エフェソ1:19～21) (漆崎英之)

子どもカテキズム

問11 私たちの神さまの全能、主権とは何ですか。

答 私たちの神さまが、

すべてのものを神さまの栄光のために定め、造り、保ち、支配しておられることです。

神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません。

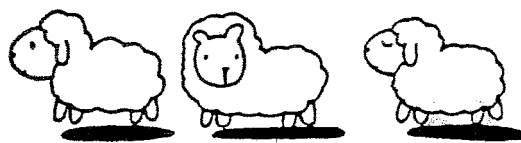
〈神さまの力を問う時〉

三位一体の「位格」や「同質」といった言葉と同様、この「全能」とか「主権」という言葉も、子供たちには少々難しいかもしれませんが、答えのところで言われているように、それは要するに、神さまの力ということですね。ですが、ここで考えてみたいと思いますことは、私たちが「神さまの力」を問う時というのは、どういう時だろうかということです。それはおそらく、いろんな困難や悲しみに出会った時とか、あるいは、全世界で起きている、様々な不幸で理不尽な出来事を見聞きした時ではないでしょうか。そのような時、私たちは無力さを痛感し、まるで困難や悲しみ、不幸で理不尽な出来事そのものが神であるかのように思ってしまうものです。しかし、そのところで聖書は語るのです、生きておられる本当の神さまは、そういったものを乗り越える力をお持ちなのだ、と。だから、この神さまに依り頼めば、それらの試練に打ち勝つことができるのだ、と。また、神さまの力を疑いたくなるような場面に出くわした時にも、ちゃんと神さまに深い考えがあってそうなさっているのであって、神さまに力がないということではないんだ、と。

〈私たちのリーダーである神さま〉

答えが語る通り、「神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません」と信じることは、何を意味するかと言えば、日常生活のどこにおいても、神さまを私たちのリーダーとして認めるということ、そして、このリーダーに、どうい場合でも聞き従うつもりだということです。このお方が一切を支配しているということは、どこか遠いところの話ではありません。「神さまが全宇宙を支配しているそうだが、そんなの関係ない!」というんじゃないくて、「神さまが全宇宙を支配しておられるので、私はこのお方にお従いするし、どんな時でも安心していられる」というのですね。なぜ、安心していられるかという、このお方が全世界を支配する仕方は、独裁とか暴政とかではなくて、ホントに愛と恵みに満ちたものであって、すべてのことを私たちの益になるようにしてあげようと、神さまが約束してくださっているからなのです。

そういうわけで、自分の家族であろうと、学校のクラスであろうと、あるいは塾とかクラブとか友達づきあいとか恋愛であろうと、神さまこそが私たちのホントのリーダーなんだと信じて歩む時、私たちは真の幸せを味わうことができるのですね。
(梶浦和城)



テキスト 詩編 139編1～10節
カテキズム 子どもカテキズム 問11

〔単元のねらい〕

今日から夏休みが始まります。楽しい夏休みとなりますように。また、それぞれの日曜学校のキャンプが祝福され、主の日では体験できない、豊かな霊的な体験、教師とのまたお互いの深い交わりのときが与えられますように。今の子どもたちにとって、夏休みの一つの課題は、安全に過ごすことであるかもしれませんが。海や山での事故より、対人の事故、つまり事件が案じられます。本日の課題は、神の聖定、神の主権です。私たちの人生は、偶然の連続で、何が起こってくるかははらどきどきして心配する必要はないこと。神さまの愛の力、善いお力がすべての領域を支配しておられる、特に、信じるわたしたちには、そうであることを、学べれば幸いです。そして、安心して遊び、安心して、すべてのことは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっていることを知り、自ら率先して、すべてのことを神の栄光のためになすことへと、子どもたちを解き放つ助け手となれるように祈りましょう。

「どこに行っても神さまは」

夏休みが始まりました。今年の夏休みが、皆さんにとって、すばらしい、楽しいときとなりますように、お祈りします。

どこか遠いところに行く予定のお友達もいるかもしれませんが。海や山に行くお友達もいるでしょう。そして何よりも、教会のキャンプと一緒に往けることを心から願っています。誰でもそうですが、生まれて初めて知らないところに行くときは、とても不安です。どきどきします。

あるテレビ番組で、「はじめてのお使い」というのをしていました。幼稚園のお友達が、初めてたった一人で、お使いのために、お店に買い物に行ったり、初めて、おじいちゃんおばあちゃんのいる町に、たった一人で電車に乗って泊まりに行くのを、テレビカメラで追いかけるのです。本人も、どきどきしているでしょうけれど、見ている先生も、どきどきします。

大人だって、初めての仕事をするときとか、仕事で初めての場所に行くとか、どきどきして、不安になることもあるのです。ですから、小さな子どもたちにとっては、なおさらだと思います。

さて、そんな僕たち私たちのために、今日の聖書の教えは、どれほど勇気と力を与えてくれるこ

とでしょうか。

今日は、詩編を学びます。詩人は、最初にこういいます。「主なる神さま、あなたはわたしのすべてを、どんなことでも知っておられます。」その通りです。神さまは、すべてのものを創造されました。何もお考えなく、お造りになられたのではありません。子どもの頃、粘土遊びが大好きでした。何を作ろうかなど、決めないで粘土をこねるのも好きでした。でも、神さまは、この宇宙や世界を、何のお考えもなく、偶然に造ってしまわれたのではありません。神さまは、それを深くふかく考え抜いて、どんな失敗もないほどに、ちゃんと御計画をお立てになった上で、お造りになられたのです。ですから、神さまのなさることに、どこにも間違いがないのです。

そんな神さまですから、先生のこと、あなたのことを何から何までご存知なのです。

「座るのも立つのも」とか「歩くのも伏すのも」とか、それは、僕たち私たちの毎日の普通の生活のことです。夜には、寝て、太陽が昇れば、遊んだり勉強したりします。そんな毎日の僕たち私たちがしていることを、神さまは何から何まで、ご存知です。

「わたしの舌がまだひと言も語らぬ先に」つまり、まだしゃべっていない、心のなかの思い、秘密の思いですら、神さまはご存知なのです。

「前からも後ろからもわたしを囲み、御手をわたしの上に置いてくださる。」とは、主なる神さまが、前からはもちろんのこと、目に入らない後ろからもわたしを包み、囲んでくださって、どんな敵や災いからも、わたしをお守りくださるということです。

僕たち私たちの主なる神さまのことを、そのすべてを知ることは決してできません。何故かといえば、僕たち私たちは、人間だからです。人間は、どんなに賢くても、脳みそを全部使っても、神さまのことを全部、分かったりできません。神さまは、宇宙の中にすっぽり、入ることもできません。どんなに大きな宇宙でも、神さまの方がもっとも大きく、偉大だからです。だったら、もっとちっぽけな人間は、なおさらですね。

詩人は、こんなことを考えてみました。「どこに行けば、あなたの霊から離れることができよう。どこに逃れば、御顔を避けることができよう。」でも、すぐにこう歌うのです。「天に昇ろうとも、あなたはそこにいまし 陰府に身を横たえようとも 見よ、あなたはそこにいます。」つまり、宇宙の果ての果てのどこまでも、死んだ後で行く場所にあっても、神さまから離れることはできないのです。

こんなことを考えてみた詩人は、神さまから逃げたいのでしょうか。自分のすべてを、自分のことであっても自分が知らないこと、あるいは、自分でも、もう忘れてしまっていること、そのような何から何まで知られてしまうというのが、嫌なのでしょうか。困ってしまうのでしょうか。だから、逃げようと、離れようなどと考えるのでしょうか。違います。正反対です。神さまに知っていただくことこそ、詩人の喜びなのです。それは、

この詩人だけではありません。先生も、まったく同じです。

先生のことを誰よりもご存知なのは、先生の奥さんでしょうか。お母さんでしょうか。はたまた友達でしょうか。先生自身でしょうか。それは、全部、違います。先生のことを全部、知ってくださるのは、先生をお造り下さった神さま、先生のことをよく考え抜いて、失敗のないようにと生かしてくださる神さまです。

皆は、自分の全部のことをお友達に言えますか？ 隠していることはありませんか？ なぜ、隠したくなるのですか。恥ずかしいからでしょう。そして、そんなことを知られたら、困るし、もう友達でいてくれなくなるかもしれないと心配だからでしょう。馬鹿にされてしまうかもしれないと怖くなるからでしょう。でも、主なる神さまは、あなたの全部を知ってくださって、そして、それを丸ごと受け止めて、愛してくださるのです。

そんなことがおできになるのは、あなたの神さまだけです。あなたは、この神さまに愛されているのです。だから、あなたも正直に、何でも主なる神さま、イエスさまにお話してよいのです。

何もかもご存知で、愛してくださる神さまが、この夏休みの間も、どこにいても、何をしていても、一緒にいてくださり、僕たち私たちを包んで、お守りくださいます。

今日の暗唱聖句には、この主なる神さまからすべてのものは出て、保たれ、向かっているとありました。そのすべての物のなかでも、僕たち私たちは、神さまの傑作、作品です。知らない内に、神さまに向かってゆくだけでは、もったいないですね。自分の方からも、神さまに向かって行きたいですね。そうすれば、どんどん、神さまの栄光があらわされて行くはずで。

夏休み、どこに行っても、何をしていても、神さまと一緒にいてくださいます。感謝して、神さまのために、何かできるとよいですね。(相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 11章36節

すべてのものは、神から出て、神によって保たれ、神に向かっているのです。

栄光が神に永遠にありますように、アーメン。

〈ねらい〉

自分の毎日の生活も歴史も宇宙の営みも全て神さまが治め、支配しておられること、その御支配に服することが人間の平安の源であることを学ぶ。

〈展開例〉

ロケットに乗って宇宙へ行った宇宙飛行士の人のことを聞いたことがありますか？ 宇宙から見る地球はとってもきれいだそうです。宇宙ロケットに乗る前には神さまのことをそんなに考えたことのなかった人が、帰ってきたら、神さまを深く信じる人になっていたということがありました。不思議ですね。空の高い高い所で神さまを見たのでしょうか。そうだと思います。もちろん目で見たわけではありませんが、神さまに出会ったのです。

宇宙には数え切れない位たくさんの星があり、ひとつひとつが色々な動き方をしています。宇宙が自然に生まれて勝手に動いているとしたら、しょっちゅうぶつかりっこしてしまうでしょう。そういうことがあちこちに起こって、宇宙も地球もめちゃくちゃになってしまっているでしょう。でもそういうことが起っていません。これは神さまが宇宙をお造りになり、そして一つひとつ

がちゃんと動くようにしてくださっているからです。

そういう美しい宇宙を見た宇宙飛行士は、宇宙で心で神さまに出会いました。宇宙飛行士になるために一生懸命お勉強をして、自分は宇宙のことは何でも知ってるぞ、科学で分からないことはないと信じていたけど、そんなことはない。自分が知っていることはほんの少しだと分かり、神さまを信じる人になったり、牧師先生になった人もいます。こんな素晴らしい世界は、神さまにしか造れない！ 宇宙を今も守っていらっしゃる神さまがいるんだ、このことをみんなに教えてあげたい！ そう思ったのだそうです。

ぼくたちわたしたちも神さまが造ってくださいました。宇宙の何よりも素晴らしく大切に人間を造ってくださいましたのです。そして今も守り続けてくださっています。(年中以下の生徒が多いクラスでは、言葉を平易に単純にお話を組み直してください)

〈お祈り〉

天の父なる神さま 宇宙を造り、ぼくたちわたしたちを造り、今日も守り愛していただきありがとうございます。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

宇宙の星じゃんけんゲーム

○遊び方

- ①ふたりひと組みになる。
- ②ふたりでじゃんけんをする。
- ③負けたほうが座り、勝ったほうがそのまわりを走って五回まわる。

時間内で何回でも。

- 人数が足りなかったら、赤ちゃん（お座りのできる）や、見学のお母さん、先生も加わって。

〈ねらい〉

神さまがすべてを守ってくださることを理解し、安心して神さまに委ねるように導く。特に、神さまを信じ、礼拝するために神さまがすべてを導かれていることを理解するように。

〈展開例〉

1. 皆さんは、十年後、二十年後、どこで何をしているでしょうね。

——あまりよく分かりませんね。あるいは、明日、明後日のことでも、正確には分かりません。

2. それでは、不安ですか。不安をもつお友だちもいるでしょう。明日がどうなるかは分からないのですから、もしかすると、明日起きてみたら、世の中がすっかり変わってしまっていたということが（SF小説のようですけれど）、あるかもしれませぬ。

そこまでのことは思わなくても、もっと小さなことで、心配なこと、不安なことが、いろいろあるでしょう。

3. でも、私たちのことやこの世の中のことなど、すべてのことを支配されていて、明日がどうなるか、十年後、百年後がどうなるかといったことを、すべてご存じのお方がいらっしゃったとしたら、本当に頼もしいと思いませんか。

そして、そのような方が実際におられます。神さまです。

4. それでも、もし私たちが神さまのことを知らなかったなら、いくら神さまが全知全能で、すべてのことを支配し、守り、導いておられるとし

ても、それはまったく私たちとは関係のないことになってしまいますね。つまり、不安や心配は、そのまま残るだけです。

5. ですから、大切なことは神さまを信じて、どこまでも神さまに従うことです。具体的には、神さまを礼拝し、讃美歌を歌い、お祈りをし、日曜学校に励んで出席したりする、ということです。

6. そのように神さまとの親しい交わりを持つ中で、私たちは神さまに心から信頼することができますようになります。

そして、神さまの御心がどのようなものであるかを、知ることができるようになるのです。

神さまは、私たちが本当に愛してくださっています。ひとりひとりを掛け替えのない子どもとして（他の誰でもない、〇〇小学校〇年生で、歌の上手な……（スポーツの苦手な……）〇〇ちゃん）愛してくださっています。

ですから、この神さまに信頼する限り、私たちは不安や恐れを離れ、大船に乗ったように安心して、生きることができます。

7. もちろん、神さまを信じ、お祈りしても、明日の細かなことがどうなるか、ということまでは分かりません。

しかし、神さまは私を愛してくださっているので、私に最善のことをしてくださる（たとえ一時的に辛いこと、苦しいことがあっても）と、確信できるのです。

8. すべてのことを守り、導いてくださる神さまを、感謝と共にはめたたまえましょう。

〈ねらい〉

神は「世界の主権者」であることを学ぶ。

〈展開例〉**○神さまはこの世界のことが大好きです**

わたしたちが住んでいるこの世界は、神さまが創造してくださったものです。そういうふうには聖書に記されていますし、またそういうふうにはわたしたちは信じています。

「創造」とは「つくること」です。皆さんは小学校の図工の時間に何かつくったことがあるでしょう。遠足のときに見た風景を描いたり、牛乳パックにきれいな包装紙を巻いて鉛筆立てを作ったり、のこぎりで切った材木を組み合わせて本棚を作ったり。

神さまがこの世界を造ってくださったときも、ちょうどそんな感じでした。神さまが、たったおひとりで、空の星、海や山や平地、草や木や花、すべての動物、そしてすべての人間を創造してくださったのです。

皆さんは、学校の図工の時間が好きですか。「大好き！」という人と、「ちょっと苦手です」という人と、「大嫌い！」という人が、それぞれいるだろうと思います。

これから質問したいのは「図工が大好き！」という人です。あなたは図工の時間にいろんなものを作っているとき楽しいですか。「まあもちろん楽しいですけど？」そうですね。図工が大好きな人たちは、自分の手でいろんなものを作っているときには、たぶん楽しくて楽しくて仕方がないのです。楽しいからこそ、大好きと感じるのです。「好き」という気持ちと「楽しい」という気持ちは、全く同じとは言えませんが、まちがいなく密接な関係にあります。

これは、わたしたち人間だけの話ではありません。神さまも同じです。神さまがこの世界を創造されたときに神さまが感じておられたことは、この世界をつくるのが楽しくて楽しくて仕方がなかったのです。そして、苦勞して出来上がったこの世界を神さまがご覧になったとき「ベリーグッ

ド！」(素晴らしい!)とお喜びになったのです(創世記1:31)。

○その神さまがこの世界を支えておられます

図工の話をもう少し続けます。これはみんなに質問したいことですが、学校の図工の時間に自分で描いた絵や、自分で作った鉛筆立てや、自分で作った本棚は、その後どうしましたか？「家に持って帰った」という人は、手を挙げてください。「自分の部屋にちゃんと飾っている」という人はいますか。「あんな恥ずかしいものは二度と見たくないので捨てた」とか「壊した」とか「やぶいた」という人はいますか。たぶんそういう人もいるかもしれません。

でも、神さまは違いますよ。神さまは御自分でおつくりになった世界をそれはそれは大切に大切にしてくださる方です。「二度と見たくないので捨てた」とか「壊した」とか「やぶいた」なんて、とんでもない。神さまはこの世界のことが大好きなのです。この世界が出来上がったとき、心から喜んでくださったのです。

だから神さまは、この世界が壊れないように、しっかりと支えてくださっています。壊れそうなときは、救急隊員のように急いで駆けつけてくださり、危ない箇所を直してくださり、ひび割れやほころびを繕ってくださいます。弱そうなところは補強してくださり、毎日そこを点検し、見守ってくださっています。

そのような神さまこそが「世界の主権者」と呼ばれるにふさわしい方です。「世界の主権者」とはエラソウな人のことではありません。世界のすべてをご存じであり、いつも見守り、身を粉にして奉仕してくださる神さまのことです。

〈お祈り〉

天のお父さま、あなたが造ってくださったこの世界にわたしたちは生きています。毎日安心して暮らせるように、いつも守ってください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

神の全知について考える。

〈子どもカテキズム〉

問11：私たちの神さまの全能、主権とは何ですか。

答：私たちの神さまが、すべてのものを神さまの栄光のために定め、造り、保ち、支配しておられることです。神さまの力の及ばないところは、宇宙のどこにもありません。

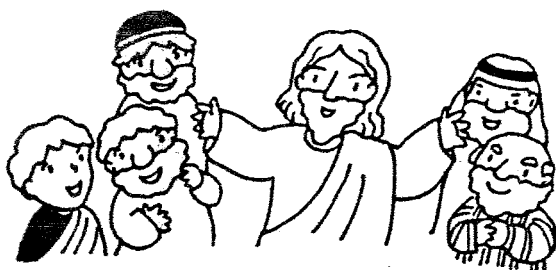
〈展開例〉

1. 神の「全知」について考える

- 「神の全知」ということについて、「神は何を知っておられるのか」、「神に知られていることをどのように感じるか」発表しあってみる。
- 聖書は「神の全知」について教えているが、この詩編139編1～6節では、「神はこの世界の全てのことを知っておられる」ということ

ではなく、特に「わたしと神」という人格的な関係の中で「神はわたしの全てを知っておられる」ということを教えている。

- 「神の全知」について考えるとき、「神は、“わたしのすべて”を知っておられ、わたしという人間のすべてを究めておられる」ということについて瞑想することが大切である。自分自身でも知ることができない本当のわたしの心を、神はすべてご存知である。
- 「神にわたしのすべてを知られる」ということはある意味において恐ろしいことかもしれないが、聖書は、それ以上に神の全知を信仰者の慰め・喜びとして教えている。
- 神は、わたしの心の奥深くにある罪や弱さを知ると同時に、この心に住んでくださっているイエス・キリストを見出してください。
- イエス・キリストを信じ受け入れるときに、「神に知られている」ということは恐怖から、慰め・喜び・安心へと変わるのである。



「初めに、神は天地を創造された」と書き始める聖書は、キリスト教信仰の有神的世界観をもっともよく表しています。その主語は明確に神です。一切の存在と活動の源は神です。しかもそれは墮落した罪と悲惨の世界ではなく、完璧に造られあますところなく創造主なる神の栄光をたたえる世界でした。墮落後の詩人でさえも「天は神の栄光を物語り、大空は御手の業を示す」（詩編19:1）と詠嘆するほどですから、墮落前の創造の状態はいかばかりだったことでしょうか。「良しとされた」という言葉が4節以下に6回も繰り返され、創造の完成のときは「見よ、それは極めて良かった」と言われています。しかも神の創造の御業は、まことに秩序だっていました。第1日目は光、第2日目は大空と水、第3日目は地と海と植物、第4日目は日・月、第5日目は水中生物と鳥、第6日目は陸上生物と人間です。ここには第1日目と第4日目、第2日目と第5日目、第3日目と第6日目という見事な対応すら見られます。神の御業はほむべきかな！

この世界は神の作品です。創造主と被造物の峻別ということほど、力強く神の主権性・全能性を言い表すことはないでしょう。「浮きし脂（動物の脂肪）のごとき、くらげのようなものが漂うなかで」という古事記の創世神話や、新改訳聖書の脚注の別訳のように、「神が天と地を創造し始めたとき」には、混沌とした地がすでにあったというわけではありません。神の創造はウェストミンスター信仰告白4:1の表現を借りれば次のように要約できるでしょう。①父・子・聖霊なる三位一体の神の御業。②御自身の栄光が表されるために。③初めに。アウグスチヌスは『告白』11巻で時間そのものも神の創造であると言います。④世界に存在するもの全て。⑤6日間に（1日を24時間と考えなくてもよい）。⑥はなはだ良く。⑦何の材料も使わず無から。

創造の冠として、最後に造られた人間のことを考えてみましょう。人間に神は特別な使命を与えられました。1:28で神は人間に、創造された世界を「従わせよ。支配せよ。」と命じられました。これは神の栄光を現すために、神の造られた世界を管理する働きで、文化命令といわれているものです。もう一つの命令は、復活の主イエスが教会に与えられた伝道命令ですが、これは人間の墮落によって必要になってきたものでした。人間本来のつとめ、人間が造られた第一の目的は、文化命令にあると言ってもいいでしょう。私たちは伝道の働きが用いられて、主イエスの贖いと聖霊の再生の御業にあずかりますが、それは私たちが本来の姿に引きもどし、再び真の意味で神の栄光を現すように生きるためです。私たち再生の恵みにあずかった者は、永遠の滅びからの救いを喜び感謝するとともに、この世界が神の作品であり、しかも私たちがその管理者として召されていることを知るので。救われた喜びに加えて、この栄光を知るときこの世界に生かされている喜びが、いっそう豊かなものとされるでしょう。

ときどき世界を「従わせよ、支配せよ」という聖書の教えが、公害や自然破壊を引き起こした元凶であると、批判されることがあります。たしかに罪におちた人間のとどまるところを知らない欲望や、知性の腐敗は、このような現実を招きました。しかしそこにこそ、私たちは本来の神の造られた世界に対する、忠実な管理者として光栄ある責任を覚えるものです。再生された者の尊い使命です。人間のいとなみのあらゆる分野で、このように神に仕える者が求められています。伝道者・自然科学者・哲学者・土を耕す農家の人たち・政治家・芸術家・エンジニアなどなどです。教会学校の生徒たちにこの務めの光栄を伝え、彼らの賜物が神にささげられることを祈っていきましょう。（中根汎信）

子どもカテキズム

問12 神さまの創造のお働きとは何ですか。

答 私たちの神さまが、
ただ御言葉によって、
世界とそこにあるすべてのものを、
極めて良いものとして造られたことです。

〈アイデンティティー〉

特に日本におきましては、進化論がまるで事実であるかのように教えられています。情報として、アメリカなどの「創造説」が紹介される場合であっても、どこか神話じみた馬鹿げた説として考えられることが多いのではないのでしょうか。思いますに、これはもはや、科学の理論というよりも、世界観人生観の問題なんだと思います。人類の起源、私たちはどこから来てどこへ行くのか、人生の意味は何なのか、など、創造説や進化論は、深いところで、自らが生きる意味を問う作業、自分のアイデンティティーを探る作業になっているのだと思うのです。猿とか、何か他の生き物とかから進化して人類になったと教えられれば、動物のように、本能のまま欲望のままに生きても構わないという話になりますし、生きる意味もないわけですから、生きていても楽しくない、死んだ方がマシだとなって自殺者が増えるのも頷けます。単なる生物学的な現象としてのみ生命が誕生したのならば、そこにおいて善悪が問われることもありません。愛とか信念とかいったことも無意味で、それは単に違いの問題でしかなくなります。こういうことを考えますと、私たちが聖書から、天地創造のを知るということが、如何に大切なことであるかが分かります。おとき話や神話であるどころか、極めて本質的なことを考えているわけです。

〈何故の創造か〉

世界の多くの神話を見てみますと、世界や人間が、神々の思いつきとか、神々が楽をするためとか、致し方ない事情のためとか、とにかく、まるで余計なものとして造られたというようなことが語られています。望まれずして生まれてきた子供のようなものです。失敗作とも言いましょうか。神々の名誉を保つため、神々の失敗を覆い隠し、尻ぬぐいをするための創造なのです。そこには嬉しくなるような積極的な理由はありません。余ってしまったから、もったいないので造ったとか、足りないから、埋め合わせのために造ったとか、人間の存在価値が揺さぶられるような考え方です。そういう世界観の中に生きていけば、そういう生き方になるのは、ある意味当然でしょう。一番根幹のところ、喜ばしい積極的なものがないのですから、何とかそれを造り出そう、身に付けようと躍起になります。他の人を傷つけたり、蹴落としてでも、自らの存在価値を手に入れないと、とても生きていられないからです。なぜ、自らの存在価値を手に入れようとするのでしょうか。それは、聖書が語る通り、神さまが初めから、価値あるものとして、素晴らしいものとして、世界と人間をお造りになったからです。望まれた待望の子供として、御自分の愛を注ぎ尽くしてもまだ足りないくらい愛すべき存在として、私たちを神さまが造ってくださったからです。（梶浦和城）

テキスト 創世記 1章
カテキズム 子どもカテキズム 問12

〔単元のねらい〕

創造主の天地創造のみわざは、たいへん奥深い。教理としても、良き創造、御言葉による創造、六日間の創造など、多岐にわたる。それらすべてを一回の説教で取り上げることは、そもそも無理なことであろう。この説教展開例では、良き創造ということを中心にした。そして、天地創造の御言葉は、天地創造の出来事とおして神をほめたたえているのであって、説教においても、神賛美へと向かうように努めた。難しいのは、この世界の現状をただ肯定することに陥ってしまう危険である。良き創造を取り扱う際には、同時に、わたしたち人間の罪についても語る必要があるであろう。

「極めて良かった！」

みんなは、粘土をこねて、何かをつくったことがありますか。動物の形をつくったり、乗り物の形をつくったり、茶碗やカップをつくったり、粘土をこねて遊ぶのは楽しいですね。

粘土をこねて、何かをつくるときのことを思い浮かべてみましょう。粘土をこねながら、最初はどうしますか。まず、何をつくろうかと考えますよね。つまらないと思うものではなく、つくって楽しいものをつくりたいですね。ライオンにするのか、コアラにするのか、あるいは、乗り物で、車をつくるのか。車もいろいろな種類がありますね、消防車みたいな車か、あるいは、お父さんお母さんが乗っている車なのか。

わたしは、ご飯を食べるお茶碗をつくったことがあります。そのお茶碗でご飯を食べるんだ！って思いながら粘土をこねていると、とても楽しかったことを思い出します。そして、できあがったお茶碗は、自分の気持ちがかもっていますから、とても大切ですね。ものをつくると、ものの大切さが分かるようになります。

今日、みんなに知っていただきたいことは、わたしたちが生きて、目で見て、手で触れているこの世界は、聖書の神さま、主イエスさまの父なる神さまがつくられたのであり、神さまの愛が込められている、ということです。神さまに愛されて

いる世界なのです。聖書にこう書いてありました。「初めに、神は天地を創造された」。今日は、神さまが天地をつくられた、このことを学んで、神さまを賛美したいと思います。

みんなは、カブトムシやクワガタは好きですか。カブトムシやクワガタを捕りに行くことがありますか。捕まえたら、ぜひじっくり見てください。観察してください。カブトムシの足は、小さな足ですけれども、小さな、けれどもしっかりした爪があって、それでしっかりと木の幹につかまっています。カブトムシは、木の蜜、樹液を飲むのが食べ物ですけれども、不思議な口をしていますね。筆のような、ハケのような毛があって、それで上手に蜜を吸うんですね。カブトムシは、小さな虫ですけれども、本当にとてもステキに、すばらしくできていると思います。

カブトムシだけではありませんね。クワガタだけではありませんね。小さなアリだってそうだし、小さな花も、一つひとつ、とてもいねいにできています。小さな花であっても、きれいな花をしっかりと咲かせています。どうして、小さな虫も、小さな花も、とてもステキなんですか。それは、神さまがつくられたからです。神さまの愛情が込められているからです。だから、どれもこれも、とてもすばらしいのです。

わたしたちが粘土をこねて何かをつくるときに、まず何をつくろうかと考えます。それは、よくつくろう、楽しくつくろう、ステキにつくろうと思って、考えるのです。そして、ていねいにつくります。乱暴につくったら、なかなかよいものはできませんよね。

わたしたちは、ときどき、いらいらして、乱暴につくってしまうことがあるかもしれません。そうして、失敗してしまいます。けれども、神さまは、とてもていねいにつくってくださいました。聖書には、先ほど一緒に聞いたとおり、神さまがこの世界をつくってくださいましたときのことが書いてあります。神さまは、まず第一日に光をつくり、第二の日に大空をつくり、第三日に海と陸地をつくられた。そのように、順序立てて、ていねいにつくられました。それは、愛情を込めて、とてもステキにつくろうと願って、ですから、慌てることなく、ていねいにつくられたのです。

そして、聖書は、こんなふうに言っています。「神はこれを見て、良しとされた」(10,12ほか)。神さまは、ご自分がつくったものをご覧になって、これで良し、これで良し、とてもよくできたと、そうおっしゃっておられます。極めつけは、31節です。「神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」。極めて良かった！ですって。ですから、この世界は、神さまが願っておられたとおり、神さまの愛情が込められて、とてもステキにつくられたのです。神さまの成功した作品なのです。わたしたちが、小さな虫や花を見て、大きな山や森、大自然を見て、なんてステキなんだろう！と思うのは、当然ですよ。神さまの愛情が、そこに豊かにあふれているのですから。

心の痛むことですが、わたしたちが目にするのは、そんなステキなことばかりではありません。山に行ったり、川を見たりすると、ゴミが捨てられて、よごれてしまっていることがあります

ね。カブトムシやクワガタをつかまえて、しばらく飼っていても、やがて死んでしまいます。いったいどうして死ぬんだろうかと思えますね。生き物を飼うことは、とても大切なことで、生き物は、必ずと言っていいほど、わたしたち人間より先に死にます。わたしたちより長く生きる生き物はあまりありません。生き物を飼うと、必ず死ぬのであり、そして、死んで、いなくなると悲しいですね。その悲しさを味わうことができます。とても大切なことです。いったいどうして死んでしまうのだろうか、考えるでしょう？

それは、わたしたち人間のせいなのです。わたしたちが、まことの造り主、本当の神さまから離れて生きてしまう、神さまの御声を十分に聞くことができない、その罪のために、わたしたちは、山や川を汚してしまうし、神さまがつくられたものの本当のすばらしさに気づくことがなかなかできません。そして、その結果、死ぬということも起こってしまっているのです。生き物がすべて死ぬ。それは、わたしたち人間が、まことの神さまから離れてしまった罪のゆえなのです。

神さまは、そんなわたしたちに主イエスさまを与えてくださいました。主イエスさまをとおして、まことの神さまを知って礼拝できるようにしてくださいました。神さまがつくられたものの本当のすばらしさ、そして、そこに込められている神さまの愛情を知ることができるようにしてくださいました。これは、本当に感謝なことですよ。

この世界は、神さまが愛情を込めて、とてもすばらしく、美しくつくってくださいました。そのことを知って、神さまに感謝して生きていきましょう。主イエスさまを礼拝して、神さまに感謝するのです。そして、神さまの作品の一つひとつを大切に、とくに生き物を大切にするようにしましょう。主イエスさまを礼拝することだけではなく、ものを大切にすることをとおしても、神さまを賛美し、感謝することができるのです。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章31節前半

神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。

〈ねらい〉

罪にまみれたわたしたちに、罪が入る以前の世界を想像するのは難しい。それは幼児にとっても同じかも知れない。しかし神さまは最初、完璧な真善美の世界を造られたことをしっかり教えよう。キリストによって回復される世界の目当て（希望・慰め）になるのですから。

〈展開例〉

皆さんはテレビのニュースを見ることがありますか？ お父さんやお母さんはよくみるでしょう？ アニメのように面白くないし、難しくて良く分からないので皆さんはあまり見ないかも知れませんか。テレビのニュースでは楽しいことはほとんどやりません。殺された、盗まれた、いじめた、嘘をついた、火事になった等、いやな怖いことがいっぱいです。

神さまが何も無いところから神さまのお言葉だけで最初に造られた世界には、そういうことが一つもありませんでした。ほんとうに一つもなかったのです。月や星や山や川、海などを見ると、きれいだなあ、すごいなあ、と思うでしょう？ こういうものを最初に神さまが造られたとき、神さまはご自分で「うん、良くできた」と満足なさいました。完全な神さまが“よくできた！”と思われたのですから、それはそれは素晴らしかったのです。海や川の水は透き通って少しも汚れていなかったでしょう。山の木やお花も命がいっぱいで

元気に気持ちよく成長していたでしょう。お野菜も農薬という薬なんか心配しないで、安心して美味しく食べられたと思います。栄養もいっぱいあったでしょうね。神さまがお造りになったものは、そういう風にとっても素晴らしかったのです。今、あちこちで朝顔の花が咲き始めているのを見ますね。黒い小さなタネを土に埋めて水をかけているだけで、葉っぱがどんどん大きくなり、つるがグングン伸び、赤や紫や水色など綺麗な花を夏中咲かせます。それを見るだけでもほんとに不思議です。みんなの好きなぶどうや梨の木も、お砂糖の入った水をやっているわけではないのに、どうして甘いおいしい果物になるのでしょうか。

特に人間は心を込めて、神さまに似せて造られたのですから最高に素晴らしかったのです。その素晴らしい人間が美しい自然の中で安心して楽しい毎日を過ごせるように、神さまを誉めたたえて暮らすようにと神さまは考えてくださいました。そしてそのようになったのです。怖いことも悲しいことも間違ったこともない世界を神さまは最初に造られました。

〈お祈り〉

宇宙全部を素晴らしく造られた天の父なる神さま、ほんとうにありがとう！ 神さまが造られた全部のものを大切にできますように。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「ぼく・わたし だあいすき」の絵を描こう

○準備するもの

画用紙、クレヨン・クレパス・色鉛筆など。

- 「好きなお花」「好きなお野菜」「好きなお友だち・人」などをテーマに自由に描きましょう。
- 描きながら、それらは神さまがお造りになって、与えてくださっていることを伝えましょう。
- 絵が描けない子には、折紙を切ったものなども用意して貼り絵でも良いでしょう。
- 描き終わったら（完成を求めないで）、みんなで一枚一枚を話題にして話し合ってみましょう。

〈ねらい〉

神さまは天と地を良いものとしてお創りになった。

〈展開例〉

創世記の1章1～3節を一緒に読みましょう。

《はじめに神は天と地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり神の霊が水の上を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして光があった。》

前にも（6月22日）したことがあります。目をぎゅっつつむってみましょう。目のところを手で押さえて真っ暗になりましたか？ 真っ暗だと、何か見えますか？ 先生の顔が見えますか？ 真っ暗だと何も見えないし上も下も右も左もないですね。ただただ、真っ暗ですね。じゃあ、今度はそうっと目をあいてみましょう。何か見えますか？

先生の顔が見えますか？

今読んだ聖書の箇所は、こういう感じですね。神さまが光あれと言うまでは、真っ暗で何も見えなかったのです。そして神さまが、ひとこと、なんて言いましたか？（発言を待つ）

そうですね、「光あれ」ですね。

神さまは真っ暗中で何が一番必要かということをお考えになって光あれと言ったのです。この創造のみ業の順番はとてとてもよく考えられた順番なのです。ちょっと考えてみましょう。

一日目 光

二日目 大空の上の水と下の水

三日目 地と海、地の草と果樹

四日目 天体

五日目 水の中の生き物と空を飛ぶ生き物

六日目 地上の生き物。最後に人間

（子どもたちに自由に発言させて、順番を入れ替えて考えてみる。そのようにすると、何が不都合か考えさせる）

聖書に書かれているこの順番が一番良いと言うことがわかりましたね。

では、一緒に聖書を読んで見ましょう。

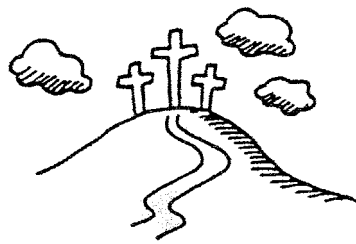
創世記1章31節

《神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。》

神さまは、この世界をとてても良いものとして創ってくださったのです。

〈祈り〉

神さま、神さまがこの世界をとてても良いものとして創ってくださったことを心から感謝します。神さまが創ってくださったこの世界を大事することができるように、お守りください。



〈ねらい〉

神さまの「天地創造」の素晴らしさを学ぶ。

〈展開例〉**○「創造」と「図工」の違い**

先週は、神さまが世界を創造してくださったこと、そして、その神さまがこの世界を大切に守ってくださっているということを、皆さんが学校で勉強する図工にたとえてお話ししました。しかし、神さまの「天地創造」とわたしたちの「図工」は似ているところもありますが、違うところもあります。どこが違うのでしょうか。

わたしたちがいろいろなものをつくる場合には、必ずそれをつくるための材料がありますよね？鉛筆立てをつくるための牛乳パックとか、本棚をつくるための材木とか。わたしたちは、図工の時間が始まる前に、そういうものを前もって準備しなくてはなりません。

しかし、神さまの「天地創造」の場合は材料がありませんでした。全く何にもありませんでした。光もない。宇宙も太陽も地球も月もありませんでした。材料が何にもないのに、神さまはすべてをお造りになりました。それが「創造」という言葉の意味です。そのことを教会は昔から「無からの創造」と呼んできました。

わたしたちが行う図工は、神さまが何もないところから創造してくださったものをいろいろと上手に組み立てるだけです。人間は、神さまのように「創造」することはできないのです。

○子供は親が「つくった」わけではありません

神さまは、世界を創造してくださっただけではありません。人間も創造していただきました。神さまが人間を創造してくださる前には、人間は存在しませんでした。人間も「無から」創造されたのです。

皆さんは時々またはしょっちゅう、「子どもは親がつくるものだ」という話を耳にすることがありませんか。そういう話を聞いたときは、腹を立てる必要はありませんが、心の中で「それは違う

よ」とつぶやいてくださって構いません。なぜなら、人間が人間を「つくる」ことはできないからです。人間を「つくる」ことができるのは神さまだけです。皆さんの親は人間です。

「子どもをつくる」とか「できちゃった」という言い方は、間違っています。正しい言い方は「親が子どもを生む」です。親もその親から「生まれた」だけです。人間によって「つくられた」人間は、一人もいません。

○「つくられた」のは最初の人間だけです

「あれ？」と疑問を感じる人もいるでしょう。ずっと昔にさかのぼっていくと、最初の人間がいたはずですか。その人は、だれから「生まれた」のでしょうか。

その答えが聖書にあります。聖書には、最初の人間の名前が出てきます。アダムと言います。アダムは、だれからも「生まれて」いません。アダムには、人間の親はいません。そうです、アダムは神さまによって「つくられた」のです。だから、アダムだけは、他のすべての人間とは異なる、特別な存在なのです。

○サルは人間の親でしょうか

今の世界の科学者の中には「人間はサルから進化した」と教える人がいます。言い方を換えれば、「最初の人間の親はサルです」ということになります。でも、ちょっと待ってください。カエルの子はカエル、サルの子はサルではないでしょうか。神さまの「創造」を信じようとしなない人は、科学の名を借りて無理な理屈を押し通そうとすることがあるので気をつけましょう。

〈お祈り〉

天のお父さま、この世界とわたしたち人間はあなたが造ってくださったものです。神さまを信じない人々に惑わされないようにわたしたちを守ってください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

子どもたちは中学生になると世界史の最初の授業で「人間は猿から進化した」と教わり、聖書の教えとの違いに戸惑うかもしれない。中学生のときにこそ、「この世界も、この私も、神が造ってくださった」ということをきちんと考えることが大切である。

〈子どもカテキズム〉

問12：神さまの創造のお働きとは何ですか。

答：私たちの神さまが、ただ御言葉によって、世界とそこにあるすべてのものを、極めて良いものとして造られたことです。

〈展開例〉

1. 生徒たちに「この世界や私たち一人ひとりはどうのようにして造られたと思う？」と尋ね、発表しあってみる

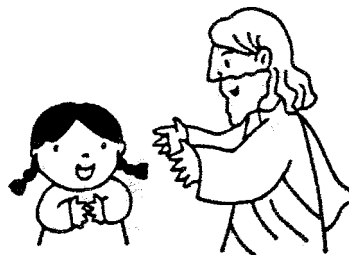
（「神によって造られた」という答えだけではなく、「進化論が言うように、猿から進化した」という答えもあるかもしれない）。

2. 「人間（私）は、神に造られた貴い存在である」ということについて考える

○神の天地創造の働きについて考えるとき、「私は、神によって造られた存在である」という

ことを確信することが、特に中学生たちにとって大切なことだと思う。

- 「神が人間（私）を造られた」ということは、何よりも「私は偶然この地上に誕生した存在ではない」ということを教えられる。もし、自分を「偶然の産物（進化論）」と考えるならば、自分自身の命には特別な意味はなく、自分の存在に何の価値もなくなってしまう。しかし、人間（私）は、今日の説教にもあるとおり、神が無限の愛情を込めて造られた貴い価値のある存在である。「太陽に光と輝きを与え、花に美しさを装わせた神が、この私を造られた」ということを瞑想するならば、自分の存在に意義と価値を見出すことができる（詩編8編、イザヤ43:1～4）。



神は六日間の創造の御業が完成すると、ご自身の作品である世界を御覧になって、「それは極めて良かった」と言われました。この世界は不良品とか造りかけの未完成品ではありませんでした。そして第七日目に神は、「ご自身の仕事を離れ、安息なさった」(2:2) のです。安息するということは、今までの働きを断ち切る、やめるということです。しかし神は創造の御業が完成したら、もう何も働かれなかったのではありません。そこでわざわざ「この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なさった」(2:3) と言い換えているのです。神がやめられたのは創造のお働きです。それも六日間という時間がきたので途中で投げ出したというのではなく、「天地万物は完成」(2:1) したからです。神の場合、休まないと疲れるとか、もう創造の働きのための余力がなくなったから一服されたのではありません。それ以降の神の摂理の働きは、片時も中断されることなく続けられています。神が摂理の御働きをやめられたなら、その瞬間からこの世界は消滅しているでしょう。神以外のものはすべて神に依存し、神に無関係に自力で存在と活動を続けることはできません。ヨハネ5:17をお読みください。それでは神が安息された理由は、何だったのでしょうか。その答えは「安息なさったので」、「第七日の日を神は祝福し、聖別された」ということです(2:3)。神の安息は祝福と聖別のためでした。

まず祝福ということですが、これは何か分かったようで、分かりにくい感じがします。祝福するということは、祝福してくださる神からの恵みや益が与えられることです。安息日以外にもすでに、水中生物と空の鳥に対してと(第五日、1:22)、何よりも最後に創造された人間に対して(第六日、1:28) 祝福が与えられました。今も神の祝福は安息日だけでなく、日毎に与えられています。しかも人間以外の全被造物にもです。神はご自身の作

品を慈しんでおられるからです。しかし安息日の祝福には特別な意味がありました。安息日は神が一服される日ではなく、神の民が神から祝福を受ける日です。旧約聖書であれほど安息日厳守が言われるのは、律法主義的戒律としてではなく、安息日が神からの祝福——恵みや益を受ける喜びの日だからです。大祭司の祝祷(祝福)と言われる民数記6:24、25で、「主があなたを祝福し、あなたを守られるように。主が御顔を向けてあなたを照らし、あなたに恵みを与えられるように」と、主は言われます。まことにこの御言葉は、礼拝の祝祷で宣言されるにふさわしい神の祝福の言葉です。「安息日は、人のために定められた」(マルコ2:27) と主イエスが言われるとおりです。安息日の礼拝はこの祝福がもっとも豊かに現されるときです。この礼拝で、神を喜び(ウェストミンスター小教理問答1)、神との交わりのなかで真の安息を与えられて、新しい週を始めるのです。

もう一つは聖別のためです。聖別とは、神礼拝と神への様々の奉仕のために、ほかのものから特にとり分けることです。日だけでなく人・動物・器物にまで及んでいます。安息日の聖別についていえば、「神が特別の所有権を主張される」日です(ウ小教理問答62)。この日を神の日としてとり分けるのです。そして神の栄光をたたえるのです。それはまた私たちに神が祝福を与えてくださるためでもあります。私たちは神からのブレーキがかからなければ、自分の欲望を満たすために全ての時間を費やそうとします。そのはてには何が待ちうけているのでしょうか。滅亡と混乱です。神がこの日を聖別してくださったのは、私たちの救いのためです。神からの祝福を受け取る手段として、安息日の聖別を定めてくださったのです。その中心は神礼拝です。安息日の礼拝は、神との交わり・神を喜ぶ恵みの最高のときです。

(中根汎信)

カテキズム 子どもカテキズム 問12

子どもカテキズム

問12 神さまの創造のお働きとは何ですか。

答 私たちの神さまが、
ただ御言葉によって、
世界とそこにあるすべてのものを、
極めて良いものとして造られたことです。

聖書の天地創造を語る上で、重要な二つの大きなポイントがあります。それは、「無からの創造」と「良き創造」ということです。これは極めて大切なことですので、天地創造を考える時には、いつでも心に留めていただきたいと思います。

〈無からの創造〉

まず、「無からの創造」についてですが、聖書に直接「無から」と書いてあるわけではありませんが、内容的に聖書がそう言っていることは疑うべくもありません。様々な聖書箇所から、聖書が確かにそのことを教えていると言うことができます。なぜ、この「無から」ということが大事かと言いますと、周辺社会が汎神論的・多神教的な社会であったことと深く結び付いています。汎神論的・多神教的な世界観では、人間のあり方がまず肯定され、その上で、それを神々の世界に投影するということがよくなされています。人間が戦争をして人を殺すなら、神々も殺し合いをし、人間が出産するなら、神々も出産をし、人間に優劣があるなら、神々にも優劣がある、といった具合です。また、まことの神を知らないので、自然界にあるものを神として拝んでしまうのです。創世記はそれら一切を否定します。人間とその社会を基準としない、人間の都合に拘束されない、という思いが、「無から」という言葉には込められています。つまり、世界と人間は、人間の考えや思惑など及びもつかない、まことの神さまの全く自由

で主権的な力によって、造られたのだというのです。

〈良き創造〉

次に、「良き創造」ですが、これもまた極めて大切なことです。世界にある諸悪を見聞きし、体験いたしますと、この世は初めから善悪二つがあるのだと考えたくなります。ことの初めがそうであれば、他人のことはさておき、自分の悪については言い訳できるということになってしまいます。初めから悪があったのだから、私が少しばかり悪いことをしても、それは仕方のないことだになってしまうからです。あるいは、神に悪の責任をなすりつけて、神さまが最初から悪いものとして造ったのが悪いと言い始めるのです。その両方を否定する意味でも、「良き創造」は重要なのですね。純粋に善であり、愛に満ちておられる神さまが、一番最初において、極めて良く素晴らしいものとして、世界と人間をお造りになったのだ、と聖書は教えるのです。ということは、悪とか罪とかは、初めはなかったわけですから、神さまの責任ではなく、私たち人間の責任だということになります。せっかく神さまが全く良いものに造ってくださったのに、人間がそれをぶちこわしてしまったのです。しかし、同時に、「良き創造」は私たち、何にも代え難い存在価値を与えてくれます。望まれて生まれた子供のようなものだからです。 (梶浦和城)

テキスト 創世記 2章1～4節前半
カテキズム 子どもカテキズム 問12

〔単元のねらい〕

天地創造のみわざは、六日間で成し遂げられた。しかし、そこにおいてはなお「完成」は語られていない。「完成」は第七の日のこととして語られる。これは大切なことであろう。第七日の祝福と聖別においてこそ、すべては完成する。わたしたちの一週歩みも、神を礼拝する安息においてこそ、完成させられる。その意味で、第七日は終末論的な意味を持つ。終末の完成を目指して、わたしたちは、礼拝し続けるのである。なお、『子どもカテキズム』の問49、50を参照すること。

「日曜日ってすごいんだ！」

一週間のはじめの日は、何曜日か知っていますか。簡単すぎる質問ですね。そう、日曜日です。最近はおとなの人が使っている手帳のカレンダーに、一週間が月曜日に始まるものが増えてきていて、これはたいへん困ったことです。一週間は日曜日から始まります。みんなも、月曜日、学校が始まるから、それが一週間のはじまり、というのではないのですよ。日曜日に、神さまを礼拝して、一週間を始めるのです。これは、とても大切なことです。日曜日に神さまを礼拝して、一週間を神さまの祝福の中で歩むのです。

けれども、今日は、ちょっと違うお話をしなければなりません。それは、神さまがこの世界をつくり、人間をおつくりになった、その最初には、一週間の最後の日に神さまを礼拝していたのです。一週間の最後の日、ですから、土曜日ですね。主イエスさまが十字架につけられて、よみがえられた、そのときまで、土曜日に神さまを礼拝していたのです。

神さまは、この世界をおつくりになりました。天地の創造です。神さまは、愛情を込めて、ていねいに、この世界をおつくりになりました。ていねいに、それはどのくらいかという、「六日間」というのです。六日間！ たったそれだけ！？ たった六日でおつくりになったの！？ この世界のすべてを！？ 生き物のすべてを！？ ちょっとびっくり

してしまうかもしれません。

けれども、この天地創造の六日間とは、わたしたちが知っている一日24時間の六日間、そのような、わたしたちにとっての六日間であるのかどうかは分かりません。これは、神さまにとっての六日間なのです。

大切なことは、神さまは、御自身の天地創造のみわざを六日間のこととしてわたしたちに教え、そして、第七日に休まれた、安息なさったということです。神さまは、天地創造のみわざを六日間で終えられ、すべてを成し遂げて、第七日を安息の日として定められました。

一週間は、何日ありますか。そんな簡単なことを質問するな！ という声が聞こえてきそうですね。一週間は七日間ですね。当たり前のように、でも、いったいどうして七日間なのでしょう。これは、実は、とても難しいことなのです。だれも本当には答えられない質問なのです。一週間はなぜ七日間なのか。それは、昔からそうと決まっている！ と答えるほかないのです。

ただ、聖書に答えがあります。それは、神さまが、そう決められたからです。六日間で天地をつくり、第七日目に休まれて、安息の日と定められた。だから、昔から一週間は七日間なのです。

そして、これはとても大切なことです。というのは、神さまが、わたしたちのこの世界には、六

日と一日という、そういうリズムが必要であると
考えておられるということなのです。天地をつく
られた神さまは、六日と一日、このリズムで、こ
の世界を支えて、祝福しておられるのです。

毎日、朝起きて、ご飯を食べて、学校や幼稚園、
保育園に行つて、勉強して、遊んで、夜は家でゆっ
くり休む。一日の生活にもリズムがありますね。
そんなふうに、一日のリズムだけではなくて、一
週間というリズム、六日と一日というリズムに支
えられて、わたしたちは健やかに生きることがで
きます。これを変えて、休むことなく勉強したり、
働き続けていると、病気になってしまうのです。
それは、本当に病気になるのです。

神さまは、七日目の日に、それまでの天地創造
のみわざを離れて、この第七の日を祝福されまし
た。聖書は、とくに第七の日を「聖別された」(3)
と言っています。

わたしたちも、一週間の生活の中で、六日間働
いて自分たちにゆだねられた仕事をして、第七日、
七日目を「聖別」します。具体的には、六日の間、
おとなの人、お父さんお母さんは、お仕事に出か
けたり、家のため、家族のためにいろいろと働きの
ます。そして、七日日には、神さまを礼拝するの
です。この日は、まことの神さまの一日なのであ
つて、自分たちのために使うのではなく、神さまを
礼拝するために使うのです。そして、この第七日
の礼拝をとおして、神さまは、一週間のすべてを、
六日間の働きを、豊かに祝福してくださいませ。
一週間の仕事や勉強が決して無駄にはならず、豊
かな実りを得ることができます。

みんなは、仕事はしていないけれど、学校に行
つて勉強をします。友だちと遊んで、人として生き
ることを学びます。苦手な友だちもいるかもしれ
ないけれども、仲良くできるように努めます。そ
のような一つひとつの労苦が、神さまを礼拝する
ことをとおして、祝福され、実りを見るのであり、
完成させられるのです。

最初に言いましたように、主イエスさまが日曜
日に復活されてから、わたしたちは、一週間の最
初の日、日曜日に、神さまを礼拝しています。神
さまを礼拝することから一週間を始めて、神さま
の祝福の中で生活するのです。そこでも、ですか
ら、六日と一日のリズムは変わっていません。

この神さまを礼拝する日、この日をぜひ大切に
してください。神さまは、わたしたちの一週間の
すべてを祝福して、ご自身の恵みで満たしたいと
願っておられます。そのために、日曜日に神さま
を礼拝することが大切なのです。

今、わたしたちのまわりの多くの人は、神さま
を礼拝していません。一週間に一日、神さまを礼
拝するどころか、休む間もなく仕事を続けたり、
あるいは、休みの日をただ自分のために使ってし
まったりしています。そのような生き方を、神さ
まは悲しんでおられます。それだけではありませ
ん。毎日を自分のために使ってしてしまうならば、神
さまのためにささげる日を大切にしないならば、
わたしたちは、本当に病気になってしまう。罪の
中で、自分を見失ってしまうことが起きるのです。
自分の力で生きるんだ！という傲慢に陥ったり、
逆に人生の重荷に耐えられなくなったりします。
本当の自分が分からなくなり、人生が分からなく
なってしまうのです。

一週間に一日、神さまを礼拝することによって、
わたしたちは、自分が神さまによって支えられ、
生かされていることを知ります。神さまの恵みに
感謝して、賛美して生きることができます。傲慢
な思いや人生の重荷から解放されます。そこに、
健やかな人生、幸いな人生があります。

日曜日にも、お友だちが遊びに誘ってきたり、
学校や地域の行事があつたりするでしょう。けれ
ども、日曜日の祝福、礼拝の恵みは、かけがえの
ないものです。ぜひ一緒にお祈りして、みんなで
励まし合いながら、礼拝の日を守り抜きましょう。

(望月 信)

[今週の暗唱聖句]

創世記 2章3節後半

第七の日を神は祝福し、聖別された。

〈ねらい〉

日曜日に礼拝をささげることは当然のことであり、大きな恵みと祝福であることを、力強く語ろう。

〈展開例〉

カレンダーを見ると、日曜日はたいてい赤い色になっています。幼稚園や保育園がお休みの日です。お父さんの会社もお休みの所が多いはず。これは日本だけでなく、世界中でそうなっている所が多いのです。何故でしょう。誰が決めたのでしょうか。そう、礼拝で聞いたように神さまが六日間で世界を造られて、一日をお休みの日にされました。この日は、神さまのために特別にわけて、神さまを礼拝し、神さまのために使う日、と神さまが最初にお決めになりました。日曜日がお休みの日、というのは誰か人間が決めたのではなく神さまがお決めになったのです。

幼稚園で友だちとケンカをしたり、お家で叱られたり、何か失敗して少し元気が無くなっているとき、教会へ来て神さまのお話を聞いたり、お

祈りをしたり、さんびかを歌ったりしているとだんだん元気になることはありませんか？ ああ、神さまがわたしのことを心配してくださり、守ってくださるんだなあ、と分かります。困っているお友だちがいたら優しくしてあげよう、と思いついたりします。日曜日に礼拝をささげるのは、そういう嬉しい日なのです。だから、月曜日から土曜日までにしているお仕事や勉強や遊びを休んで、神さまのために特別に分けておくようにします。日曜日は、心も体も元気になって、今週も神さまと一緒にいてくださるから大丈夫だ！という力をいただける日です。大切な日を神さまが作ってくださり、この日を大切に祈いなさい、と聖書は教えてくれています。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、日曜日をつくって、礼拝に連れてきてくださってありがとうございます。来週も元気に教会へ来ることができるよう。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「みんなで みんなで」をうたいましょう

「みんなで みんなで」（日本基督教団出版局『こどもさんびか（合本、2）』132番）

みんなでいっしょに うたいましょう
 グローリィ ハレルヤ アーメン
 おおきなこえで うたいましょう
 グローリィ ハレルヤ アーメン

- まだ覚えていない歌でも、短い旋律ですからすぐ覚えるでしょう。
- 歌いながら手をつないだり、何か振り付けをしてみましよう。単純な繰り返しが良いです。
- 1、2節を交替で……輪になってまわりながら……立ったり座ったりしながら……etc
 いろいろな歌い方を楽しみましょう。

〈ねらい〉

神さまは第七の日を安息として休まれた。

〈展開例〉

先週のお話を覚えていますか？

神さまはこの世界を、とっても良いものとして創って下さいましたね。

ここで質問です。神様はこの世界を何日間でお造りになりましたか？

そうですね。六日間です。では、また質問します。六日間でこの世界は完成したのでしょうか？

聖書にはなんて書いてあるのでしょうか？

一緒に読んでみましょう。創世記2章1節～3節。

《天地万物は完成された。第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神はご自分の仕事を離れ、安息なされた。この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し聖別された。》

完成したのは、第七日ですね。この日に、神さまは何を創ったのでしょうか？ 聖書をよく読んで見ましょう。何も創っておられないですね。でも、創造が完成したのは第六日ではなくて第七日と聖書は言っています。なぜでしょうか？

六日間のみ業で天と地のすべてのものを創って、七日目に安息して、そして天地創造が完成なのです。《この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し聖別された。》

ここでわかるのは六日間の仕事と、仕事をしない一日とで、完成なのだということです。

鉛筆は12本で1ダースといいますネ。それと同じように七日間はなんて言うでしょう？ そう、一週間といいますネ。みんなは、一週間をどのように使いますか？

（自由に発言）

神さまが、創造のお仕事をして、第七日目に休まれたように、私たちも、六日間は自分の仕事（みんなにとっては勉強すること）をして、あと一日をそれとはまったく別のことに使うのです。六日間は、学校に行ったり、お友だちと遊んだりして使い、あと一日は、神さまを礼拝するために使うということです。

〈祈り〉

神さま、神さまがこの世界を創ってくださったことを心から感謝します。そして、私たちに日曜日を与えてくださり感謝します。この日曜日を大切な日として、大事にすることができるようにお守りください。



〈ねらい〉

神さまは、御自身が創造された世界と人間を愛しておられることを学ぶ。

〈展開例〉

○神さまは世界と人間を「愛して」おられます

先週学んだことは、神さまが何もないところにすべてのものを創造して下さったことでしたね。そういうすごいことがおできになるのは、神さまだけです。

でも、神さまにおできになることは、すべてのものを創造なさったことだけではありません。神さまは御自身がお造りになったものを心から「愛して」くださっています。この世界のことも、そしてわたしたち人間のことも、です。

しかし、それでは「愛する」って、どういうことでしょうか。皆さんには好きな男（女）の子や恋人（？）がいますか。「えー、そんなの、恥ずかしくて言えないよー」と言われそうなので、これ以上は聞きません。でも、そろそろ、そういう人がいてもおかしくない年頃でしょう。

だれかを「愛する」とは、とにかくその相手のことを大切にすることですよね。好きな子だからこそイジめる（？）とかわざとケンカするというのは、やっぱりなんだかちょっと変です。

人間の話だけでなくてもよいかもしれません。友達からもらったプレゼントとか、家で飼っている動物のことを考えてみましょうか。大切なものなのに壊してしまうとか、かわいい動物を放つたらかたしにしてしまうという人は、どこか心がゆがんでいる感じです。

でも、残念ながらわたしたちには、時々そういうことがあるかもしれないと思いませんか。学校とかで嫌なことがあったりしてムカついているときには、わたしたちの心はひどくゆがんでいます。いつも大切にしているはずのものを急に壊したくなったり、やけくそになる。

遠回しな話になってしまったかもしれません。いま私は皆さんに、神さまというお方が御自分でお造りになったこの世界とわたしたち人間を「愛

して」おられるとはどういうことなのかを考えてみてほしいのです。

ここでひとつ、「絶対に間違いありません」と皆さんに言うておきたいことは、神さまの心は、人間の心のように、時々ゆがんだり、やけくそになったりしないということです。このことはとにかく信じてもらいたいです。

そして、今言ったことを信じていただけるとしたら、その次に分かってもらえそうなことは、神さまというお方は、御自身がお造りになった世界と人間を壊したり傷つけたりなさることはない（絶対にない！）ということです。

○神さまの「愛」を信じましょう

いまの話に疑問を感じる人がいるのでしょうか。「でも、大きな地震があったり、台風が来たり。災害や事故でいろんなひどい目にあっている人が世界中にいるじゃないか。神さまがこの世界と人間を大切に守ってくださっているのなら、どうしてあんなことが起こるの？」と。

そういう疑問を感じる人の気持ちは私もよく分かります。私も同じようなことで悩んだことがあります。私だけではなく、多くの人が同じことを悩んだことがあるはずですよ。

しかし、皆さんにこれだけははっきり言えることと信じていることもありますので、どうか安心してください。それは何でしょうか。

それは、世界とわたしたちの身に起こる不幸な出来事は神さまのせいではない、ということです。神さまはわたしたちを心から愛しておられます。「神さまは私のことを憎んでいるのではないか」とか「神さまはこの世界を嫌っているのではないか」と疑わないでほしいのです。

〈お祈り〉

神さま、あなたがこの世界とわたしたち人間を愛しておられることを信じます。つらいとき、悲しいとき、どうか助けてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 「天地創造」についての基本的な知識を、私たちの教会の信仰規準から学ぶ
2. 創造信仰によって与えられる慰めについて考える。

〈子どもカテキズム〉

問12：神さまの創造のお働きとは何ですか。

答：私たちの神さまが、ただ御言葉によって、世界とそこにあるすべてのものを、極めて良いものとして造られたことです。

〈展開例〉

1. ウェストミンスター信仰告白第4章1節から、「創造」について考える

「父・子・聖霊なる神は、

ご自身の永遠の御力、知恵、および善の栄光の現れるために、

初めに、

世界とそこにあるすべてのものを、

見えるものであれ、見えないものであれ、

六日の間に、

すべてはなはだ良く創造すること、

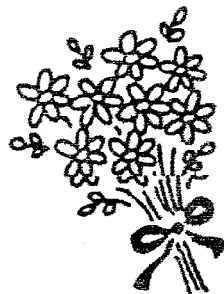
すなわち無から作ることをよしとされた。」

- この4章1節には、創造の主体（三位一体の神）、創造の目的（神の力・知恵・善を現すため）、創造の時（初め）、創造の対象（世界、その中のすべてのもの、見えるもの、見えないもの）、創造の期間（六日）、創造の状態（はなはだ良く）が告白されている。

2. 「見えるものであれ、見えないものであれ」という言葉に注目する

○創造の対象について「世界とそこにあるすべてのものを」と記した後に、「見えるものであれ、見えないものであれ」と付け加えられているのは、目に見えない天使や悪魔、さらには生も死も、つまり三位一体の神以外の一切のものが神の被造物であるということを告白している。

○確信をもって「すべてのものは神によって造られた」と信じるときに、ローマ8章31～39節のパウロの勝利の告白（38節、「わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも……、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです」）を私たちもともに告白することができる。



(1) 逮捕されるイエス

キリストが逮捕されたとき、剣を抜いたのはシモン・ペトロであり、右の耳を切り落とされた大祭司の手下の名はマルコスであった(ヨハネ18:10)。イエスは「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言って、ペトロに剣を用いることを禁じ、咎められた。剣とは、人を傷つける道具、武器のこと。

(2) 「剣のない者は買いなさい」とは

逮捕される数時間前、イエスは弟子たちに「剣のない者は、服を売ってそれを買いなさい」(ルカ22:35～38)と言われた。これは剣を取ることを禁じられたイエスの言葉と矛盾するように見える。イエスが十字架につけられ、犯罪人の一人に数えられると、世間の評価は逆転し、人々の態度は一変する。だからイエスは世間の敵意に抵抗し、対抗する備えをせよと言われたのであって、文字通りの意味ではない。弟子たちが「主よ、剣ならここに二振りあります」と言うと、イエスは「それでよい」(「それで十分」新改訳)と言われた。これはイエスのたとえの言葉を読み取れない弟子たちとの会話を打ち切る「もう十分だ」という意味である。

(3) 人が剣を抜くとき

主イエスを護衛したいという熱心な思いから剣を抜いたペトロであったが、それは、臆病さ、弱さからくる強がりすぎない。「あなたのことを知らないなどは決して申しません」(マタイ26:35)と明言したペトロは、今こそ体をはって護衛しなければと思ったのであろう。

人はどのようなときに剣を抜くのだろうか。恨みや憎しみを晴らすための復讐の道具として、また、相手を打ち負かし、征服するための道具としてこれを抜くのである。相手を説得できないがゆえに武器を用いて相手を威嚇したり、命に手をかけ、思いを遂げようとする。

私たちの心の中には、恨みや憎しみ、報復への思いなどが渦巻いている。その思いが心の中でどんどん大きくなり、目に見える形となって現れるとき、人は剣を取るようになる。そして神のかたちに似せて創造(創1:26,27)された人のいのちに傷を負わせ、破壊する。この剣の行使を拡大したところに戦争がある。どんなに恐ろしい道具や武器も、これを生み出す罪より強大ではない。

(4) 罪は剣によっては解決しない

剣は憎しみを生み出し、憎しみは自分に返ってくる。これは人間の経験からも理解できる論理である。しかし、イエスのこの言葉もまた人間の論理の延長線上にあるのではない。剣を取る時人は、人の命だけでなく神の主権を侵害する。「わたしが報復し、報いをする」(申32:35、ローマ12:19)と語られる神の権限を奪い、自分が神であるかのように振る舞う。その結果、神は剣を取る者を皆、剣で滅ぼされる。剣によっては罪を解決することはできない。

(5) 神のもたらす平和

神はこの罪をイエスにおいて解決することを、預言者たちをとおして語られてきた。「必ずこうなると書かれている聖書の言葉」(マタイ26:54,56)が実現するために、イエスは十字架にかかられた。イエスは十字架の上で剣によって突き刺された。今や罪の剣はイエスによって取り除かれた。神の平和が神と人との間に現実のものとなった。「彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」(イザヤ2:14)。

終わりの日には、人々の思想、信条は神の思想、信条となり、争いは終わりを告げる。神がそのような平和な世界を創り出してください。この平和を創り出す神の御業は、キリストによって今日も進展し続けている。(漆崎英之)

平和主日に寄せて

だれの作か失念しましたが、「8月は6日9日15日」という句があります。戦争で多くの人命が、自然災害ではなく人間の手によって奪われました。日本の国は戦争の被害者であるとともに、加害者であることを忘れてはなりません。明治の開国以来、先進列強に対して後れてはならないと富国強兵・海外侵出の政策を続けました。とくに15年戦争・アジア太平洋戦争では、アジア諸国に対して未曾有の惨害を与えました。この歴史から目をそむけ、その罪を悔い改めないことは、近隣諸国に対して非礼であるばかりか、自国に対しても真に国を愛することにはなりません。侵略の事実を隠すことなく日本がしてきたことを率直に認めたいので、近隣諸国との関係を築くことこそ日本の取るべき道です。現行の平和憲法の根幹である9条（戦争放棄・軍備および交戦権の否定）と、19条（思想と良心の自由）、20条（信教の自由、国家の宗教への介入の禁止）、21条（集会・結社・表現の自由と検閲の禁止）などが、改悪されようとしています。

この歴史の中で私たちは今も、「聖戦の名のもとに遂行された戦争の不当性とりわけ隣人諸国とその兄弟教会への不当な侵害に警告する見張りの務めを果たし得ず、かえって戦争に協力する罪を犯し」（日本キリスト改革派教会創立30周年記念宣言・序文）たことを認め、悔い改めることが求められます。教会としては次の二点を明らかにしておく必要があります。第一は、このような戦争や平和の問題を考え取り組むことは、きわめて信仰的・教会的な課題であるということです。とくに改革派信仰は信仰と倫理の二元化をきびしく避けて、創立宣言が述べるように有神的人生観世界観を主張してきましたので、異論はないと思います。

第二は主イエスの教えは武力によらないで平和を築くということです。今週の聖書箇所マタイ26:47～56は単なる個人倫理の問題として片付

けられるべきではありません。聖書全体から私たちは平和を考える必要があります。殺してはならないという十戒の第六の戒めの展開・具体化として、聖書は実に多くのことを語っています。ホセア2:20「弓も剣も戦いもこの地から絶ち、彼らを安らかに憩わせる」。ミカ4:3「主は多くの民の争いを裁き、はるか遠くまでも、強い国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない」。マタイ5:9「平和を実現する人々は、幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」。ヤコブ3:18「義の実は、平和を実現する人たちによって、平和のうちに蒔かれるのです」。歴史は「剣をさやに納めなさい。剣を取るものは皆、剣で滅びる」（マタイ26:52）という主イエスの教えを証明しています。むしろ国家間の外交努力や、文化交流による相互理解、収奪・搾取をやめて富の公平な分配をおこなうことなどをとおして、戦争への危機を回避することが可能です。そのために世界の軍事費の1割でも用いられればと思います。

最後にすでに古典的名著というべき矢内昭二先生の『ウェストミンスター信仰告白講解』を引用させていただきます（231頁）。「私：日本国憲法の前文および第9条の烙印は、これをしっかりとかけ、国際平和のため努力して行かなければなりませんね。軍備撤廃ということが現実問題としてできないとしても、これ以上増強しないように反対することはしなければならぬし、徴兵制の復活や海外派兵の動きについては、どんな少しの動きに対しても、断固反対しなければならぬと思います。A：『国際紛争を解決する手段としては、国権の発動たる戦争と武力による威嚇又は武力の行使は、永久にこれを放棄する』という決意を貫き通すためにあらゆる努力をしなければいけないと思いますわ」。まことにしかりです。（中根汎信）

テキスト マタイによる福音書 26章47～56節
カテキズム 子どもカテキズム 問27

〔単元のねらい〕

弊誌は、8月15日にもっとも近い主日を、平和について聖書から考えるカリキュラムとして特別に覚えてまいりました。教会（日曜）学校は、敗戦記念日であろうがなかろうが、主の平和を告げ、主の平和の実現のために奉仕するキリスト者を育てるという目標を持っています。改悪前の、私どもの誇るべき教育基本法には、「真理と平和を希求する人間の育成を期する」と謳われていました。公教育においてすら、平和を希求する人間の育成が基礎とされ、平和学習つまり平和を構築することが、学びの目標とされていたのです。今や、教会の日曜学校での教育とその使命は、いよいよかけがえのないものとなり、光彩を放つことになると信じます。私どもは、聖書によって、究極の平和を教えられています。平和の君主イエス御自身とその命令を宣べ伝えること。そして、この戒めに存在をかけて応答するようにお互いに励ましあうこと。それが、私どもの平和学習の基本姿勢となります。

「戦争をやめて、平和を造ろう」

1941年の12月8日は、何の日でしょうか。それは、日本がアメリカのハワイを攻撃して、戦争を始めた日です。それなら、1945年の8月15日は何の日でしょうか。それは、その戦争に敗れた日です。実は、わたしたちの国は、この戦争に敗ける15年も前にすでにアジアのなかで、一番強い国になって、アジアの国々を日本の支配におこうとして、先ず、中国を侵略しようとして攻撃を始めていました。実は、そればかりかもっとも昔から、今から100年以上も昔の明治の時代から、日本は、戦争をすることによってこの国を豊かにし、大きくしようと、政治家たちは考えました。そして、法律によって、国民は皆、国から命じられるままに兵隊にならなければならないになってしまいました。そのような国を一つにまとめるために、天皇は日本の神さまであって、日本人は全員、天皇の子どもたち、日本は天皇の国なのだという教えが、すべての人々に強制されていました。

62年前の8月15日、数え切れないほど多くの人々の命を奪い、家族を別れ別れにさせ、家を空襲で失わせ、食べ物も着るものも満足にないぎりぎりの苦しみの果てに戦争は終わりました。降伏したのです。

どうして戦争に負けたのでしょうか。どうして、数え切れない人、動物は殺されてしまったのでしょうか。どうして、苦しく、悲しい目にあってしまったのでしょうか。

答えは、とても簡単です。戦争をしたからです。武器を手にとり、戦ったからです。戦争さえしなかったら、殺されずに済んだ人々がいるのです。死なずに済んだのです。それぞれが、自分の人生を大切に、楽しく生きられたはずなのです。

でも、そんな日本の国は、あのときから、「もう二度と、戦争はしません。戦争のための武器や軍隊を持ちません」と世界の人々に向かって、そして自分たちに対して高らかに宣言しました。それが、僕たち私たちの日本国憲法です。憲法とは、日本の法律の基本、おおもとになる最高の法律です。この法律によって、政治家や公務員の人たちが二度と間違った政治や法律を作らないように定められました。その第九条に書いてあります。先生は、これは、日本の国が世界に一番誇れるものだと思います。そして、この九条が、世界中に広まれば、世界中から軍隊がなくなり、武器がなくなり、戦争ができなくなると思います。

さて、僕たち私たちの日本キリスト改革派教会

もまた、それまで戦争に協力して、神さまではない偶像を拝んでしまったことを神さまの前に悔い改めました。新しく立ち上がったのです。もう二度と、戦争に協力しない、もう二度と偶像を拝んで、イエスさまの福音、神さまの真理を裏切らないで生きることを神さまとこの国の人たち、教会の前で誓ったのです。

ところが今、僕たち私たちの国は、昔の日本に戻る準備をどんどん進めています。日本国憲法、特にその第九条を変えてしまおうとする政治家の人、大きな会社の社長さんたちが、多いのです。

さて、今朝の聖書のお話は、イエスさまが十字架につけられる直前のお話です。夜のことです。イエスさまは、ご自分が十字架で死ななければならないことをご存知でしたから、それはそれは真剣にお祈りしておられました。その場所に、祭司長たちや長老たちが遣わした大勢の群衆が、裏切った弟子のユダに連れられて剣や棒をもって、イエスさまを捕まえにやってきました。

それに対して、弟子の一人は、持っていた剣を抜いて、大祭司の手下に打ちかかりました。片耳を切り落としてしまったのです。ここには書いていませんが、イエスさまは、その人の耳をもとに戻していただきました。

そしてイエスさまは、そこで、こう宣言されました。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」今日の暗唱聖句です。この御言葉は、剣を振りかざしたその弟子一人のために語られたものではありません。この御言葉は、すべて武器を持って人を殺すこと、脅すこと、そのようにして相手を自分の考えどおりに支配することを禁じられたのです。

実は、弟子たちは、こう考えていました。「イエスさまは、自分たちの手でお守りしなければならぬ。」けれども、これほどの見当違いはありません。まったく勘違いしています。なぜなら、

イエスさまは、神さまの御子なのです。イエスさまは仰いました。「わたしが父にお願いできないとも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。」つまり、イエスさまは人間に守ってもらう必要などまったくないのです。反対に、イエスさまこそが、弟子たちを本当にお守りくださる王さまなのです。

皆さんの中で、あるいはお友達の中で、喧嘩の強い人がいるかもしれません。でも、その友達ももっと強い人が現れると、とたんに弱くなってしまわないのですか。誰でも皆、本当は弱いのです。だから反対に、強いふりをするのは、イエスさまは、本当に強いお方、まことの王さまです。ですから、剣を持つ必要はありません。

そして、イエスさまを信じている僕たち私たちもまた、この王さまに守られているのですから、剣は必要ありません。イエスさまのために働く人は、御言葉の剣によってだけ戦うのです。敵は、悪い人間ではなく、罪だからです。打ち負かしてしまうためではなく、救うため、癒すため、新しく立ち上がらせるために戦うのです。

今はまだ、この地上は天国になっていませんから、「おまわりさん」が必要です。武器を持つことは、おまわりさんには許されています。けれども、イエスさまが再び来られる日には、剣はまったく必要がなくなります。その日を待っている僕たち私たちは、剣をしまっけてしましましょう。剣を、平和を造り出す道具やお金に変えてしましましょう。そうすれば、戦争は終わって、平和が来るでしょう。それを先ず教会から、あなたから始めることをイエスさまは求めておられます。

イエスさまこそ、わたしたちの王さま、平和の王さまです。この王さまの命令に従う人は、平和をつくり出す人になれるのです。イエスさまの平和を心から祈り求めましょう。 (相馬伸郎)

[今週の暗唱聖句] マタイによる福音書 26章52節後半

剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。

〈ねらい〉

「剣で問題解決をしない」ということを、幼児の生活の中で考えてみよう。平和は自然に生まれてくるものではなく、創り出さなければならない。

〈展開例〉

幼稚園のお庭の鉄棒で友だちのショウ君が楽しそうに遊んでいました。鉄棒にぶらさがって1、2、3、4と数えています。30まで数えてもまだ落ちません。それを見ていたゲン君は、「ショウ君すごいなあ」と思いました。自分もやってみたい！と思って鉄棒のそばまで走っていきました。でもショウ君が鉄棒の真ん中を使っているのでもっと邪魔でした。それでゲン君は、いきなりショウ君の指を一本一本むりやりはずしてショウ君をどかそうとしました。そうすればゲン君が鉄棒の真ん中を使えると思ったからです。するとショウ君は「なにをするんだ！」と大声でどなりました。そしてゲン君の頭を一発殴りました。こんどはゲン君が二発殴り返しました。そうして二人とも泣きながら大げんかになってしまいました。そこへ幼稚園の先生がやって来て二人は叱られてしまいました。

どうしてこんなことになったのかしら。さいしょ、ゲン君がショウ君に「替わって」と言えば良かったのよね。もしダメなら、「ちょっと横に

ずれて」と頼んでも良かったね。それでもダメなら、少し待てば替わってくれたかもしれない。それとショウ君もすぐぶたないで、「どうしてそんなことするんだ」と聞けばケンカにならなかったかも知れません。結局二人ともしたかった鉄棒ができなくなっただけでなく、大げんかになり、先生にも叱られてしまい、良いことは何もなくなってしまいました。

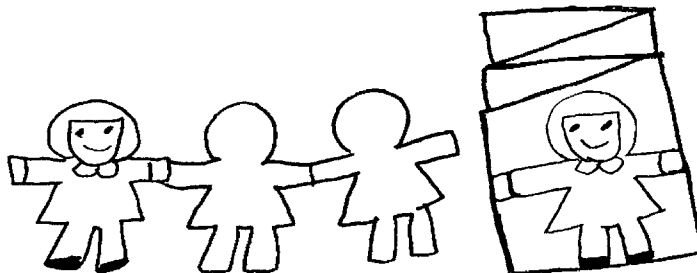
イエス様は、「乱暴をしたり、剣やいろいろな武器を使って自分の思うとおりにしようとしてはいけません。自分も剣でやっつけられることになりますよ」、とおっしゃいました。やっつけっこが始まるとなかなか終わらなくなり、悲しいことがどんどん増えます。今世界でおこっている戦争がそうです。平和がなくなります。神さまは、わたしたちが平和を創る人になることを願っていらっしゃいます。簡単なことではありません。でも、一生懸命平和を願ってお祈りしたり、考えたりすることが大切なのです。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、今週、幼稚園や保育園でお友だちと仲良くできる力を毎日ください。日本の国が世界の平和に役に立つ国になれますように。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**「みんな仲よし・切り絵」を作ってみよう**

- 下図の要領で子どもの絵を描いて折った紙を用意する。
- 折り目は切らないで全部を切り抜き、開くと三人（何人でも）が仲良く手をつないでいるのがあられる。
- 時間があれば、色を塗っても良い。



〈ねらい〉

平和について考える。
戦争について考える

〈展開例〉

8月15日が何の日か知ってますか？
今、日本は戦争をしているのでしょうか？
世界の国で戦争が行なわれているところはありますか？
なぜ、戦争をしているのでしょうか？
戦争をするとどうなりますか？
(自由に発言)

みんなの中で、お友だちとけんかをしたことある人はいますか？

お友だちを叩いたことのある人はいますか？
お友だちから叩かれたことのある人はいますか？
そのときどんな気持ちになりましたか？

けんかして、ムッとして、相手を叩いてすっきりしたでしょうか？

けんかして、お友だちに叩かれて、すっきり仲直りしたでしょうか？

叩いたり、叩かれたりして、気持ちよくなった人はいないですね～。

仲直りする時はどうしたらよいのか？ みんなはどうしてますか？

(自由に発言)

けんかしてしまったお友だちと仲直りする時は、相手を思いやる言葉で仲直りしますね。

時代劇を見ることはあまりないかもしれないけれど、昔は敵討ちというのがあって、自分の身内を殺された人が、殺した相手を探して見つけたら「父の仇～」とか言って、相手を殺す。そしたら、今度は、またその相手が「父の仇～」と言って、敵討ちをする。今、戦争をしている国の論理はだいたいそういうことになります。

イエスさまは、なんとっておられるでしょうか？

《剣をさやに収めなさい。剣を取る人は剣によって滅びる。》

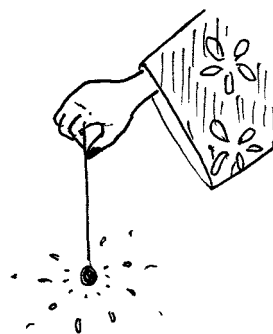
本当に、そのとおりです。

イエスさまは、何も悪くないのに、つらいつらい十字架にお架かりになったとき、どうされたのでしょうか？ 周りの人たちにめぐりかかったりしたのでしょうか？ イエスさまは神さまの子ですから、何でもできたはずですが、でも、なんて言ったのでしょうか？ 「父よ、彼らをお許してください。」そのお姿を見ていたローマの百人隊長は「本当にこの人は神の子だった」と信仰を告白しました。

私たちには、この、神さまの御子であるイエスさまが味方なのですから、意地悪な子がいても、けんかに強い子がいても、一番強いのは、イエスさまと共にいる私たちなのだということを、忘れないでください。

〈祈り〉

神さま、世界にはまだ、戦争をしている国があり、苦しんでいる人たちがいます。日本は戦争はしていませんが、毎日暗いニュースがあります。わたしたちの心の中に、何よりも、平和を愛する心をお与えください。世界中に、神さまの平和が実現しますように、心からお祈りいたします。



〈ねらい〉

「平和を創り出す」のはわたしたちの使命であることを学ぶ。

〈展開例〉**○「平和」は心の中の問題だけではありません**

皆さんは小学校でも「平和」について教えてもらったことがあると思います。どんなふうに教えてもらいましたか。教えてもらったことを覚えていますか。

今日は私も「平和」についてお話したいと願っています。「平和」は神さまを信じて生きているわたしたちにとっても大事なテーマだからです。

聖書の中にも「平和」という言葉がたくさん出てきます。実は、この言葉にはいろんな意味が込められています。そのなかで今日皆さんに覚えてほしいのは、二つの意味です。

その一つは「わたしたちの心が安らかであること」です。つまり、わたしたち人間の心の中の「平和」です。これは「平安」とか「安心」と言うほうが近いかもしれません。

しかし、「平和」の意味はそれだけではありません。もう一つは「人間同士の戦争がない状態」です。それは、わたしたちの心の中だけの問題とは言えません。

いま言った意味での「戦争」とは、皆さんもよく知っているとおり武器をもった人間、戦車や戦闘機などに乗った人間が「敵」と見定めた相手を攻撃し、実際に殺すことです。

それは、リセットボタンを押せば死んだ人がまた生き返るような、ゲームの中のバーチャルな話ではありません。現実の人間がたくさん血を流しながら死んでいく惨たらしい場こそが「戦争」です。そのような「戦争」がない状態が「平和」のもう一つの意味です。

そして、今日お話ししていることに直接関係しているのは、二番目の意味のほうです。

○「戦争する理由」に納得しないでください

実際に戦争をしてきた人たち、また今の世界の中で戦争をしている人たち、そしてこれから日本も戦争の準備をすべきではないかと考えている人たちは、「戦争しなければならない理由がある」と主張しています。「相手が仕掛けてきたからだ」とか「敵はまともな話を通じる相手ではない」とか「攻撃を受けてからでは遅すぎる」とかいろいろなことを言います。その人々の言葉の中には「そう言われてみれば、なるほどそうかもしれない」と思わず納得してしまいそうなものもあります。

しかし、です。そのような話を聞いたときは「そうか」と納得しないでください。そのときには必ず「戦争してはならない理由」のほうを一生懸命考えてください。それは必ず見つかります。そしてできるかぎり多くの人に向かって「戦争してはならない理由」を、勇気をもって大きな声で伝えてください。みんなが賛成してくれるかどうかは分かりません。でも、皆さんの言葉に賛成してくれる人たちは必ず見つかります。その人々とぜひ協力してください。この世界の人々は、人の頭の上に爆弾を落としたり、多くの人が住んでいる町に火を放ったり、そのような中で数千数万の人が一度に死んだりすることを「喜んで賛成する」人ばかりではないということ、ぜひ信頼してください。

○イエスさまがわたしたちの味方です

もちろん私も勇気をもって戦争に反対します。それがわたしたち教会の使命だからです。「平和を創り出すこと」はわたしたちの救い主イエスさまが二千年前に願われたことであり、今も、そしてこれからも永久に願いつけておられることだからです。

〈お祈り〉

神さま、「平和を創り出す」ためにわたしたちを用いてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

1. 平和について考える。
2. 平和の反対について考える。
3. 平和を具体的に創り出すことについて考える。

〈展開例〉

1. 「平和」について考える

- 生徒たちに『『平和』とはいったいなんですか?』と問い、それぞれの言葉で、平和について発表してもらおう。

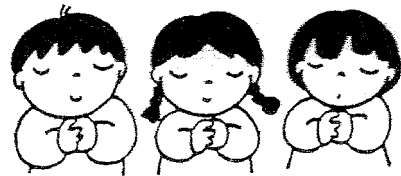
2. 「平和」の対極にあるものを考える

- 生徒たちに「平和の反対は何ですか?」と問い、それぞれの考えを発表してもらおう(例えば、戦争、憎しみ、怒り、ねたみ、恨み……)。
- 「平和」の対極にあるものの根底にあるのは、人間の罪である。それは特に「自分自身さえよければそれでよい」と考え、自らを「神」

とする自己中心の心である。そのような罪や弱さが自分たちにもたしかにあることを認め、罪の赦しと聖化のために生徒たちとともに祈りたい。

3. 「平和」の実現について考える

- 生徒たち一人ひとりの生活の中で、具体的に「平和を創り出す」ということはどういうことか考える。
- 自分の身近な人間関係の中で平和を壊すような言動をしていないか考え、「平和を創り出す」ために、何ができるか発表しあってみる。



1. 万事が益となるように共に働く

万事が「うまく行く」という意味ではありません。神のご計画という観点から判断して、万事がその目的を成就するのに役立つように働くのです。人間の思いや判断からするならば、受け入れがたいこともあるでしょう。しかし、たとえそうであったとしても、神のご計画が完全に成就するために「万事が益となるように共に働く」のです。

2. わたしたちは知っています。

目に見える結果においてすぐに納得できるならば、「わたしたちは知っています」とわざわざ確認する必要はありません。目に見える成り行きや結果において益となるようには見えないから、「わたしたちは知っています」と確認する必要があります。

神のご計画は決定的に成し遂げられました。(ヨハネ19:30) 土台は据えられました。(第一コリント3:11) 保証も与えられました。(第二コリント1:22) それゆえ、神のご計画に従って召された者たちは皆、「信仰によって義とされた」のであり、「罪に定められることはありません。」(ローマ5:1、8:1) また、すでに「神の子とする霊」を受けました。(ローマ8:15) それゆえ、神はわたしたちの味方として、いつもわたしたちと共におられます。(ローマ8:31、マタイ28:20) たとえ、わたしの良心がわたしに向かって、「お前は神の律法すべてに対してはなはだしく罪を犯しており、それを何一つ守ったこともなく、今なお絶えずあらゆる悪に傾いている」と責め立てたとしても、神はわたしたちと共におられます。(参考、ハイデルベルク信仰問答60)

しかし、その一方で、わたしたちに見える現実には、必ずしもそのような確信を励まして確認するようなものではありません。神のご計画の完全な実現は希望の中にあります。それゆえ、パウロはこう教えます。「わたしたちは、このような希望によって救われているのです。」(ローマ8:24)

目に見える結果によって、神のご計画を理解しようとする人々は、据えられた土台から迷い出てしまうことになるでしょう。たとえ、目に見える現実には神のご計画への知識と確信を試すものであったとしても、あくまで忍耐するのです。「見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。」(ローマ8:24~25)

3. ご計画に従って召された者たち

「神のご計画に従って召された者たち」にとっては、どのようなことが起きようとも、神のご計画の中の出来事です。「だれがキリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」(ローマ8:35) たとえ、どのようなことがあっても、神を愛する者たちは、神のご計画の中にいるのです。

4. 神を愛する者たち

「神を愛する者たち」にとって、神のご計画の内容はすべて、自分たちに対する神の愛以外の何ものでもありません。その愛は、罪人を救う愛です。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。」(第一ヨハネ4:10) その愛を知るために、わたしたちは次の三つのことを知らなければなりません。第一に、自分の罪と悲惨がどれほど大きいか。第二に、自分のあらゆる罪と悲惨からどうすれば救われるか。第三に、そのような救いに対して自分がどのように神に感謝すべきか。(参考、ハイデルベルク信仰問答2) その愛を学び続ける人々は、たとえ試練に苦しむことはあっても、常に神の愛の中に自分たちが置かれていることを知るでしょう。(貫洞賢次)

子どもカテキズム

問13 神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答 今、私たちに働く、神さまの善いお力のことです。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、

神さまは私たちの父として私たちを守ってくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、

すべてのことが私たちの役に立つよう働くのです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問11、ハイデルベルク信仰問答 問26～28

〈神は今も現実に働かれる〉

神の摂理とは、神が創造され、現在私たちが生きる世界を、今もご自分の手で保ち支配されることである。私たちが世界を眺める時、自然法則などの法則性を見いだす。だがこうした法則のみが世界を動かすと判断してはならない。また運命や因果応報だけで世界が動くのでもない。(問14参照) 逆に世界が無秩序で偶然の成り行きに任されているのでもない。神様は創造の後も世界を野放しにされることなく、今に至るまで、そしてこれから私たちの人生と世界を支え導いておられる。

〈摂理は父なる神による、善い働き〉

ただし摂理を単に「神のお力、支配が今もある」と言うだけでは、私たちにとっての慰め、支えとはならない。力を持つ者が悪い方向に力を働かせるならば、それはむしろ私たちの苦しみにしかならないからである。そこで私たちは、今も働く神の摂理とは「私たちの父」なる神の「善い」お力であることに目を留める必要がある。天の父なる神は、神の子としてくださった者に愛をもって最善をなさり、私たちを守ってくださる。イエス様は、一般にわずかな値打ちしかないと言われる雀一羽さえ、父なる神の許しなしに地に落ちない、また人の髪の毛までも一本残らず数えられている(マタイ10:29,30)とおっしゃって、神の摂理は父の愛をもってなされることを示された。

〈人の目には逆境と映っても〉

神の摂理の働きが今も世界と人々に及んでいる、という信仰は日々の生活の現実によって絶え間なく揺さぶりを受ける。人は病気、災害、貧困

など種々の命の危機、わざわい、逆境にさらされる。この現実、神の善い力が今も世界に及ぶという摂理の主張と論理的に矛盾するのでは、と考える人間も現れた。実際過去の歴史では、神が世界を野放しにされている、神が無力、または神様と対等に張り合う悪がある(善悪二元論)といった主張によって理不尽な現実との折り合いをつけようとした人も出た。

私たちは聖書のみ言葉に丁寧に耳を傾ける必要がある。先述のイエス様のみ言葉は、神が許されるなら雀や髪の毛も地面に落ちることを含意する。しかし落ちるといふ逆境は神の子とされた信仰者にとっては直ちに神から見放されたことを意味しない。私たちが愛する父なる神の許しの下で起こることであるから、私たちにとってわざわい、マイナスのままでは終わらない。この点を私たちは、創世記のヨセフ物語、そして何よりもキリストの死から鮮やかに知らされる。キリストの死は罪人の悪意によっていわれ無き罪状を負わされ、罪なくして十字架にかけられる悲しい出来事だった。しかし神はその死を非業の死に終わらせることなく、私たちに罪の赦しと永遠の命の益を与える業とされた。神は、病気や災害などそれ自体ではつらく悲しいことも私たちにもたらされる。だが神の摂理としてなされるなら、「召された者たちには、万事が益となるように共に働く」(ローマ8:28)ことになる。このことを味わい知った時、私たちは今の現実のただ中であっても神の父としてのご支配、摂理を信じることができるようにされる。(吉田 崇)

テキスト ローマの信徒への手紙 8章28節
カテキズム 子どもカテキズム 問13

〔単元のねらい〕

今回と次回の二回にわたり、摂理について学びます。子どもたちが摂理を理解しようとする時、大切なことは、生きて働いておられる主なる神さまが、今も私たちと共におられることを受け入れることにあります。このことを抜きにして、神礼拝は存在しませんし、そうした状態で教理が語られたとしても無意味だからです。私たちが神さまを信じることの最も根本的なことですから、繰り返して確認していただきたい。

次に、神さまを信じる全ての人は、神による救いにあずかっており、最高の祝福である神の国が約束されている事実です。主なる神さまのこの約束があるからこそ、私たちは日々の生活に安らぎが与えられ、感謝と喜びをもって主なる神さまを礼拝することが出来るのです。

だからこそ、私たちは神礼拝を通し、主なる神さまによる救いを受け入れ、日々の生活においても、そのことを実感して生きることが求められているのです。

ウェストミンスター信仰告白第5章、同大教理問18～20、同小教理問11～12を参照。

「神さまはいつも一緒にいて下さるよ！」

みんなは、主なる神さまが、今ここにおられ、みんなのことは見守って下さっていることが、分かるでしょうか？ まだ神さまと一緒にいて下さることが分からない子どもたちがいるかも知れません。でもね、みんなは神さまのことを信じて、お祈りしていませんか？「明日は遠足があります。だから、神さま、晴れにして下さい」って。この時、神さまが今この祈りを聞いておられ、それを適えて下さることを信じて、祈っているのはありませんか。

そして神さまは、ただみんなの祈りを聞いておられるだけではありません。みんなが教会に来ていることも、学校で授業を受けていること、友だちと遊んでいること、家で悪ふざけをしていることも、みんな神さまはご存じです。その時の行いばかりか、何を話しているのか、何を心の中で思っているのかも、みんな神さまは知っておられます。聖書には、「あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。」(マタイ10:30)とさえ、イエス様はお語り下さっています。みんなは自分の

ことならば何でも分かると思っているかも知れませんが、髪の毛が何本あるかなんか、数えることもしないでしょう。神さまは、この様なみんなが知らないことも、すべてご存じなのです。

それは、主なる神さまが、みんなのことを愛しておられるからです。そして神さまは、みんなのことを関心を持ってすべての行動を見守っていて下さいます。だからこそ、神さまは、いつでもみんなの祈りを聞いて下さるばかりか、その祈りを聞き届けて下さるのです。

「でもね、明日は晴れにして下さいって祈ったのに、雨だったから遠足行けなかったよ」という経験をしたこともあるかと思います。しかし、それは、神さまが祈りを聞き届けて下さらなかったとか、意地悪をしたから、雨になったわけではないのですよ。

みんなのお父さん・お母さんがみんなのことを愛して下さっているのと同じように、神さまはみんなのことを愛して下さっています。みんなのお父さん・お母さんは、みんながお菓子を

食べたいと言った時に、石を買ってきますか？お菓子か、そうでなくてもみんなが喜ぶような食べ物を買ってきてくれるでしょう（参照：マタイ7:7～12）。しかし、お父さん・お母さんは、みんながお菓子を欲しがれば、いつでも買ってくれるかと言えば、そうではないでしょう。「今日はダメだよ」とか、「今日は一個だけでそれ以上はダメ」と言われることもあると思います。それは、お父さん・お母さんが意地悪をしているのではないのですよね。みんなのことを愛しているからこそ、栄養が偏ること、太ること、ご飯が食べられなくなることなんかを考えて、「今日はダメ。明日にしましょう。」と言うのではないのでしょうか。

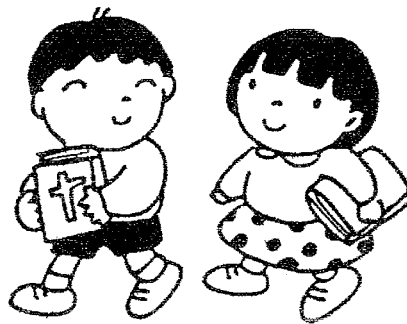
それと同じように、神さまもみんなのことを愛して下さっているからこそ、神の御子であるイエスさまが十字架に苦しみ、死ぬことをとおして、みんなが神の国に行くことが出来るようにして下さいます。それだけ神さまは、みんなのことを愛して下さっています。だからこそ、

みんなが「明日は雨が降りませんように」と祈ったのに雨になったのは、神さまのイタズラではありません。確かに、雨になったら、みんなも遠足に行けなくて、悲しむだろうなど神さまは思っておられるはずですが、遠足に行けないことを我慢することによって、これから苦しい時や悲しい時が来ても、それを乗り越えて生きる力を、神さまはみんなに教えて下さっているのですよ。

だからこそ、一番みんなのことを愛しておられる主なる神さまが、今もみんなと一緒にいて下さるのです。そして祈りを聞いて下さるのです。苦しい時に助けて下さるのです。悲しい時に支え、励まして下さるのです。だからこそ、私たちは不安になることもなく、神さまにすべてを委ねて、生きることが出来るのではないのでしょうか。みんなを愛し、すべてを知っておられる神さまが、みんなが神さまを礼拝して、神さまを信じ、神さまを讃美することを、喜んで下さいます。（辻 幸宏）

〔今週の暗唱聖句〕 ローマの信徒への手紙 8章28節

神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、
万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。



〈ねらい〉

全てを益とされる神さまの自分へのお働きかけに思いを馳せる時としよう。できれば教師自身の証しを。展開例はひとつの例。

〈展開例〉

今日は、田原米子（たわらよねこ）さんという女の人の話をします。米子さんは若いときの事故で両方の足と左手と右手の二本の指を無くしました。残っているのは右手の三本の指だけでした。指一本ケガをしても大変なのに、どんなに米子さんはたいへんだったでしょうね。もう自分なんかどうなっても良いと思ひ、ただ泣いてベッドで寝ているだけだったそうです。そんな時、教会の牧師先生が来てくださり、神さまがどんなに米子さんを愛して心配してくださるかを毎日聖書を開いてお話していただきました。最初、米子さんはそんなお話は聞きたくないと思っていましたが、だんだん真剣に聞くようになりました。そして、イエス様が自分のために死んでくださったことがわかり、神さまを信じる人になりました。やがて牧師先生と結婚して、子どもを二人育てました。それから神さまのお話を日本中、外国にも出

かけてするようになりました。神さまが自分をどんなに愛してくださるかを話さずにはいられないくらい嬉しかったのです。米子さんが三本の指だけで鶴を上手に折るのを見て驚く外国の人もいましたが、それよりもいつもニコニコしている米子さんの顔を見て不思議に思いました。それで米子さんをそんな風に変えた神さまを、自分も知りたいと思う人が出てきました。米子さんを通して神さまを信じる人がたくさんうまれたのです。三本の指しかない米子さんが話す神さまのお話は、悲しんでいる人や元気を無くしている人に力をくれました。事故は悲しい出来事でしたが、そのことを通して神さまは米子さんに素晴らしいお仕事をさせてくださったのです。

米子さんは二年ほど前、椅子に座ってお話をしていたときに突然亡くなりました。67歳でした。ご主人は米子さんと結婚して一緒に暮らしてほんとうに楽しかった、とおっしゃっていました。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、どんなこともぼくたちわたしたちにおこることは、全部一番良いことだと信じられますように。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「主はすばらしい」をうたいましょう

「主はすばらしい」に手の振りをつけて歌いましょう

(いのちのこば社『プレイズワールド（合本）』29番)

しゅは（あたま） すばらし（肩） いー（胸の前で手をたたく）

しゅは（あたま） すばらし（肩） いー（膝をたたく）

しゅは（あたま） すばらし（肩） いー（胸の前で手をたたく）

わた（膝） しー（あたま） のー（肩） しゅー（胸の前で手をたたく）

○全部両手で二回ずつ軽くたたく。頭・肩・拍手・膝を繰り返す。

○速度を変えたり、逆コースなど……自由に工夫して。

〈ねらい〉

神さまは私たちのことを知っていてくださる。

〈展開例〉

天と地を創ったのは、どなたでしたか？

神さまは天と地をどのように創られましたか？

そうです、言葉だけで、そしてとっても良いものとして創ってくださったのでしたね。

では、天地創造を完成された神さまは今何をしておられるのでしょうか？

暇だなあと言ってボーッとしているのでしょうか？

何か他のことをしているのでしょうか？

神さまはね、天と地を創り終わってから、ずっと、この世界をずっと見ていてくださっています。見ているだけでなく、私たち一人ひとりにとって、何が本当に必要なのかということまでご存じなのです。

私たちは、神さまにお祈りをします。神さまにお願いをします。お祈りが聞かれたことも、聞かれなかったこともあると思います。どんなことがあったかな？

聞かれたお祈り（自由に発言）

聞かれなかったお祈り（自由に発言）

ここで、ちょっと考えてみましょう。

太郎君は学校から帰ってくると「神さま、明日の算数のテストで、100点取れますように」とお祈りしました。そして、「ぼくは神さまにお祈りしたから、大丈夫」と言って外に遊びに行き、夕食の後もずっとTVを見て、寝てしまいました。

次の日のテストは、50点しか取れませんでした。神さまはお祈りを聞いてくれなかったのでしょうか？（自由に発言）

神さまが太郎君に100点を取らせなかったのは、太郎君のお祈りを聞かなかったからではなく、ちゃんと勉強をすることが必要だということを太郎君に教えるためですね。

神さまは、私たちの願いをすべて、「はい、はい」とかなえてくれるのではなく、私たちに何が必要なのかということをお教えるために、聞かれない祈りというのがあるのです。

悲しい時、心を込めて「神さま」とお祈りしたら、慰められます。誰もわかってくれないと、つらくなるような時も、神さまが、私たちの辛さを知ってくださるのです。そして私たちのそばに、祈る者のそばにともにいて励ましてくださるのです。

〈祈り〉

神さま、悲しい時、うれしい時、いつも私と共にいてくださってありがとうございます。どんな時も神さまを信じて、歩いていけるように守ってください。



〈ねらい〉

「摂理」の意味を学ぶ。

〈展開例〉**○難しいですが大切な言葉です**

「摂理」って難しい言葉ですね。小学校ではたぶん教えてもらえない言葉です。ふりがなを見ないで読めたという人はいますか。字を全く見ないで書けるといふ人はいますか。この言葉の正しい意味を知っている人はいますか。辞書の中には「キリスト教の用語」という断り書きがついているものもあります。「摂理」という言葉を見たことも聞いたこともないという人がいるとしても、無理もないことです。

それでは「摂理」とは何でしょうか。分かりやすい言葉で説明することは難しいのですが、なんとかがんばって説明してみますね。

○「創造」の次のみわがが「摂理」です

「摂理」の意味を考えるために、まず思い出ししてほしいのは、前に勉強した「創造」という言葉です。「創造」とは、神さまが世界とすべての人間をお造りになったことでしたね。

「摂理」とは「創造」“次に”神さまがしてくださることです。「えっ、何のこと？」と思われるかもしれませんが。もう少し説明します。

たとえば言えば、「創造」はお母さんのおなかから赤ちゃんが生まれる瞬間の出来事に似ています。人間だけの話ではありません。動物たちの場合も同じです。

でも、問題はその後です。生まれたらそれで終わり、ということはないですよ。お母さんと、そしてもちろんお父さんは新しく生まれてきた赤ちゃんのことを「育てること」や「守ること」をしなければなりません。親が子どもを育てる義務や責任を意図的に果たさないことを、今の人は「育児放棄」とか「児童虐待」と呼びます。それはとても重い罪です。

人間や動物の場合の「育てること」や「守ること」が、神さまの「摂理」に当てはまります。神さま

はこの世界と人間をお造りになっただけでハイ終わり、あとは全く知らんぷり。世界がどんなにボロボロに壊れようと、人間がどんなにひどい罪を犯そうと、わたしには関係ありませんと突き放すような“冷たい”方ではありません。神さまは「創造」によって新しく生み出された生命を「育てること」や「守ること」のために一生懸命に働いてくださる方なのです。そのように一生懸命に世界と人間を守ってくださる神さまのお働きを「摂理」と呼ぶのです。

○世界を守る責任はわたしたちにもあります

「摂理」の意味、分かりましたか。とにかく分かってほしいことは、「神さまは、わたしたちのことを、ちゃんと守ってくださっています。それが摂理です」ということです。

そして、今日はもう一つだけ、大切なことをお話しておきます。それは「創造」と「摂理」の違いです。

「創造」は神さまが何もないところにすべてのものを創り出してくださったことでしたね。本当に何もなかったのですから、神さまはその仕事を、すべておひとりでなさいました。

でも、「摂理」は違います。「摂理」は「創造」の次に神さまがしてくださる仕事ですと言いました。つまり、「摂理」のときには、「創造」によって生み出された人間がいます。「摂理」は、神さまがおひとりでなさる仕事ではありません。“わたしたち人間が神さまと協力する”という要素が「摂理」にはあるのです。その意味は、世界を守る仕事は、神さまだけに任せておけばよいわけではなくて、わたしたち人間にも責任があります、ということなのです。

〈お祈り〉

神さま、いつもわたしたちを守ってくださり、感謝いたします。小さな命や大切な自然を守るために、わたしたちにできることを教えてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

摂理に御業について理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問13：神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答：今、私たちに働く、神様の善いお力のことで

です。

神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、

神さまは私たちの父として私たちを守って

いてくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、

すべてのことが私たちの役に立つように働くのです。

〈展開例〉

1. ウェストミンスター小教理問答から、「摂理」について考える

問11：神の摂理とは、何ですか。

答：神の摂理の御業とは、

神が、最も聖く、賢く、力強く、すべての被造物とそのあらゆる動きを、保ち、治めておられることです。

○この問答から分かることを発表しあってみよう。

○ウェストミンスター信仰規準は、「摂理」の御業を「保ち、治める」神の働きとして教えている。神は、ご自身が創造した被造物を、創造が完成した後も、御手によって保ち、治めておられる。

○神の摂理の御業は、「保つ」だけではなく、「治める」とも告白されている。これは、ただ世界や「私」が今日も保たれているだけではなく、神の聖さと賢さによって、最も良い状態へと導かれているということである。

2. 「聖く、賢く、力強く」ということについて

○神は、最も聖く、最も賢く、最も力強く、すべての被造物を摂理しておられる。つまり、神は何も考えずに摂理（保持、統治）の御業をされているのではなく、その無限の賢さ（知恵）によって、最善へとすべてを導いておられるのである。

○私たちは「なぜ、こんなことが私の人生におこるのか」と問うことがしばしばあるが、しかし、その出来事の背後には、私たちにはわからない神の聖さと賢さが必ずあるのである。



1. 多くの利益を得させていた

占いの霊に取りつかれている一人の女奴隷がいました。しかも、大変な人気を得ていたようです(16節)。ここで「占い」と言われているのは、デルフォイの神殿でギリシャの神アポロの靈感を受けて未来のことについて言い当てることを意味しています。

フィリピにはユダヤ人の会堂はなく、町の門の外に祈りの場所があるだけでした。(13節)そこはまったく異教徒の町でした。だから、占いがさかんだったのでしょうか。そうとは言えません。未来のことを知りたいという願望は、異邦人であれユダヤ人であれ、すべての人間に共通するものです。イスラエルの民もまた、占いの誘惑から自由ではありませんでした。特に不安に駆られる時、人々は占いを求めました。イスラエルから占いを排除したはずのサウル王でさえも、敵の陣営を見て恐れた時、占いのできる女を捜させました。(サムエル上28:4～10) また、イスラエルの民の不安をいやすように、偽預言者たちはむなしい幻や欺きの占いを語りました。「彼らはむなしい幻を見、欺きの占いをを行い、主から遣わされてもいないのに、『主は言われる』と言って、その言葉が成就するのを待っている。」(エゼキエル13:6) 預言者たちさえも、神の御言葉の形を借りて、占いを語ったのです。そして、人々もそのような言葉を好みました。

2. 金もうけの望み

「この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。」(19節) 占いの言葉に気休めを得た人々も、結局金もうけの対象にされていたにすぎませんでした。占いの霊に取りつかれた女も、金もうけの手段でした。占いの周辺には、金銭の欲が絡んでいます。

3. 占いの罪

占いは罪です。「反逆は占いの罪に、高慢は偶像礼拝に等しい。主の御言葉を斥けたあなたは王位から斥けられる。」(サムエル上15:23) 占いの罪は、主の御言葉を斥けることにほかなりません。

確かに信仰が試される時、もっと未来のことを知って安心したいと思うかもしれません。あるいは、主の御言葉に基づく悔い改めも服従も、厳しい現実とは何の関係もないように思われるかもしれません。しかし、時が良くても悪くても、主の御言葉にとどまることこそ、本当の安心を得る道です。占いは気休めであり、神への反逆であり、神以外のものに信頼を寄せる偶像礼拝です。

4. 占いの実現

占いが実現したように見えることがあります。それゆえ、人気があるのでしょう。しかし、こう教えられています。「預言者や夢占いをする者があなたたちの中に現れ、しるしや奇跡を示して、そのしるしや奇跡が言ったとおり実現したとき、『あなたの知らなかった他の神々に従い、これに仕えようではないか』と誘われても、その預言者や夢占いをする者の言葉に耳を貸してはならない。」(申命記13:2～4) その時にもあわてず、神を愛して信頼していればよいのです。主はそのようにして、わたしたちの愛を試しておられます。(申命記13:4)

世は不信仰に閉ざされた闇です。闇の中で起きたことは、手探りではその真相がわかりません。世の光によってだけ、正しく判定されます。「光は暗闇の中で輝いている。」(ヨハネ1:5) パウロとシラスは、何度も鞭で打たれ、木の足枷をはめられて、いちばん奥の牢に入れられたとき、賛美の歌をうたって神に祈りました。(24-25節) 彼らに占いは必要ありませんでした。「お前たちは、立ち帰って静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」(イザヤ30:15) (貫洞賢次)

子どもカテキズム

問14 運が悪いと言ったり、占いを気にしたり、たたりを気にすることはできますか。

答 私たちにはできません。神さまより大きく強いものはないからです。父なる神さまは私たちを愛してくださるのです。ですから、たとえひとりぼっちでいてもこわくはありません。そんなとき、私たちは、「天のお父さま」とお名前をお呼びします。お祈りすると、神さまと一緒にいてくださることがわかるのです。

参考教理問答 ハイデルベルク信仰問答 問94～95

〈世界は目に見えぬ何かが動かす、と感じて〉

私たちの周囲では運（運命論）、占い、たたり（因果応報論）にこだわる人が少なからずいる。テレビや雑誌などメディアを見るなら人の運勢を占うとか因果を分析するとか称するものが随所にある。20世紀には科学の発展によってこれらを迷信として片づけようとする動きが起こった。だが21世紀になっても占いや運、たたりを気にする流れは一掃されていない。目に見えるものや科学的分析だけでは説明がつかないことがあるからである。そこに神から与えられた「永遠を思う心」（コヘレト3:11）が相まっていくと「目には見えず、人間では左右できない不思議な何かが世界で働いている」という思いが人々に引き起こされる。では目に見えない何かの正体は、と考えを巡らすと、神から離れ墮落した人間は「生ける唯一の神様の摂理」という答えには至らず、運命のいたずらやたたりというものを導き出す。そしてそこである納得を得て思索は止まってしまう。

かくして占い、魔術といったものは、世界が唯一の神様の摂理のもとにある、ということを見失わせるために、旧約時代から申命記18:9-12などで禁じられてきた。

〈父なる神の愛と摂理によって離れる〉

だが占いや運命論、因果応報論は昔から今に至るまで、世界各地において人々の心を掴んでいる。「それは迷信だ」と言うだけではやめさせることはできない。聖書にも因果応報論に基づく言動が出てくるのが何よりもよく物語る（もちろん因果応報論はいけないと語るためであるが。）ヨブ記に登場するヨブの友人、ヨハネ9章ではよりに

よってイエス様の弟子たちが「目が見えない原因はこの人の罪かその親の罪か」と言ったことがその一例に挙げられよう。人間をこうした誤りから解き放つのは、父なる神の生ける働きかけである。マタイ2章に東方からイエス様のもとを訪れた三人の物語がある。かつては「東方の博士」と称されたが、より正確には新共同訳のように「占星術の学者」である。神が星を用いて三人の学者をイエス様の元に導いたこの話は、占星術など占いを制圧して強く働かれる父なる神の摂理を示し、人間がより頼むべきは天の父なる神だけであると語る。また占いをしていた女性にキリストの名によってパウロが命じると、彼女は占いができなくなったという使徒16章の話も同様である。

現代において私たちは、父なる神に祈り、神の摂理に目を開かれることによって、神こそが何者よりも上にたち、ただ一人礼拝すべきお方であることへと導かれる。

〈運命論、因果応報論は人を不自由にする〉

また父なる神の摂理と愛に触れることによって、私たちは運命論や因果応報論が人を不自由にすることに目を開かれる。「運命がこうだから、あなたはこう行動しなくてはならない、因果応報から逃れるには、あなたはこうするほか道はない。」人はそうした指示にただひたすら従うだけで、自らの自由と責任を放棄した主体性なきロボットへと墜ちてしまう。そしてそこまでしても生活が窮屈になりこそすれ恐れは去ることはない。父なる神の摂理と、この神に私たちを結びつけるキリストの十字架の福音は、こうした不自由さと恐れを取り去る。 (吉田 崇)

テキスト 使徒言行録 16章16～24節
カテキズム 子どもカテキズム 問14

〔単元のねらい〕

先週に引き続き、摂理の教理から学びます。現在の日本社会にあって、運命、占いは、子どもたちにとって、避けて通ることの出来ない問題です。マスコミやお友だちに流されることなく、全能の神、創造の神への信仰に基づく、摂理の神への信頼を子どもたちに確かめていただきたい。そのためには、責任を取らないマスメディアにではなく、子どもたちのことを愛し、キリストの十字架により、罪の赦しと救いをお与え下さっている主なる神さまの愛を伝えることが何よりも重要なことです。

ウェストミンスター信仰告白第5章、同大教理問18～20、同小教理問11～12を参照。

「占い？ ちっぽけなものを信じないで、すべてをご存じの神さまを信じようよ！」

みんなの中には、テレビや雑誌にある星占いや血液型占いといったことに興味がある人もいます。「今日の運勢」なんかも言われますよね。「今日は運勢が良いから、良かった」とか、「今日は運勢が悪いから、ラッキーアイテムを持つようにしましょう」とか思ったりするのでしょうか？

でもね、みんなに聞きたいのだけれども、こういったものは、誰が考えているの？ 神さま？ 神さまが、今、この様なことをテレビや雑誌によって私たちに語りかけられることなどないですよ。占い師さんが考えるのですよね。それは占い師さんが、占って、こうだと言うことでテレビで伝えているのですが、それはあくまでも占い師さんの考えですよ。

そうであるならば、占い師さんは、神さまよりも偉いの？ 占い師さんの言うことを聞いていれば、ハッピーになれるの？ 決してそのようなことはありません。「占い」が「当たる」こともあるでしょうが、「外れる」こともあるのです。それは占い師さんの考えだからです。

ではどうして大勢の人たちが占いを信じるのでしょうか？ 占いについて話し合うのでしょうか？ それは真に生きて働いておられる主なる神さまのことを知らないからです。主なる神さまは、天と地とすべてのものを六日の内に創られ、その

時から、すべてのことを支配しておられるお方です。先週学びましたが、神さまは、みんなの行いも、話す言葉も、心の中も、すべて知っておられるお方です。だからこそ、神さまは、神さまを信じている私たちを、神の国（天国）に行くまで、見守り、私たちと共にいて下さるのです。私たちを助け、私たちの必要を満たして下さいます。だからこそ、私たちは、占いや運勢に頼る必要はないのです。そのようなものに頼るのならば、みんなのことをすべて知っておられる主なる神さまを頼りにすれば良いのです。

最初にお読みしました聖書にも、占いをしている女性について語られています。多くの人たちが、占いを信じるから、占い師はお金をたくさん稼ぐことが出来るのです。この女性は、奴隷だったので、占いで稼いだお金によって主人たちは、多くの利益を得て、儲けていました。主人たちにとっては、占いが当たっても当たらなくても関係ないのです。多くの人たちが占いに興味を持ち、お金を払って占ってもらえば良かったのです。

こうして金儲けをしていた女占い師の所を、パウロたちが通りかかります。この女占い師は、悪霊によって占っていたのですが、真実の霊である主なる神さまも知ることが出来たのです（参照：

マルコ3:11)。だからこそ、女占い師は、パウロたちに何日も付いて行き、「この人たちは、いと高き神の僕で、皆さんに救いの道を宣べ伝えているのです」と叫ぶのです(16:17)。

この女占い師の語ったことは、真実ですが、神さまを信じて、好意的に語っているのではなく、悪霊によって語っているのです。だからこそ、パウロはこの女占い師に付いている霊に語ります。「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け」。すると即座に、霊が彼女から出て行ったのです(16:18)。

主なる神さまは、悪霊をも、占い師をも支配しておられるのです。だからこそ、パウロは主イエス・キリストの名によって、悪霊をあぶり出すことが出来たのです。

しかしこの女占い師で金儲けをしていた主人たちは、金儲けが出来なくなったため、こじつけてパウロたちを捕らえ、鞭を打ち、牢屋に閉じこめ、足枷をはめます。こうした行為は、ローマの法律に照らしても、正しい行為ではありません。こうした行為を行うのは、主人たちが、占いによって

真実を伝えようとしていたのではなく、あくまで金儲けを行うために占いをしていた証拠でもあります。占いを信じるということは、自分の人生の手引きのなるものではなく、彼らのように金儲けをしようとしている人たちに遊ばれているのです。だからこそ、私たちは、占いにだまされてはダメなのです。

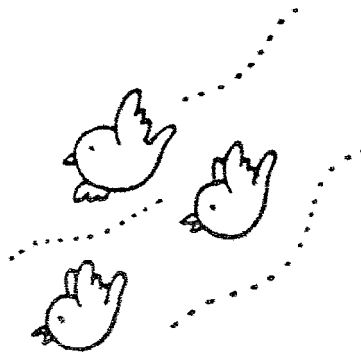
しかし主なる神さまはどうでしょうか？ 主なる神さまを信じて、神さまを証しているパウロさんたちは、真実が示され、釈放されます(16:37～40)。

そして主なる神さまは、みんなのことを心から愛して下さっています。神さまを信じているみんなは、すでにイエス様の十字架によって、罪が赦され救われているのです。神の子となっているのです。そうであるならば、みんなが苦しい時、悲しい時、寂しい時、神さまに祈れば、神さまはその祈りを聞いて下さり、答えをお与え下さいます。だからこそ、もう占いなんかには頼る必要はないのです。(辻 幸宏)

[今週の暗唱聖句] 使徒言行録 16章18節後半

「イエス・キリストの名によって命じる。この女から出て行け。」

すると即座に、霊が彼女から出て行った。



〈ねらい〉

占い・呪い・迷信などを神さまより畏れたり、信頼することが罪であり、不幸であることを教える。

〈展開例〉

皆さんは、「イタイタイの飛んでいけ〜」ということをやったり聞いたことあるでしょう。先生もあります。転んだりしたときに、「早く痛いのが治りますように」という気持ちで言うわけです。でも、いったい誰にお願いしているのでしょうか。

礼拝のお話で聞いたように、占いというのは、目には見えない何か特別な霊のようなものに頼ったり、信じたり、怖がったりすることです。占いは、「信じてハッピー！」というよりは、気にかかったり、心配だったりすることのほうが多いです。「何とか座の人は今日は一日楽しい日になるでしょう」なんて言われたら嬉しい気持ちになるでしょうが、反対に「何とか座の人はお金を落とすかも知れません」なんて言われると心配でたまりませんね。嬉しかったり、心配になったりを繰り返して少しも安心できません。

わたしたちは生まれる前から神さまが愛して

守ってくださるのです。神さまを信じていてもケガをすることも、病気になることも、お金を落としたりすることもあるでしょう。そういう全部のことは通して神さまはわたしたちに一番良いようにしてくださるのです。訳の分からない占いなど心配したり怖がったりする必要は全然ありません。占いはわたしたちの心を神さまに頼らないようにする悪魔の仕業です。でも大人の人でも占いを信じることから離れられない人もいますから、馬鹿にはできません。わたしたちも占いなど畏れないように神さまにいつもお願いすることが大切です。神さまから離そうとする力からわたしたちを守ってください、と祈りましょうね。もちろん、どんな霊よりも神さまが一番強いのです。神さまを信じて安心していることと、占いを気にして過ごすことと、どちらが幸せかわかりますね

〈お祈り〉

天の父なる神さま、占いなど信じないで神さまだけを信じて頼ることができるようにいつも守ってください。お友だちもそうできるようにお願いします。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**ゆっくりおしゃべりしましょう**

- 夏休みの旅行などから帰ってきた子どもたちが多くはないでしょうか。お休み中の子のために祈っていたことを伝え、一人ひとりの感想や夏休みの様子などをゆっくり聞いてあげる時間しましょう。
- 旅行に出かけた子ばかりではないでしょうから、プールや虫取り、ラジオたいそう、おじいちゃんおばあちゃんとの出会い、できるようになったお手伝いなど、なんでも話せる雰囲気を心がけ、子どもたちをさらに深く理解できる機会にもなればいいですね。

〈ねらい〉

占いを信じないようにしよう。
本当の神さまを信じる。

〈展開例〉

占って知ってますか？ 占いをしたことがある子はいるかな？ どんな占いがありますか？

（自由に発言）

血液型占いというのがありますね。自分の血液型を知ってますか？ A型B型O型AB型の血液型によって、その人の性格がわかるというものですね。でも、ちょっと考えるとおかしいですね。世界中の人たちが四種類の性格に分けられちゃうわけです。クラスで同じ血液型の子がいたら、その子と同じ性格になるわけです。その子と一緒に笑ったり泣いたりするのでしょうか？

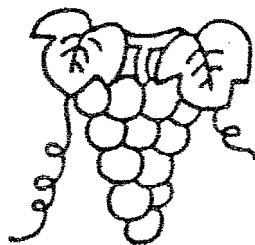
星占いと言うものもありますね。空に浮かぶ雲を見て、あれはクマに似ているとか、うさぎに見えるとか、アイスクリームに見えるとか、想像したことありますよね。それと同じように、夜空の星を見て、あの星とこの星とこの星を線で結んだら、かには見るとかクマに見えるとか、大昔から人間は想像したわけです。あれはおうし座とか、さそり座とかいう名前の星座になったわけです。同じ星座の星々はそれぞれ何光年も離れているのに、「今日のおうし座の人は、忘れ物に注意！」とか言うのは……？ どう思いますか？ そんな星座が私たちを守ってくれると思いますか？

本当に私たちのことを知っていて、私たちを守ってくださるのは、だれでしょうか？

そうですね。この世界を創ってくださった本当の神さま、私たちのために十字架にかかって私たちの罪を贖ってくださったイエスさま、そして、今も私たちと共にいてくださる聖霊なる神さまで。私たちは本当の神さまに守られているからそんな根拠のない占いなんかに、振り回されることはないのです。振り回されてはいけません。

〈祈り〉

神さま、いつも私たちをともにいてくださりありがとうございます。でも、まだ神さま知らないお友だちは、作り事の占いを信じています。どうか、そのようなお友だちが、本当の神さまのことをわかることができるようにしてください。



〈ねらい〉

「摂理」と「運命」の違いを学ぶ。

〈展開例〉**○「摂理」と「運命」は全く違います**

先週私は、あの難しい「摂理」という言葉についてお話しました。「あー、あれか」と思い出していただきましたか。それとも忘れちゃったかな。

今日も「摂理」の話をしします。ただし、話の内容は先週のとはちょっと違います。今日の話は、「摂理」と「運命」は全く違うものです、ということ。

○「運命」とは

この「運命」と「摂理」はよく似ているものだと思います。ごちゃ混ぜにされたりすることがあります。

「運命」という言葉を聞いて多くの人が連想することは、人間の力を越えた存在が、世界と人間の将来を、人間の意志とか願いなどお構いなしに“勝手に”決めてしまうこと、でしょう。人間は「運命」に全く逆らうことができない。わたしたちは、線路のうえを走る電車のように、あらかじめ決められた道をただ走るだけ。立ち止まることも、別の道を進むことも、許されていない。たぶんこれが「運命」のイメージです。

○「摂理」とは

これと「摂理」は全く違うものだという事は、先週の私の話を覚えてくれている人なら、分かっていたはずはです。

「摂理」の意味は、神さまが御自身でお造りになった世界と人間を、いつも守ってくださり、育ててくださる、ということです。神さまは、悪い親たちのように、自分たちが生んだ子供を育てる責任を意図的に果たさない「育児放棄」の罪を決して犯さない、子育て上手な優しい方である、ということです。

つまり、言い方を換えれば、「摂理」の意味に

最も近い言葉は「愛」であるということです。神さまは、わたしたちのことを、いつも心から愛してくださっているのです。神さまはわたしたちのことが大好きなので、大切に育ててくださり、守ってくださるのです。

これと「運命」は全く違うものです。「運命」のイメージはわたしたちがそれに逆らうことができない鋼鉄製の線路のようなものだとしたら、「摂理」のイメージは、（あくまでも例えですが）自動車の助手席に座って、地図を開き、「こっちの道に行くといいよ。あつ、この先には交差点があるから、歩行者の飛び出しとか気をつけてね」と運転手にアドバイスしてくれる人が同伴してくれているようなものです。

「運命」は冷たい。「摂理」は温かい。なんとなく、そういう感じがしてきませんか。

○わたしたちが信じるべきは「摂理」です

そして今日、私が声を大にして皆さんに言いたいことは、次のことです。

わたしたちが信じるべきは「摂理」であって「運命」ではありませんということです。別の言い方をすれば、わたしたちが信じるべきは、いつもわたしたちと共にいてくださり、わたしたちを愛し、育て、守ってくださる「神さま」であって、わたしたちの人生をどこかで勝手に決めていような、不愉快で・得体の知れない存在ではないということです。そのような存在など、実はどこにも存在しないのです。

「あなたの運命は」とか「あなたの運勢は」と教えてくれる人たちがいますが、そのような言葉に振り回されないように気をつけましょう。ちなみに私はすべての占いをインチキだと思っています。一度も当たったことがないからです。

〈お祈り〉

天の神さま、わたしたちを惑わすさまざまな力から、わたしたちをお救いください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

摂理の御業について理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問13：神さまの摂理のお働きとは何ですか。

答：今、私たちに働く、神様の善いお力のことで

す。
神さまのお許しがなければ髪の毛一本も落ちることができないほどに、
神さまは私たちの父として私たちを守って
いてくださいます。

ですから、健康も病気も、嬉しいことも悲しいことも、
すべてのことが私たちの役に立つように働くのです。

〈展開例〉

1. ハイデルベルク信仰問答問27から、「摂理」について考える（できれば問1、26、28もあわせて読んでください）

問27：神の摂理について、あなたは何を理解していますか。

答：全能かつ現実の、神の力です。

神は、その御力によって、天と地のすべての被造物を、
今なお保ち、また支配しておられるので、

木の葉も草も、雨もひでりも、豊作の年も不作の年も、

食べ物も飲み物も、健康も病も、富も貧困も、

すべてが偶然によることなく、

父親らしい御手によって、わたしたちにもたらされるのです。

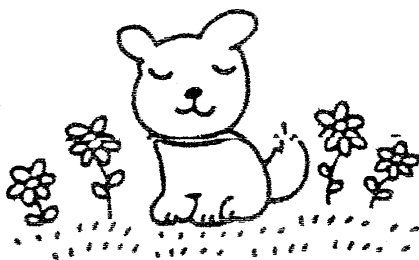
○この問答から感じたことを発表しあってみよう。

2. 「父として」の摂理の御業について考える

○問27の答の最後の文章、「父親らしい御手によって」という言葉に注目する。

○この世界に起こるすべてのこと（「木の葉も草も、雨も日照りも、……健康も病も、富も貧困も」）は、父なる神が、父親らしい御手（配慮）によって、「私」にもたらされている。

○たとえ、「私」にとって悲しいこと、傷つくこと、苦しいことがあっても、それは、「私」を苦しめるためではなく、また、単なる偶然によるのでもなく、私たちの真の父である神の、深い御心と愛情から与えられているのである。このことを確信するときに、問28に記されていることを心から告白することができる。



はじめに

説教作成や分級準備の第一歩は、先ず、与えられたテキストを何度も読むことから始まります。複数の翻訳を読み比べることができたらなお幸いです。神が語っておられること、自分への励ましや戒め、子どもたちにも分かち合いたいことが、ぼんやりでも見えて来られたでしょうか。そのときこそ、テキスト研究やカテキズム研究を開いてみてください。自分が、テキストで語られているメッセージを正しく（教会の伝統、つまり信仰告白に即して）解釈できたのか否かを問うことは、とても大切です。また、新しい気づきが与えられるかもしれません。いずれにしろ、自分自身が、子どもたちへのメッセージをきちんと聴き取ること、つかむ事が要です。それは、御言葉を深く黙想することによってもたらされるものです。この練習を深めてまいりましょう。

テキスト研究（神の語りかけと地の文）

24節以下、第六日目には、動物と人間の創造物語が記されています。動物は、「それぞれの生き物」（口語訳、新改訳では「それぞれ」を「種類にしたがって」と訳しています。）として創造されます。ところが、人間の創造は、まさに際立つものとなっています。神は、「我々にかたどり、我々に似せて」造ろうと決意されたからです。直訳的に言えば、「神の形態・イメージで、神の模造・コピーとして」造ろうとなるでしょう。つまり、神との関係性において、しかもあまりにも近く関係している存在として創造されていることが明らかにされます。ここに被造物における人間の唯一性（ユニークさ）、尊厳の根拠があります。「神の像」という神学の言葉で言い表される問題です。

ここでも繰り返されているのは、両者とも、他の被造物同様、神の御言葉によって創造されているという点です。しかもそこでこそ、際立つのは、言葉を発する神にかたどられた人間は、この言葉（命令）を理解する存在たりえるということ

です。また自ら言葉を持つ存在であることも示されています。つまり、理性的存在として、世界を認識する能力を与えられました。それだけに、被造物を「支配する」責任が人間だけに付与されました。支配の方法とは、神のなさり方、つまり、愛をもって管理するという仕方です。

地の文は、神にかたどられて創造された人間は、「男と女」であると記します。言うまでもありませんが、神に男性、女性の区分があるわけではありません。「我々に～」とは、さまざまな解釈の歴史がありますが、神の熟慮に基づく決意の表現との理解があります。いずれにしろ、父と子と聖霊の三一の神は、交わりの神であって命の根源、つまり相互に愛の絆で結ばれ、決して離れることのない一人の神です。そして、もともとの人間は、男と女として、つまり、相互に交わりを持ち、愛の絆で結ばれ、一体の存在（2:24参照）とされ、子どもを授かり、命を継承する存在として、祝福の内に創造されました。人間は、「極めて良かった。」と評価されるように、被造物の冠、傑作なのです。

黙想

私どもは、説教の言葉をつむぎだします。私どもは、神の像として、神の言葉（命令）を理解し、自ら言葉を語れる存在なのです。言葉とはもともと、神との交わりをなす手段です。また、男と女、つまり人間相互の交わり的手段にも応用されるのです。ところが今、言葉の本源的目標は、すっかり見失われてしまいました。神との交わり的手段、祈りの言葉を喪失しているのです。それが、人間の尊厳性の喪失と深く結びついています。ことばの真の回復とは、祈りの回復です。人間の尊厳、すばらしさは、神礼拝（祈り）によってこそ認識させられます。人間が人間となるために、神を神とする礼拝の回復、神との交わり（祈り）の回復を子どもたちと共に求めてまいりましょう。

（相馬伸郎）

子どもカテキズム

問15 神さまは人間をどのように創造されましたか。

答 神さまは、人間を神さまのかたちに似せて、男の人と女の人として造られました。

土のちりから造り、神さまのいのちを吹き入れてくださいました。

こうして、人間はただの動物ではなく、神さまとの交わりを持つものとされました。

ですから、人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです。

参考教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問10

ハイデルベルク信仰問答 問6

〈人間は霊を持つ〉

神様は天地万物を創造され（問12）、その最後に人間を創造された。この人間の創造において特に心に留めるべきことがある。一つは神様のかたちに似せられたという他の動物にない特徴である。もっとも、「神のかたちに似せる」とは人の顔や形が神に似ているという意味ではない。霊である神様から命の息（霊）を吹き入れられたことにより、人間も霊を持っている（創世1:27）ということである。それは併せて、人は神様との交わりを持つことができ、また神様との交わりに生きるべき人格的な存在であることをも意味する。だから人間は神様を礼拝して生きることが必要なのである。

〈互いに違う人間同士が愛し合って生きる〉

もう一つは人間が男と女に造られたということである。神様は最初に男を造られたが、「人が独りであるのはよくない」（創世2:18）、つまり不完全であると判断され、助け手として女を創造された。聖書で「助け手」という言葉は「主はわたしの助け手」（ヘブライ13:6）という形で使われるように、自分単独ではどうにも埋められないところを補う必要不可欠な存在という意味を持つ。よって男と女が共同で担い互いに助け合う関係に立って生きることこそが、神様が人間に求められる生き方ということになる。そしてひいては友達をはじめ周りの様々な人々を愛し、共に手をとって進むことが望まれている。

〈人は土のちりから造られた〉

人間が土のちりから造られた（創世2:7）ことは、人間が「神のかたちに似せられた」という他の被造物にない特徴を持つからといって他の被造物を過度に見下しおごり高ぶろうとすることを戒め、人間もまた、他の被造物と同様に土からなり、土から生ずる産物に依存して生きる点で共通することを教える。この点は環境破壊の進行によって様々な危機に直面している現代において改めて心しなければならない。環境破壊は、人間が自らを「万物の霊長」と称して他の被造物よりも過度に高く位置づけ、自然環境を己の欲望のままに使ってよいと勘違いし踏みにじってきたことに原因がある。使徒パウロは人間の墮落以来、「被造物は虚無に服している」（ローマ8:20）「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている」（ローマ8:22）という表現によって、人間のおごり高ぶりの罪が環境を破壊し被造物を苦しめていることを言い表している。そして人間が環境を破壊することが自らの生活基盤をも崩し、自分で自分の危機をもたらす結果を招いてしまっている。

私たちは神様が人間に望まれた使命、つまり神様の僕として神様のみ心に基づいて地を治めるといふ本分へと立ち返る時、神のかたちに似せられたことをおごりの材料とせず、同じ土のちりから造られた他の被造物と連帯し平和的に関わるようにされ、環境破壊をもたらしたこれまでの生き方から解放されていく。 (吉田 崇)

テキスト 創世記 1章26～31節
カテキズム 子どもカテキズム 問15

〔単元のねらい〕

人間は、神に似せて、神のかたちに造られた。それゆえに尊いのである。この教えが、わたしたちをあらゆる束縛から自由にする。ここには福音がある。今日は、役に立つことが過度に求められ、効率が優先される時代となっている。「使えない」と言われて切り捨てられてしまうのである。しかし、そこに真の幸いはあり得ない。神を礼拝する幸いに生きる。そこに、人間存在の本質がある。その喜びを味わい、あるがままに神の御前に立ち、交わりに生きる者でありたい。

「人間ってステキだな！」

わたしたちは人間です。みんな人間です。何だ、そんな当たり前のこと。いったい何を言い出すんだと思うかもしれません。でも、わたしたちが人間であるということ、これは、とても不思議なことだと思えます。だって、わたしたちのだれひとりとして、自分が人間であると、そう思って自分で人間である人は、だれひとりとしていないのです。わたしたちは、ただ神さまが人間としてつくってくださり、神さまが人間であらしめてくださるから、みんな、人間であるのです。

何のこっちゃら？と思われるかもしれません。でも、人間であるって不思議なことなんだなど、そうあいつが言っていたと心に残ったら、それだけでもよいかもしいないと思えます。

人間って、とても不思議です。ほかの生き物、動物と、どんなところが違うと思えますか。いろいろと挙げることができますね。人間は、言葉を話すことができます。もちろん、動物も声を出して自分の気持ちを伝えています。最近では、植物も、いろいろな方法で自分の気持ちを周りに伝えているっていう研究があるようです。けれども、ただ食べ物ほしい、眠たい、危険だ！ というようなことだけではなくて、人間は、自分の気持ちや考え、希望すること計画すること、反省することなど、過去を振り返り将来に向かう、さまざまなことを言葉にして考え、伝えることができ

ます。だから、社会を築き上げることができます。あるいは、人間は道具を使うことができます。これも道具を使う動物はいろいろとあるのですが、とくに火を使います。ふつう、生き物は火を恐れます。火はすべてを焼き尽くしてしまうからです。けれども、人間は、その火をさまざまな仕方を利用して使っています。恐れを乗り越えて、火を役立たせます。そのもっともすごいのは、原子力でしょう。とてつもなく大きな力のある火を何とか利用しようと、人間は力を尽くすのです。

今日、大切に考えたいことは、とくに人間の特別なところがある、それは、神さまを礼拝すること、お祈りすることです。この神さまを礼拝し、お祈りする、そのことを学びたいと思うのです。

犬を飼っているお友だちはいますか。猫を飼っているお友だちはいますか。とてもかわいいですよ。犬も猫も、大切な家族の一員です。けれども、お祈りする犬っていますか。お祈りする猫っていますか。残念ですが、犬や猫は、お祈りすることはできません。神さまを礼拝すること、お祈りすることは、わたしたち人間だけに与えられた特別な恵み、幸いなのです。

神さまは、天地創造のみわざ、六日間のみわざの、その最後の日、第六の日に、人間をつくられました。それは、ほかの動物がすべてつくられて、その締めくくりとして、いちばん最後に、人間をおつくりくださったのです。そこにも、人間が特

別であることがあらわれています。そのため、人間のことを、「創造の冠」とか、「被造物の冠」と呼びます。「冠」って、王様がかぶる冠です。王様のすばらしさを、その頭に載せる冠があらわしています。そのように、すべての被造物の上に人間がいるのであって、人間がすべての被造物のすばらしさをあらわしている。そのような、創造の冠、被造物の冠なのだと言います。

けれども、それは、冠だ、すべての被造物の上にいるのだと言って、わたしたちが威張ってしまう、ほかのつくられたものを好き勝手にしてしまうということではありません。

聖書はこう言っています。26節、「神は言われた。『我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう』」。27節、「神は、ご自分にかたどって人を創造された」。「かたどる」というのは、かたちをまねるということです。お砂場道具に、乗り物や動物のかたちをしている入れ物がありますね。それに砂を詰めて、地面に伏せて、そして入れ物を取ると、砂が乗り物や動物のかたちになっていますね。かたどるっていうのは、そんなふうにして、かたちをまねることです。

聖書は、人間は、神さまのかたちをまねてつくられている。神さま御自身が、神さまに似せて、人間をつくられたのだと言います。かたちと言っても、それでは、神さまに人間のような手があり、足があるのか、そういうことではありません。

神さまが、この世界を愛し、人を愛して、世界と人をつくられた。そのように、わたしたちも神さまと世界を愛して生きていきます。神さまが、父と子と聖霊の愛の交わりに生きておられる。そのように、わたしたちも、神さまを愛し、人を愛して、交わりのうちに生きていきます。神さまが、この世界を愛して、ていねいに順序立てておつくりになった。そのように、わたしたちも、この世界を愛して、この世界に誠実に仕えて労働し、文化と社会を築き上げていく。

そのように、わたしたちは神さまと向かい合って生きる。神さまとの交わりに生きる。それが、かたどられ、似せられているということです。人間が特別な存在である理由なのです。人は、神さまを礼拝し、神さまに仕えて生きる存在です。この世界を、神さまの御心に従って、神さまと共に治める務めも与えられているのです。

人間は、ですから、神さまとの交わりに支えられて生きるのではないならば、本当には、生きることができません。神さまを礼拝することなく、本当に人として、人間として生きることなどできないのです。ところが、神さまを見失って、神さまを礼拝せずに生きてしまう、神さまなどおられないかのように生きてしまう。そのために、今、わたしたちは、さまざまな痛み、痛みを味わうことになっています。交わりが苦しみとなり、お互いの関係が引き裂かれて、たくさんの重荷を背負い込むことが起きているのです。

神さまは、人間とは何であるか、それを教えるために、主イエスさまを与えてくださいました。まことの人間として生きられたお方です。この主イエスさまをとおして、わたしたちは、人間であることを取り戻していくのです。主イエスさまを信じて神さまを礼拝するとは、人間であるということそのものなのです。

そして、わたしたちは、神さまに似せられているゆえに、尊い存在です。それは、病気であっても障がいがあっても、幼い子も高齢の方も、神のかたちであるゆえに、その存在そのものが尊いのです。そこに、人間の尊厳があります。

主イエスさまを信じて生きるとは、神さまとの交わりを回復して、人間であることを取り戻して生きることです。そのときに、わたしたちは、お互いの存在を本当の意味で尊び、尊敬しあうことができます。謙そんに生きることできます。主イエスさまを信じて、真実の人間とされて生きる、そのことを喜びましょう。(望月 信)

[今週の暗唱聖句] 創世記 1章27節前半

神はご自分にかたどって人を創造された。

〈ねらい〉

神と人とを愛して神の栄光を表すことを目的に、神の似姿として人間は創造された。「自分と同じように他者を愛する」ことに絞って考えてみた。

〈展開例〉

神さまは「光あれ」というお言葉で世界をおつくりになりました。空と海、太陽や月、山や川、花や木、象や蟻、鳥や魚、そういう全部のものを造られました。すごいですね。

さて、そうして最後に人間を造られました。だから人間は生まれたときから美しい空やお花があって、食べるものもあって、可愛い動物もそばにいてとっても幸せで楽しかったのです。神さまがどんなに人間を他のものより大切に考えていてくださったかが分かります。それだけではありません。人間を造るとき、神さまはご自分の息を吹きかけて神さまに似ている者として特別に造ってくださったのです。神さまに似ているということは、神さまとわたしたちの心が通じ合っているということでもあるのです。知らない人とお話する

よりも、お母さんやお友だちと色々お話をするときには楽しいでしょう？ それと似ています。神さまと何でも心からお話しできるように造ってくださったのです。だから、こうして礼拝ができるのです。動物は礼拝なんかしません。嬉しいですね。わたしたちをそんなふうに造ってくださったということは、ぼくやわたし、そしてお友だちも神さまからごらんになれば、大切な大切な人なのです。自分が嫌いなお友だちでも、よその国の知らないお友だちでも全部神さまの大切な人なのです。神さまが大切にしておられる命は誰にとっても大切な命です。いらぬ命は一つもありません。自分を大切にするように、どんなお友だちも大切にしましょう。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、ぼくたちわたしたちを大切に造ってくださってほんとうにありがとうございます。だから、よその国のお友だちのためにも一生懸命お祈りできますように。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**「輪投げ」をしてあそぼう！****○準備するもの**

新聞紙を細くまるめて輪にしたのをたくさん作っておく。

カラービニールテープで巻いておくと楽しいが、なくても良い。

○遊び方

子どもが投げる輪を、教師の腕で受ける。

ひとり二回ずつとか、(テープが巻いてある場合) 色別対抗で競うなど、色々なバリエーションを考えておく。

○しっかり作っておけば、備品になって、さまざまな場面で応用して使うことができます。

〈ねらい〉

神さまは、人間にだけ命の息を吹き入れてくださった。

〈展開例〉

粘土で、何かを作ったことのある子はいいますか？ 何を作りましたか？（自由に発言）

ここで、一緒に聖書を読んでみましょう。創世記2章7節。

《主なる神は土（アダマ）の塵で人（アダム）を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた。こうして人は生きる者となった。》

どんなことが書いてありましたか？

神さまは、土で人を作ったんですね。神さまは人を作ったあと、何をしたでしょうか？ 鼻に、命の息を吹き入れたのです。この命の息って誰の息ですか？ そうです、神さまの息ですね。神さまの息が入ったら、人はどうなりましたか？ 生きる者となったのです。

では、思い出してみましょう。

神さまは、他の生きるもの……空の鳥や海の生き物や地上の動物……を創ったとき、どうされましたか？ 言葉で創造されただけで、命の息は吹き込まれなかったですね。これは、どういうことだと思いますか？（自由に発言）

神さまは、人間を特別な者として造ってくださったのです。

聖書を読みましょう。創世記1章28節。

《神は彼らを祝福して言われた。》

神さまは、人間を祝福してくださったのです。他の創造物には祝福という言葉はありません。ですから、人間は神さまにとって、特別な存在なのです。神さまは人間を大切に大切に創造してくださったのです。だから、私たちは、自分のことも、お友だちのことも、家族のことも、教会の人たちのこともみんな大切にしなければなりません。神さまが大切に作ってくださった命を、大切にしましょう

〈祈り〉

神さま、私たち人間を特別に創ってくださりありがとうございます。自分のことだけでなく、お友だちのことも、そして家族のことも大切にしていけるように、守ってください。



〈ねらい〉

神さまは人間を「神のかたち」に造られたことを学ぶ。

〈展開例〉**○人間は「神のかたち」に造られました**

聖書にはびっくりすることが書かれています。神さまは人間を「神のかたち」に創造された、ということです。その意味は、わたしたち人間は神さまに「似ている」ということです。

しかし、残念なことは、聖書のどこを探しても、人間が「神のかたち」に創造されたということについての詳しい説明は見つからない、ということです。そのため、わたしたち人間は、それがどういう意味であるかを自分たち自身でよく考えなければなりません。

ただし、聖書に基づいてははっきり分かることもあります。それは、聖書のどこを探しても、人間以外の存在、たとえば動物や植物、宇宙や自然が「神のかたち」に造られたと書いているところは見つからないということです。つまり、聖書によると、「神のかたち」に創造されたのは人間だけであるということです。その意味で、神さまは、人間を他のすべてのものとは異なる特別な存在として創造してくださったのです。

○人間のどこが特別でしょうか

それでは、人間と他のすべてのものとはどこが違うのでしょうか。人間のどこが特別なのでしょうか。この点について今日は、三つのことをお話したいと思います。

第一は、わたしたち人間には神さまを信じること、礼拝すること、そして神さまに祈ることができるという点で、他のものとは異なる特別な役割を神さまから与えられているということです。つまり、神さまは人間を、いわば御自分の“話し相手”として、特別にお選びになったのだということです。

残念ながら私には人間以外の動物たちの言葉を

理解する力はないので、動物たちが神さまを信じてたり神さまにお祈りしたりできるかどうかを確かめることはできません。しかし私はそのようなことを深刻に考える必要はないと思っています。不真面目な考え方だと責めるつもりはありませんが、分からないことをいくら考えても何の答えも見つかりません。神さまの存在を知っているのは人間だけです。この点こそが、人間が特別な存在として創造された理由です。わたしたちは、そのように信じてよいのです。

第二は、わたしたち人間には、他のすべてのものを「治める」役割を神さまから与えられているということです。この場合の「治める」の意味は、お世話をすること、大切に守ること、管理することです。動物や植物、宇宙や自然を人間が勝手気ままに壊してよいとか殺してよいということではありません。神さまがこの世界と人間を心から愛してくださっているように、わたしたち人間もそれらのものを愛さなければならないのです。

第三は、第一の点と第二の点を合わせたことです。人間には、「神を愛すること」と「世界のすべてのものを愛すること」との両方を行うことができる“喜び”が与えられているということです。神さまは、天地万物を創造された後、それらすべてをご覧になって「ベリーグッド！」（素晴らしい！）と心からお喜びになりました。神さまは世界と人間が命ある存在となったことを喜んでくださいました。「神のかたち」とは、もしかしたら「喜びのかたち」かもしれません。わたしたちが罪から救われ、神さまと世界の人々と共に生きる人生を喜び楽しんでいるとき、そのわたしたちの姿は、神さまに最も似ているのかもしれません。

〈お祈り〉

神さま、わたしたちをあなたに「似たもの」にお造りくださったことを感謝します。わたしたちの心を、喜びで満たしてください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

「神のかたち」について理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問15：神さまは人間をどのように創造されましたか。

答：神さまは、人間を神さまのかたちに似せて、男の人と女の人として造られました。土のちりから造り、神さまのいのちを吹き入れてくださいました。こうして、人間はただの動物ではなく、神さまとの交わりを持つものとされました。ですから、人間にとって生きるとは、神さまを礼拝すること、お友だちを愛することです。

〈展開例〉

1. 創世記1章から、人間の創造について確認する

- 創世記の創造記事（1～2章）の中心点は、人間の創造にある。1章においては、「全被

造物の頂点・創造の御業の冠」として人間の創造について記され、2章においては、世界の中心（エデンの園）に人間が置かれている。

2. 「神のかたち」について考える

- 「神のかたち」とは何だろうか？説教を聞いて分かったことを発表しあってみよう。
- 墮落前の人間は、「神のかたち」を完全な状態で持っていたが、罪を犯したことにより、「神のかたち」は破壊されてしまった（なくなっただけではない）。
- 聖書は、特に、「神のかたち」を「知識・義・聖さ」と教えており（エフェソ4:24、コロサイ3:10）、「神のかたち」のものであるイエス・キリストの救いにあずかり、イエス・キリストに似る者となる時（ローマ8:29、ヨハネー3:2～3）、再び私たちのうちから輝き出ようになる（コリント二3:18）。
- 真の「神のかたち」は、イエス・キリストの中に見ることができる。



1. 祝福された人間

神様は、人間をエデンの園に置き、その祝福の中で生きようとして下さいました。その際、神様は人間に必要なものを備えて下さいましたが、一つの命令を語っておられました。それは、「善悪の知識の木から、決して食べてはならない」です。この命令は、人間が神様に従って生きる祝福のために用意された命令でした。人間は神様の形に造られ、霊的で深い交わりを神様と持つことが出来る存在とされました。そして、神様の命令に真実に応えて生きていました。

2. 誘惑によって罪を犯す

しかし残念なことに、神様の命令を無視する出来事がサタンの遣いである蛇によってもたらされ、人は罪を犯してしまうのです。蛇は女に対して「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか」と言いました。蛇は、女が神様の言葉を軽く取り扱ってしまうような、言葉巧みな語りかけをします。蛇の狙いは、人間が神様の言葉を軽く取り扱い、神様に対する疑いを持ち、いつしか神様から離れていくようになることです。蛇は、「善悪の木の実を食べてはならない」と答える女に対し、「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ」と言葉を続けます。神様は、創世記1:17節で「ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と語っておられました。しかし、女に近づいて行った蛇は、「決して死ぬことはない」と迫ってくる。つまり、蛇は神様の言葉があたかも不確実な言葉であるかのように思わせるのです。女も最初から蛇の誘惑に乗ったわけではありません。きちんと神様の言葉を思い出し、蛇に対して説明していきます。しかし蛇は、

神様の言葉が真実ではなく、偽りの言葉、力のない言葉であるかのように思わせてくるのです。この巧妙な語りかけによって、女は神様の言葉を軽く取り扱い、いつしか神様の言葉を正確に理解せず、神様の言葉そのものを忘れ、神様の思いを考えずに生きようになってしまいました。人間は、神様の言葉を蔑ろにし、神様の言葉に真実に聞くことから離れていくときに、罪と墮落の中へと足を踏み入れてしまうのです。

3. 罪の結果

善悪の知識の木の実を食べた女は、その実をアダムのにも渡しました。彼らは神様の命令を無視してしまい、罪へと墮落しました。その結果、二人の目は開け、自分たちが裸であることを知るようになりました。目が開かれたとは新しい世界の幕開けのようで素晴らしい響きにも聞こえます。蛇が言っていたことが現実になり、彼らの目は開かれたのです。神様の言葉よりも蛇の言葉が真実であるかのように思ったことでしょうか。しかし事実は違いました。彼らの目は開かれましたが、その開かれた目で見たものは、裸である自分たちの姿でした。彼らは、自分たちの裸に気づいた途端、いちじくの葉をつづり合わせて腰を覆ったのです。いちじくの葉で体を覆ったのは、他の植物の葉に比べて大きかったからでしょう。彼らは、そのいちじくの葉で裸である自分の体を覆いたかった。それほど必死になって覆いたかったものは、新しい目で見た自分の裸の姿でした。彼らは、神様のように善悪を知る者として目が開かれたのではなく、罪に墮ち、自分のやりたいように生きる恥に満ちた自分、神様の前に進み出ることの出来ない自分の姿に目が開かれ、その恥ずかしさに我慢できずに自分を隠したのです。（千ヶ崎基）

子どもカテキズム

問16 最初の間人は、極めて良いものとして続きましたか。

答 いいえ。アダムとエバは、神さまの御言葉を破って、罪を犯しました。

ウェストミンスター小教理問答

問13 私たちの最初の先祖たちは、創造された状態で続きましたか。

答 自分の意志の自由に任されていた私たちの最初の先祖たちは、神に罪を犯すことによって、創造された状態から墮落しました。

〈創造と墮落の関係〉

子どもカテキズムは、問15で人間の創造を扱った後、この問16で人間の墮落を扱う。そこでまず大切なのは、神様による人間の創造と、人間の墮落がどのような関係にあるかである。問16は、「最初の間人は、極めて良いものとして続きましたか」と問う。これは、最初の間人が神様によって極めて良いものとして創造された（創世記1:27, 31）ことを前提としている。神様に創造された時に人間に罪はなかった。罪のない状態こそ、本来の人間の姿であり、神様との正しい関係にあるのである。この人間の本来の姿、神様との正しい関係を破壊したのが墮落の出来事であった。

〈命の契約〉

最初の間人であったアダムとエバは、神様の御言葉を守り、御言葉に従う存在であった。それは、神様が人との間に結ばれた「命の契約」に基づいている。この契約関係は、より具体的な神様の命令を伴っていた。それが、「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死ぬてしまう」（創世記2:16～17）という御言葉であ

る。この「命の契約」は、神様の特別な摂理の行為（ウ小教理問答問12）であった。そこで与えられる約束は永遠の命であった。ただし、その違反への罰則は死であった。アダムとエバが神様の御言葉を破って、罪を犯したということは、この「命の契約」に違反し、神様との契約関係を破棄したということである。

〈墮落の責任〉

「命の契約」は、神様が人に与えられた恩恵としての契約であった。しかも、人は主体的にかつ自律的に神様とその御言葉とに従うことを求められていた。人間には「自分の意志の自由」（ウ小教理問13）があった。それは、彼らが神様への不服従の道を選んだことが、外から加えられた力によるものでないことを意味している。サタンでさえ、彼らに罪を犯すことを強制させることはできなかった。サタンができたことは、彼らを誘惑することだけであった。「アダムとエバは、神様の御言葉を破って、罪を犯した」という答えは、まさに墮落の責任が人間にあることを明らかにしているのである。（松田基教）

テキスト 創世記 3章1～7節
カテキズム 子どもカテキズム 問16

〔単元のねらい〕

主題は「人間の罪」である。それは神の御言葉を破ったことに集約される。それは道徳的にはなく、神への信頼の問題として語られるべき。神の御言葉への疑いは、神の愛への疑いに通じる。決して疑う必要のない神への信頼を伝えたい。

「疑うな、離れるな」

もう7年も前のことになりましたが、2001年9月11日、アメリカで起こった同時多発テロのことを私ははっきり覚えています。とても恐ろしくて絶望的でした。その後戦争が始まりました。「何でこんなことが起こるのだろう、神様は何をしているの？」と、尊敬する牧師先生に聞きました。すると「大事なことを忘れてるよ」と言われました。「神様は何をしているの？ と考える前に、人間を悪の道へと導くサタンの強い力を考えなければいけないよ」と。そしてこうも言われました「でもサタンのせいだけにしてはいけないよ。人間がどうしてもなく罪深くて愚かなんだ。サタンの誘いに簡単に引っかかってしまって、神様の思いから離れて行ってしまう。私たちはそれほど愚かなんだ。それを忘れてはいけないよ。」

今日の聖書のお話にも、サタンの悪い誘いがあります。ここではサタンは蛇の姿で登場します。蛇が登場するまで、人は何不自由なく、何の疑いもなく、エデンの園で神様の愛に包まれて暮らしていました。サタンは、そういう神様とともに生きる幸せな人を引っ掛けて、つまずかせて転げさせるのが大好きなんです。みんなも注意して欲しいと思います。

蛇は女に言いました「このエデンの園のどの木からもお前たちが食べてはならないと、神様が言ったって？」みなさん気付きませんか？これは間違っていますね。神様は「善悪の知識の木以外なら、どの木からも食べていい」とおっしゃったの

に、蛇はわざと間違ったことを言いました。そうやって女を挑発しているのです。これは人を神様から離れさせるための、サタンのずるがしこい手口です。神様の御言葉の大切などころを変えてしまって、私たちにささやきかけます。私もそうやってサタンに話しかけられたことが何度もあります。「神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された（ヨハネ3:16）」と神様は言ってくださいました。それがとてもうれしくて、どんな苦しいことがあっても、私は神様に愛されていると思うと元気が出てくるのです。でもサタンは、御言葉を少しだけ変えてささやいてきます。「聞いたよ、神様は独り子をお与えになるほどに世の中のみんなのことを愛しているのに、君を愛してはくれないんだって？」試練が与えられて本当に苦しい時に、そんな風にささやいてきます。「そんな神様ってダメだよ」と誘ってきます。注意が必要です。

女は蛇の挑発にのってしまいます。まずは「ちがいますよ、どの木からも食べていいのです」と言いました。「神様は善い方です」と言いたかったのでしょうか。でもしゃべっている内に女は考えてしまいました。「……どうして園の中央の木からだけは食べてはいけないのだろうか？」神様の御言葉に疑問を感じ始めてしまったのです。そして、自分勝手なことを言い出します。神様は「食べれば必ず死ぬ」と言われたのに「死んではいけないから食べていけない」と変えてしまいました。しかも「触れてもいけない」と余計な付け足しまで

しました。それは女の心が動揺していた証拠です。

それを聞いてサタンが放っておくわけがありません。そして大胆にも、神様と正反対のことを言うのです。「大丈夫だよ、死なないよ。」その上、神様を疑わせることまで言います「神様は、君たちの目が開かれて、世の中の何もかも知り尽くした賢者になることをねたんでいる。だから嘘をついて、禁止命令を出したんだ。」この一言で、女の心の中に神様に対する「疑い」が生まれました。それは「神様の言葉への疑い」です。そして「神様の愛への疑い」です。

「善悪の知識の木を食べてはいけない」。これは神様が女に与えてくださった大切な命令です。私たちにもイエス様を信じて罪の赦しを受けなさい、永遠の命を受け取りなさいという、神様からの命令が与えられています。それと同じような愛に満ちたご命令です。人がまことの幸いを得るための道です。でも女は疑いました。「蛇の言うとおり、神様は嘘をついているのではないか？この神様の命令にしたがってはいは、本当の幸せを手に入れることはできないのではないか？命令を破ってこの木の実を食べれば、もっとすばらしい未来があるのではないか？」

それは神様の愛に対する疑いでもあります。思い出してください。蛇が登場するまで、人はひとつの不満も持つ必要のない、本当に幸いな日々を送っていました。神様は彼らに対して最もすばらしいものをいつも用意してくださっていました。大きな愛で見守り、支え続けていてくださいました。でも女は蛇に誘われて、そんな神様を疑いはじめました。「本当に神様は愛してくださって

るのだろうか、頼りにしていいのだろうか……神様の愛よりも、自分の力を頼りにして生きていくほうがいいのではないか。」そんな疑いを持ってしまった女は、今まで気にもしていなかった善悪の知識の木の实を見つめました。するとそれは、とても魅力的に見えました。神様の御心から離れることは、いつも私たちにとって、とても魅力的に思えるのです。そして女はそれを取って食べ、男も渡されて食べました。こうして人は、神様から離れて生きる「罪人」となりました。

その結果はどうなったでしょう。泥沼にはまっていくなような、悲しくみじめな「罪人」の歩みがここから始まるのです。このあとの長い長い聖書に書かれているのは、そういう「罪人」の記録です。とても惨めになってしまった私たちです。最初に思い出したような、絶望的な出来事ばかり。それでも神様に思いを向けることをせず、神様の与えてくださる愛を「そんなものいらない」と棄ててしまう、人間はそういう悲しいものに成り下がってしまいました。

しかし神様はそんな私たちを見捨てません。敵となった私たちを、なおも愛してくださいます。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。(ヨハネー4:10)」この神様の愛を疑わずにいたいのです。そしてイエス様を信じて救われなさいという、神様の言葉にすなおに聞きたいと思います。(坂井孝宏)

[今週の暗唱聖句] ヨハネの手紙 一 4章10節

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、
わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。

〈ねらい〉

自らの罪の問題は今月後半で扱うので、今日は礼拝説教を復習することによって、最初の罪の本質（神への不信、不従順、人間の自己中心）を学ぶ。

〈展開例〉

神さまが最初に造られた人間の名前をおぼえていますか？ そう、アダムさんでしたね。アダムさんは男の人でした。それから女の人もお造りになりました。エバさんという名前でしたね。二人は仲良しで、神さまといつも一緒に楽しい毎日でした。どうのご馳走を食べていたのでしょうかね。二人が住んでいたエデンの園という場所には美味しい食べ物がいっぱいあって何でも好きなものを好きなだけ食べてよかったのです。でもある日、神さまはアダムさんと一つの約束をなさいました。さてそれは何だったのでしょうか？ その約束はちゃんと守れましたか？ どんな風に約束を破ってしまったのでしょうか？（子どもの反応を見ながら、要点をわかりやすく復習します）

みんなはリカちゃんやウルトラマンやポケモン

の人形などで遊ぶとき、自分で好きなようにしゃべり、動かすと思います。人形は自分で話せないし、動けないから当たり前よね。でも、アダムさんとエバさんは人形ではありません。自分の本当の気持ちで、心から喜んで神さまのおっしゃるようになる、そういうことを神さまは願っていらっしゃいました。アダムさんが神さまとした約束も、そういうふうに喜んで守ってほしかったのです。でもアダムさんは、神さまとの約束より、自分の気持ちを大切にしまいました。悪魔の言うことを聞いてしまったのです。神さまはどんなに悲しかったことでしょうか。どんなにがっかりなされたことでしょうか。これを最初の「つみ」と言います。分厚い聖書のほとんど最初のところに出ているお話です。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、今日は最初の罪のお話を聞きました。とても悲しい気持ちです。どうか今週も一緒に居て守ってください。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**みんなで作ろう「果物の木」****○準備するもの**

大きめのしっかりした紙

（四ツ切りの画用紙が使い終わったカレンダーの裏など）1枚

色々な色の色画用紙か折紙

のりとはさみなど

○作り方

教師が最初に大きな紙にしっかりした木の幹を描いておく。

その枝に、好きな果物になぞらえて丸く切った色画用紙や折紙をたくさん貼って、一本の果樹を完成させる。

〈ねらい〉

神さまは、人間を良いものとして創ってくださった。

人間は、自分の責任で罪を犯してしまった。

〈展開例〉

(子どもたちに紙と鉛筆を配る)

今から質問をします。

今日、朝起きてから、この分級の時までのことを思い出してください。では、「感謝だなあ、幸せだなあ」と思ったことを書きましょう。

次は、「もっと、こうだったらいいのになあ」と思うこと(不平とか不満)を書きましょう。

どっちが多かったですか？

みんなのクラスにも意地悪をする子や先生のいうことを守らない子がいると思います。おとなの世界でも、悪いことをする人がいるし、人を殺したりする人がいます。世界の中では、今も戦争をしている国があります。神さまは、この世界を良いものとして創ってくれたのなら、なぜ、こんな悪いことがこの世界にあるのかって思うことありませんか？(自由に発言)

では、ここで一緒に聖書を読みましょう。創世記2章15～17節。

《主なる神は人を連れてきて、エデンの園に住まわせ、人がそこを耕し、守るようにされた。主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」》

創世記3章4節も読みましょう。これは、神さまに背くように言った蛇の言葉です。

《決して死ぬことはない。それを食べると目が開け、神のように善悪を知るものになることを神はご存じなのだ。》

エデンの園でアダムが何を感謝をしなくてはいけないでしょう？

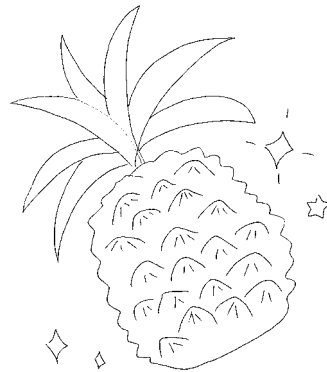
蛇の誘惑の言葉で、「神のように～なる」とありますね。これが、罪の本質なのです。

人間は神さまに感謝をしなくてはいけないのに、神さまが恵みを出し惜しみしているかのように根拠もなく疑って、自分だって、神のようになるんだって、思ってしまうことが罪なのです。神さまを疑ったら不平が出るし、感謝をしなくてはいけないのに、文句ばかりを言うようになってしまいます。自分が神さまであるかのように、自分！自分！自分が今日は機嫌が悪いからお友だちに当り散らすとか、親に当たるとかしてしまいますね。これが罪なのです。でも、罪を犯してしまったアダムを神さまは、「どこにいるのか」と捜してくださいました。今も神さまは「〇〇(ここに子どもの名前)はどこにいるのか」と捜してくださるのです。

だから私たちは「はい、ここにいます」と言って神さまの前にいきましょ。

〈祈り〉

神さま、悪いことを考えたり、悪いことをしてしまう私たちを赦してください。そして、いつも神さまに感謝をささげることができるようにしてください。



〈ねらい〉

神さまが人間を良いものとして造ってくださったことを復習し、人が墮落してしまっただけを確認する。また、最初の罪から、自分たちの行いを確認させる。

〈展開例〉

先週、神さまが最初に造られたことを学びましたが、誰だったか覚えていますか？ そう、アダムさんでしたね。それから神さまはアダムさんに助ける人として女の人エバさんをお与えになりました。二人は、神さまがお与えくださった園にあるすべての木から実を採って食べることが出来ました。二人は好きなものを好きなだけ食べることが出来ました。どの様なご馳走を食べていたのでしょうか？ 二人にとって、何一つ不満なことはなかったのです。

しかしこの時、神さまは二人と一つだけ約束をしていたのです。「善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう」と。みんなはどうですか？ 他の多くの木から好きなだけ食べることが出来たのです。一つの木からだけ実を採ってはならないことなど、気にはなりませんよね。

この時、蛇は女に対して何と言いましたでしょうか？ 「園のどの木から食べてはいけない、などと神は言われたのか」。女の方は答えましたね。「園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神さまはおっしゃいました。」神さまの約束こととどこが違うのでしょうか？ 神さまは「触れてもいけない、死んではいけないから」などと

はお語りになりませんでしたよね。神さまは本当に二人を愛し、優しい眼差しで約束して下さっていたのですが、女の方はこの約束により、神さまが怖いお方だと思っていたのです。

この時とばかりに、さらに蛇は女に言います。「決して死ぬことはない。それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」女は、最初何も気にしていなかった木の実がすぐく気にかかるようになりました。そして、女の方は善悪を知る木の実から食べ、男にも渡して食べます。

二人が神さまの約束を破り、木の実を食べるようになったように、サタンは、みんなが悪いことをしないかな？ と、狙っています。みんなは、お父さん、お母さんが、みんなのことを愛していることを知っていることでしょうか。でもね、お母さんに「宿題やりなさい」と言われた時、「テレビが終わってからする」と言いながら、することを忘れて、寝てしまい、朝になって慌ててすることはありませんか？ お母さんがみんなのことを思って言っているのに、「嫌なことを言って」と思ってしまうのです。こうしたところに、サタンの「勉強なんてしなくても良いよ。宿題しなくても、先生に怒られない」というささやきがあり、誘惑があるのですね。

〈お祈り〉

神さま、私たちのことを愛してくださっている神さまの言葉を守り、私たちのことを愛してくださっているお父さん・お母さんとの約束を守ることができるようになってください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

サタンの誘惑について考える。

○自分が罪を犯すとき、どんな誘惑があったか思い出し、話し合ってみよう。

〈子どもカテキズム〉

問16：最初の間は、極めて良いものとして続きましたか。

答：いいえ。

アダムとエバは、神さまの御言葉を破って、罪を犯しました。

2. エバを罪へと誘ったサタンの誘惑について考える

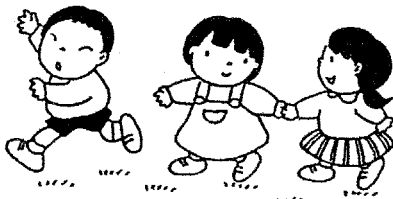
○サタンは、神さまの御言葉（命令）を用いてエバを誘惑した。これは、イエス様を誘惑したときと同じやりかたである。

○サタンの最も恐ろしいことは、このように聖書の御言葉を用いて私たちを誘惑してくることである。本当は聖書が教えてないようなことを、いかにも聖書の教えらしく自分に言い聞かせることがないように、正しく聖書を理解する必要がある。

〈展開例〉

1. 罪について話し合う

○説教を思い出しながら、教えられたことや感じたことを発表しあってみよう。



1. 罪の広がり (8～13節)

ある日、神様が近づく音が聞こえてきた時、アダムと女は隠れます。神様が近づき、呼びかけて下さっているにも関わらず、彼らは神様の顔を避けるようにして逃げていき、神様との交わりを拒絶するのです。罪は、神様と霊的で深い交わり持つ素晴らしさを排除するのです。更に、神様の命令を破り、善悪の知識の実から取って食べたことを問われた時、アダムは「あなたがわたしと共にいるようにしてくださいました女が、木から取って与えたので、食べました」と答えます。次に女の方は「蛇がだましたので、食べてしまいました」と答えます。彼らは自分自身を弁護することに終始して、罪の責任転嫁をする始末です。しかも罪の責任を神様になすりつけるほどです。罪は、神様に対する暴言となって怒りをその身に招くのです。

2. 神様の刑罰と憐れみ① (14～19節)

神様は刑罰を宣言されます。女に対しては、苦しんで子を産むこと、夫である男から支配を受けることを示します。しかし、苦しんでも子を産めることは神の憐れみと賜物であり、夫の支配の中で仕えていくことによって神様の御心に応えていく道が備えられています。アダムは、土地が呪われ、茨とあざみのとげが邪魔をするので、限られた中で苦しみながら糧を得ることになります。しかし、その苦しみの中でも人は神様によって糧を得ることが出来ます。罪のため生きた先には塵に返る滅びが待っています。しかし人は、キリストによって死と滅びから解放されます。そう言えるのは、神様が希望の言葉を語って下さったからです。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間にわたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕きお前は彼のかかとを砕く」です。この言葉は、神様が不信仰者と信仰者との間に敵意を置いて下さる約束で

す。悔い改めて神様を信じる者は、サタンの誘惑を嫌い、罪を憎むようになります。蛇の子孫としての不信仰者は信仰者のかかとだけに傷を与えるのみで、女の子孫として信仰者は頭を砕く決定的な勝利を得ることが出来ます。それは、イエス・キリストの十字架によって実現される神のみわざです。

3. 神様の刑罰と憐れみ② (20～24節)

苦しんで子を産む女にエバ(命)と名付けたのは、神様からの命の約束を慕っていたことを示します。「皮の衣を作って着せられた」は、獣の如く成り果てて神様に背いていることを示しています。しかしこれは、新しい土地で生活する上での防護服にもなります。神様が人を憐れみ、覆い尽くし守って下さることがあらわれています。「善悪を知る者となった」、「永遠に生きる者となるおそれがある」は神様の皮肉の言葉です。人は神様の御心を離れて善悪を知る者、永遠に生きるものとなろうとする。でも、人は罪のため善悪を知る者として悪を愛し、塵に過ぎないので永遠に生きられない。この皮肉は、罪が何であるかを知らせ、人が罪から遠ざかることに益するものです。

また神様は、刑罰として人をエデンの園から追放されます。神様がおられることとするしとしてのケルビム、神様の怒りと裁きの象徴であるきらめく剣の炎によって、神様は命の木に至る道を守られます。エデンの園から追い出された人が、神様を抜きにして命の木を食べて生きようとする傲慢を阻止するためです。人間は、罪に対する刑罰に直面するごとに、それらを厳かに受け止めなければなりません。しかし神様は、その裁きの中においても人間に対する憐れみを注がれます。神様の恵みが至るところにちりばめられていることを、決して見逃してはなりません。(千ヶ崎基)

子どもカテキズム

問17 罪とは何ですか。

答 神さまの御言葉を破って、それに背くことです。

一つでもかなわないならば、私たちは神さまの御前に罪人です。

ウェストミンスター小教理問答

問14 罪とは何ですか。

答 罪とは、神の律法への一致に少しでも欠けること、

あるいは、神の律法にそむくことです。

〈罪の定義〉

子どもカテキズムは、問16で墮落を取り扱った後、問17で「罪」の定義を扱う。ウ小教理問答も同様である。まず大切なのは、一般的な意味での「罪」と聖書的・教会的意味の「罪」は異なっているということである。それは、「罪を判断する基準」が異なっているからである。その区別を明確にする必要がある。

一般的な意味での「罪」とは、定められた法律や規則に対する違反である。ただし、法律や規則は、時代や場所、環境によって異なっている。ある状況では、罪とされることが、他の状況では罪ではないとされることもある。一般的な意味での罪は、その定義が変化しうるのである。なぜなら法律や規則は、あくまで人間が作るものだからである。

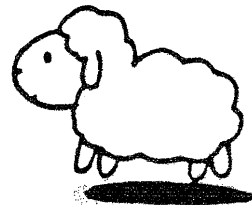
それに対して、聖書的・教会的な意味での「罪」では、常に神様との関係が問題となる。神様は、人と契約関係を結び、律法を与えられた。この律法は、神様の御言葉であり、神様の御心を示しており、人が神様との関係を正しく保つために従うべきものである。したがって、「罪を判断する基準」は、この神の律法に適っているかどうかである。したがって、聖書的・教会的な意味での「罪」とは、「神さまの御言葉を破って、それに背くこと」

であり、「一つでもかなわないならば、私たちは神さまの御前に罪人」なのである。

〈積極的な罪と消極的な罪〉

人が犯す罪には、積極的な面と消極的な面の二つがある。積極的な罪とは、「神の律法にそむくこと」（ウ小教理問14）である。それは、神の律法によって規定されている「してはならないこと」を行うことであり、また「すべきこと」を行わないことである。消極的な罪とは、「神の律法への一致に少しでも欠けること」（ウ小教理問14）である。これは、律法によって示されている神様の御心に十分に応えないということである。私たちは、書かれている律法の文言ばかりではなく、そこに示されている神様の御心を知り、それにふさわしく応えることが求められているのである。

（松田基教）



テキスト 創世記 3章8～24節
カテキズム 子どもカテキズム 問17

〔単元のねらい〕

神の御前に決してふさわしくありえない裸の罪人の醜さと、それを決して赦しえない義の神の裁きの恐ろしさ。しかし、その罪人をなおも追いかけて、その赦しのために御子を犠牲にされる神の愛。この愛の驚きを伝えたい。

「あなたはどこにいるのか」

先週、最初の「罪人」の誕生を見ました。神様が食べてはいけないと言われた善悪の木の実を食べてしまったお話でした。それは神様からのテストでした。神様の御言葉に従い、神様の愛にとどまることができるかどうかのテストでした。残念ながら、私たちの先祖である最初の間人は、不合格でした。

罪とは、「神様の御言葉を破って、それに背くことです（子どもカテキズム問17）」。神様の御言葉にしたがって生きることより、サタン甘い誘いのほうが、いつも魅力的に思えます。この世の中では、サタンの言うことのほうがよっぽどまともで、神様の御言葉のほうが間違っているように思えてしまう。学校でも、友だちの間でも、神様を信じている人はほとんどいない。「神様の言うことなんかまじめに聞いて、君は頭がおかしいんじゃないの？」って声が聞こえてきます。でもそんな時、神様を信頼できない自分や、神様から心が離れそうになってしまった自分を見つけたら、思い出してください。それが「罪」だということを。最初の間人も、そうやって神様から離れました。神様の愛を疑い、御言葉を守ることができず、神様の思いを裏切りました。私たちはこの「罪人」の子孫なのです。

「罪人」になった人間は、最初に何をしましたでしょうか。まず神様から隠れたのです。彼は「わたしは裸ですから、恐ろしくなって隠れているのです」と言います。これは「すっぱんぼんだから恥ずか

しいよー」なんてことじゃありません。神様の前で何ももっていない、とっても惨めで弱く情けない自分に気づいてしまったということです。神様に、自分の「罪」を全部見られてしまっている、そのことを思うと恐ろしくて、とても神様の前に出ることができないのです。神様と共に生きることが怖いのです。

私もそのように思う時があります。神様に何もかも見られている、それは恐ろしいことです。あの時みんな友だちをいじめたことも、あの時こっそり嘘をついたことも……愚かで、自分のことばかり考えて、ずるくて卑怯で醜い、すっぱんぼんの自分を、神様は全部知っておられます。神様は、そんな私をいつでも滅ぼすことができる方なのです。そんな神様と共に生きること、あなたには怖くないですか。「罪人」はそれを恐れて、神様から隠れました。

しかしそんな「罪人」を、神様は探し求め、呼びかけてくださいました。「どこにいるのか？」神様は私たちをどこまでも追いかけてくださる方です。それは鬼刑事が「絶対に逃がさないぞ」と犯人を追っているのとは違います。心配で心配で決して放ってはおけないのです。一匹の迷った羊を必死で捜す羊飼いの思いです。「罪人」をそのままにしておいたら、必ず滅びる。だから追いかけて、自分で反省することができるように、あやまることのできるようにと、悔い改める機会を準備してくださったのです。神様が「罪人」を深く愛してくださっているのがよく分かります。

もちろん神様は、「罪」を絶対に赦すことのできない方です。この後の神様のお言葉を見ると、とても厳しい、「罪人」に罰を与える言葉が続きます。「罪人」に怒っておられるのです。しかし、怒るというのは愛の証拠です。あなたのお父さんやお母さんは、あなたが間違っただけをししたら真剣に怒りませんか。それはあなたのことを誰よりも深く愛して、誰よりも真剣に考えているから。「こんなやつどうなってもいい」と思っているなら、怒りはしません。神様は私たちのことを、私たちのお父さんやお母さん以上に深く愛し、真剣に考えてくださいます。だから、「罪人」になってしまった私たちに、真剣に怒りを覚えられます。

そして人間に死が与えられました。「善悪の知識の木の実を食べると必ず死ぬ」と言われたとおり、罪の罰として、死が与えられました。「塵にすぎないお前は塵に返る」と言われています。どれだけこの地上で財産や名誉を手にしても、すべての人が最後は死んで塵になります。もともと人間は、神様とともに生きる、決して死ぬことのないものとして創造されたのに、神様から離れた結果「死ぬべき者」となったのです。「罪が支払う報酬は死です（ローマ6:23）」。

それはただに、心臓が止まるということだけではなく、体は生きていても死んでいるのです。「生ける屍」になってしまったのです。人間にとって一番大切なもの、神様との豊かな命

のきずなを失ってしまったのですから、からっぽなのです。タコが入っていないタコ焼きみたいなものです。翼の折れてしまった鳥のようです。生きていても死んでいるのです。それが「罪人」です。とても悲しいことです。

そして「罪人」は、エデンの園から追放されてしまいました。神様は、人間が神様をどこまでも信頼して、御言葉にしたがいつづけていれば、きっと命の木の実を与えてくださったことでしょう。しかし、もはや命の木に近づくことはできなくなってしまいました。もう神様と共に過ごした喜びのオアシスに戻ることはできません。荒野をさまよい歩くのです。カラカラにノドを渴かせて。

それでも神様は、「罪人」を愛することをおやめになったわけではありません。荒野をさまよい歩く私たちを「どこにいるのか？」と探し求めてくださいます。やがてこの神様が、私たちの罪を赦すため、愛する独り子を身代わりの犠牲として与えてくださいます。命の木に近づく道はケルビムによって守られています。私たちには近づくことはできません。でも「私は道である」と言われるイエス様の方から、私たちに近づいてきてくださいました。このイエス様を信じれば、永遠の命が与えられます。それは私たちの滅びることを望まない神様からの、愛にあふれたプレゼントなのです。（坂井孝宏）

[今週の暗唱聖句] ローマの信徒への手紙 5章8節

しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。



〈ねらい〉

「神の言葉に背くことが罪である」というカテキズムに忠実に語ろう。良い子・悪い子的な倫理的な教えにならないよう気をつける。

〈展開例〉

（「天地創造」の紙芝居があれば、ここのお話の部分二、三枚を用意して随時使う）

アダムさんは、誰かをなぐったり、いじめたりしたのでしょうか？ エバさんのものを盗んだのでしょうか？ 違いますね。最初人間がした悪いことというのは、みんながお母さんや幼稚園の先生から「ダメよ」と言われるようなこととは、少しちがいます。神さまとの約束を破ったことです。この前聞いた、一本の木の実だけを食べてはいけない、というあの約束です。木の実に毒が入っていたわけではありませんし、食べたからと言って誰かが困ることはありません。神さまのおっしゃるようになかったこと、これを「つみ」と聖書は教えています。

アダムさんは約束を破ったのは自分なのに、エバさんのせいにしました。「エバさんが誘ったからだよ」と、ね。エバさんはアダムさんのことを「ズルイ」と思ったかも知れませんね。そしてエバ

さんは蛇のせいにしました。二人は前のように仲良しじゃなくなったかも知れません。二人は神さまから離れて暮らすようになって、ますます神さまのことがよくわからなくなり、淋しい困ったことになりました。

もしみんなが何か悪いことをして、お母さんに叱られたくなくてお家を出て、暗くなってもお外をぶらぶら歩いていたら、楽しいでしょうか？ うれしいでしょうか？ いいえ、怖くて、淋しくて、心配で、おなかがすいてと、いっぱい困ったことがおこるでしょう。アダムさんとエバさんも神さまとの約束を破って神さまから隠れたとき、そんな気持ちだったにちがいません。そんな中で、神さまはイエス様というすばらしいプレゼントをもうこの時から考えてくださったのです。ここへ来れば安心だよ、大丈夫だよ、という場所をちゃんと用意していただきました。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちにもっともっと神さまのことを教えてください。それから、わたしの罪をゆるしてください。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「細い道をしっかり歩こう！」ゲーム

○準備すること

新聞紙を7～8センチ位の適当な幅で細長く折る。

部屋の端から端まで届く程度の長さにテープなどでつないで敷いておく

○遊び方

細長い新聞紙を「道」になぞらえて、新聞紙から落ちないように注意深く最後まで歩く。

落ちたら（足が半分くらいはみ出したら）、最初からやり直す。

○簡単に成功した子でも、全員が終わっていたら何度でも挑戦させよう。

○集中して歩く面白さを味わおう！（競争ではない）

○歩き終えたら、何か小さな（折紙一枚でも）プレゼントがあれば楽しい。

○落ちた感覚がわかるようにするため、新聞紙はなるべく厚めにするのが良い。

○先生がジャッジをすることに決めておく（足のはみ出し具合など少し説明しておく）

〈ねらい〉

罪は神さまと人間との間に大きな溝を作り出しました。この溝を人間は埋めることができません。ただ神さまが、私たちのためにこの溝を埋めてくださり、私たちに神さまとの真実な交わりを与えてくださいます。

〈展開例〉

1. 罪については前回学びましたね。誰が悪いから、罪が生じたのですか。すべて、私たち一人ひとりのせいです。自分以外の何かや、他の人、まして神さまが悪いのではありません。みんな自分が悪いのです。

2. 罪によって、神さまの怒りを招きました。しかし私たちは、そんなことも知らずに、神さまとの交わりが断たれていても平気で生きているような、鈍い者ともなっています。

しかし、それでは本当に喜びをもって、幸いに生きることができません。罪によって断たれた神さまとの関係を回復しなければなりません。

3. 罪は私たちが犯したものですから、私たちが自分でどうにかして、神さまに赦してもらわなければなりませんね。人の物を壊したら、壊した人が弁償しなければなりません。

4. でも私たちは、神さまに対してきっちり弁償することができますか。神さまへの罪というのは非常に重大なものなので、簡単に事が済むということではありません。

私たちが何かを頑張っていけば（善行をする、献げ物をする、滝に打たれる……）、それ

で万事めでたし、解決するというものではありません。

5. では、どうしたらよいのでしょうか。実は私たち人間の側からは、十分に神さまに納得していただくことを行うことは、できないのです。神さまは正しいお方ですから、不十分なままで罪を見過ごされることはありません。

6. すると、もうどうしようもないように見えますね。しかし、違います。神さまに目を転じてください。

神さまは正しいお方であると共に、非常に愛と慈しみに富んだお方です。私たちを愛してくださっています。

ですから、私たちを罪と滅びの中に捨てておかれることなどおできにならないのです。神さまのほうから私たちのために、救いの御手を伸ばしてくださっています。「見失った羊」の喩え（ルカ15:1-7）を思い起こしてください。私たち一人ひとりを、神さまは探し求めてくださっています。そして、見つければ、大喜びしてくださるのです。

7. 神さまは正しい神さまであり、愛の神さまです。ですから、罪によって失われた私たちのために、救いの道を切り開き、大きな溝を神さまのほうから埋めてくださいました。

それが主イエス・キリストの十字架です。それで私たちが神さまとの真実な交わりを回復し、幸いなうちに生きるために必要なことは、ただ主イエス・キリストを私の真の救い主と信じ、受け入れることです。

〈ねらい〉

人が犯した最初の罪を復習して、罪とは「神さまの御言葉を破り、それに背くこと」であることを確認する。また、罪人に対する神さまの愛を確認する。

〈展開例〉

先週、アダムさんとエバさんが、神さまの前で罪を犯したことから学びましたが、何を行ったか覚えていますか？ アダムさんやエバさんは、他の人をなぐったり、傷付けたりしたのでしょうか？ 誰かのを盗んだりしたのでしょうか？ その様なことはしていませんでしたね。最初の方が神さまの御前で行った罪とは、神さまとの約束を破ったことでした。つまり善悪の知識の木から実を取って食べたことです。

二人が木の実を食べて、どの様な変化が起こったのでしょうか？ 他の人が困ることがありましたか？ お腹が痛くなったりしましたか？ そうしたことは何もありません。

しかし、アダムさんもエバさんも、自分たちが「罪」を行ったことを知っていました。だから、神さまが園に来られた時、二人は神さまを避けて隠れたのですね。またさらにアダムさんは、この責任をエバさんの責任にします。エバさんは、アダムさんが「ずるい」と思ったと思いますが、自分も蛇の責任にします。

ではなぜ、アダムさんもエバさんも、逃げ隠れたり、言い逃れをしたのでしょうか？ 自分が神さまとの約束を破り、悪いことをしたことを知っていたからなのですね。神さまとの約束を破ることは、「死ぬ」ことを知っていたからなのです。

神さまは、アダムさんとエバさんが神さまとの約束を破った時、その場におられませんでしたが、すべてを知っておられました。隠れていることもご存じでした。神さまは、ずっーとふたりのこと

を見守ってくださっているのです、二人は神さまの前で何も隠すことができなかったのです。

もしみんなが、お菓子が欲しくなり、お母さんの財布から100円を取り出して、そのお金でお菓子を買って、食べた時、どう思いますか？ 「見つからないかな」、「見つかったら怒られる」、「お父さんに言いつけられて、叩かれる」と怖くなるのではないのでしょうか。一日二日と経って見つからなくても、見つかった時のことを思い、不安で仕方がないと思います。誰も味方がいないと思います。一人っきりで、寂しくなると思います。

でも、このことがお母さんに見つかり怒られた時、後からお母さんが優しく「もうこんなことをしてはいけませんよ」と言われた時、「もうこんなこと絶対しない」と思うのではないのでしょうか。

アダムさんもエバさんも、怖さと不安で一杯だったと思います。しかし神さまも、お母さんと一緒です。「もうしてはいけませんよ」と語りつつ、イエスさまという罪の赦しと救いを用意してくださいました。だからこそ、もう、アダムさんもエバさんも、神さまから逃げ隠れたり、人に責任を押しつけて嘘をついたりすることは、しなくて済むようになりました。

みんなのことを、お父さんお母さんがいつでも見ていてくれるように、神さまもみんなのことをいつも見守ってくださいます。悪いことをしても隠すことなど出来ません。しかし同時に、神さまを信じる人には、イエスさまというプレゼントを用意して下さり、救ってくださいます。

〈お祈り〉

神さま、私たちは罪を犯してしまいます。お赦してください。しかし、イエスさまによる救いをお与えくださり、ありがとうございます。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

罪についての理解を深める。

〈子どもカテキズム〉

問17：罪とは何ですか。

答：神さまの御言葉を破って、それに背くことです。

一つでもかなわないならば、私たちは神さまの御前に罪人です。

〈展開例〉

1. 罪について考える

○「罪」とはなんだろうか。「罪」と「罪ではないこと」は、誰が決めるのだろうか。「これは罪」、「これは罪ではない」というように、「罪」と「罪ではないこと」を区別する基準はあるのだろうか。生徒たちの考えを発表しあってみよう。

○もし、「罪の基準」となるものがなければ、「罪」

自体がとても曖昧なものになってしまう。特に信仰心（宗教）をもたない日本人が「誰でも死んだら天国に行く」となんとなく考えているのは、「罪の基準」を持たないからかもしれない。

○しかし、聖書は、はっきりと「神の御言葉」がその基準であることを教えている。

2. ウェストミンスター小教理問答問14から、罪について考える

問14：罪とは何ですか。

答：罪とは、神の律法（＝聖書、神の御言葉）への一致に少しでも欠けること、あるいは、神の律法に背くことです。

○「神の律法」すなわち神の御言葉が、罪が罪ではないかをはっきり示す基準である。

○御言葉に背くことはもちろん、御言葉にほんの少しでも一致しないことも罪として、聖書は教えているのである。



罪を犯しエデンの園を追われたアダムとエバに子供が与えられます。カインとアベルです。エバの言葉には子供誕生の驚きと、それが自分の業ではなく神様の御業であることの告白が表れています。しかし、夫婦関係に親子関係が加わり、さらに兄弟関係も加わって人間の世界は拡大し、多様化して行くに従って、罪人としての人間の問題も、拡大し複雑化して行くのです。

カインはやがて土を耕す者となり、アベルは羊を飼う者となります。そしてあるとき、二人は自発的に神様への献げ物をしました。すなわち、カインは土の実りを、アベルは子羊をそれぞれ持ってまいりまして神様に献げたのです。しかし神様は、アベルの献げ物には目を留められたにもかかわらず、カインの献げ物には目を留められなかったのです。これは品物の違いではなく、献げる者の心の違いによる結果でした。「アベルは羊の群れの中から肥えた初子を持って来た」と書かれています。神様への献げ物として最も良い物を選ぶために心を尽くしたアベルの思いがそこに表れています。「信仰によって、アベルはカインより優れたいけにえを神に献げ、その信仰によって、正しい者であると証明されました。神が彼の献げ物を認められたからです。」(ヘブライ人への手紙11:4a)とあるとおりです。一方、カインの献げ物に関しては何も言及されていません。おそらくアベルのような心遣いや神様への感謝と畏れがなかったのだと考えられます。だからこそカインは、神様の御前にあって尚怒りにとらわれて顔を上げることが出来なかったのでしょうか。そしてついには弟であるアベルを殺すという、恐ろしい罪を犯してしまったのです。「カインのようになってはなりません。彼は悪い者に属して、兄弟を殺しました。なぜ殺したのか。自分の行いが悪く、兄弟の行いが正しかったからです。」(ヨハネの手紙一-3:12)とある通りです。

6、7節の神様のカインへの語りかけは、カイ

ンが悔い改めて正しい応答をし、神様の元に立ち帰るチャンスでありました。そういう意味では、カインの献げ物が拒まれたということ自体も、カインを真実な悔い改めに導こうとなさる神様の恵みの故、とすることが出来るでしょう。しかしカインはそんな神様の恵みによる語り掛けに応答せず、罪による怒りとねたみの衝動に身を任せ、弟を殺してしまったのです。それは神様の形として造られた尊い命の破壊行為であり、創造者なる神様への反逆行為でした。しかし、そんなカインに神様は尚語りかけてくださいました。「お前の弟アベルは、どこにいるのか。」これは木の間に隠れるアダムとエバに向かって「どこにいるのか。」と語りかけられたのと同じ、悔い改めと罪の告白の機会を与えるための語り掛けでありました。しかしカインは「知りません。私は弟の番人でしょうか。」と、この神様の配慮を強く拒否したのです。そんなカインに対して、神様は罪の裁きを宣告なさいます。しかしそれでもカインの口から悔い改めの言葉は出ず、「私の罪は重すぎて負いきれない！私は殺される！」という不満と不安の叫びを上げるだけです。けれども尚、神様はそんなカインを憐れみ、彼が人に撃たれることがないようにカインに「しるし」をつけられたのです。それが具体的にどんな「しるし」なのかは分かりませんが、神様は悔い改めないカインを裁きつつも、尚憐れんでくださったのです。

このように、人の心の中の罪は、ねたみ、怒りなどの思いとなり、さらに言葉や行いとなって現れ、悲惨な結果をもたらし、人を神様から引き離そうとするのです。そして神様から離れた人は、常に不安と不満の中に生きることになるのです。カインの嘆きの叫びにはそのことがよく表れています。しかしそんな罪深い人間を神様は尚憐れみ、忍耐強く悔い改めの機会を与えてくださるお方なのです。(吉田 実)

子どもカテキズム

問18 罪を犯した人間はどのようになりましたか。

答 神さまとの交わりを失い、

生きているあいだも、死んだあとも、

神さまの怒りを受けなければならなくなりました。

ですから、心が曲がって、自分中心になり、お友だちとけんかをしたり、

うそをついたり、盗んだり、悪いことをしてしまうのです。

参照教理問答 ウェストミンスター小教理問答 問17, 18, 19

〈墮落の状態〉

ウ小教理は、問17で墮落が人にもたらした状態を「罪と悲惨の状態」と語り、問18で「罪の状態」を、問19で「悲惨の状態」をそれぞれ教える。子どもカテキズムは、それを念頭に置いた上で、ひとつの問答として特に「悲惨の状態」を主に扱っている。ただし、「悲惨の状態」は常に「罪の状態」を前提としていることを覚えておかなければならない。

〈原罪〉

人が墮落によって陥った罪の状態を「原罪」と呼ぶ。これは、最初の人アダムが罪を犯したことによって、人が創造された時に与えられた最初の義すなわち「神のかたち」が歪んでしまったことを意味する。したがって、アダムを先祖とするすべての人は、神様との正しい関係に立つことができなくなった。それによって人は、その性質全体の腐敗、すなわち「原罪」を持つことになったのである。そして、そこからあらゆる罪が生じているのである。「お友だちとけんかをしたり、うそをついたり、盗んだり、悪いことをしてしまう」のは、その為である。

〈悲惨の状態〉

悲惨とは、罪の結果として生じる惨めな状態を意味する。人間の原罪の結果として生じる悲惨の

状態は、以下の二つにあらわすことができる。

①神様との交わりの喪失。

神のかたちが歪み、神様との正しい関係に立つことのできなくなった人間は、「神さまとの交わりを失」った。これは、神様の御心を正しく知ることが出来ず、神様の御心に正しく応えることが出来なくなったということであり、また、神様が与えてくださる恵みを正しく受け取ることが出来なくなったということでもある。

②神様の怒りとのろいの下にある。

人は、原罪によって「神の怒りとのろいの下に」（ウ小教理問19）置かれることになった。ここに、人間のすべての悲惨の根源がある。私たち人間は、「生きているあいだも、死んだあとも、神さまの怒りを受けなければならない」のである。神様との交わりを失い、神の怒りとのろいの下に置かれているがゆえに、私たち人間は生きている間「この世のあらゆる悲惨」に苦しみ、罪の報酬としての「死そのもの」を与えられ、死んだあとは「永遠の地獄の刑罰」を負わされるのである。

これらは、私たち人間が罪人である限り避けることができず、必ず引き受けなければならないものなのである。だからこそ、私たちは神による救いを必要とする。
(松田基教)

テキスト 創世記 4章1～16節
カテキズム 子どもカテキズム 問18

〔単元のねらい〕

最初の人アダムと妻エバとに与えられた子どもたちの間に起こった悲しい出来事は、もちろんアダムの罪が彼の子にもたらされ、さらには彼の子孫である全人類にもたらされた消息を示すものである。罪の事実には慄然とする。しかし兄弟を殺したカインに対する神の守りは、一条の光である。この光が十字架のイエス・キリストにまでつながるものであることを、わたしたちは確認することができるであろう。罪の深刻さを受け止めつつ、ここでも主のゆるしと救いの恵みを深く覺えたい。

「唯一の神を愛する」

神さまが最初に造られた人アダムと、その妻エバの間に、神さまは男の子をさずけてくださいました。ふたりは大きな喜びに満たされたことでしょう。男の子はカインと名づけられました。

続いてもうひとりの男の子も与えられて、アベルと名づけられました。兄のカインは土を耕す人になり、弟のアベルは羊を飼う人になりました。

あるときふたりは、それぞれの仕事で与えられた実りを神さまにささげて、礼拝しました。カインは土からとれた作物をささげ、アベルは羊の群の中から肥えた初子をささげました。

でも神さまは弟のアベルのささげものには御目をとめられましたが、兄のカインのささげものには御目をとめられませんでした。

それは不公平ではないか、と思うかもしれません。神さまがなぜそのようになされたのかはよくわかりません。神さまのみこころを、わたしたち人間が知り尽くすことはできないからです。

しかし、おそらくこういうことではなかったか、ということはありません。つまり、アベルはカインにくらべて弱い人だったのです。「アベル」という名は「息」「はかなさ」という意味をもちます。息のように頼りなく、はかなく、弱い人ということです。

そのことを思えば、神さまがとくにアベルのささげものに目をとめられたことは、わかるような気がするのです。神さまはいつも貧しい人、さげ

すまれている人、価値のない人、弱く小さな人の味方だからです。

もしもそうであれば、カインは自分よりも弱く小さな弟アベルをかえりみてくださったことを喜び、感謝することができたはずでした。けれどもカインは神さまが弟のささげものだけをかえりみられ、自分のささげものをかえりみられなかったことを怒り、弟をねたみました。怒りやねたみは神さまよりも自分のほうが正しいと思う心から起こってきます。カインはこのとき、顔を伏せました。目を天に上げて、神さまを仰ごうとはしませんでした。これは、神さまに背く心のあらわれです。

そのような心に支配されたとき、人は怒りをしずめて、もう一度神さまのほうに向き直らなければなりません。神さまもこのときにカインが怒りのあまり罪を犯すことがないように、前もってカインに仰せになりました――あなたはもう一度顔を上げなさい。罪があなたを支配しようと、戸口で待ち伏せしている。だから一刻も早く罪から離れなさい。

カインはこの神さまの警告に耳をかすことをしませんでした。アベルを野原に誘い、そこで弟を殺してしまったのです。

神さまはカインに、あなたの弟はどこにいるのかとお尋ねになりました。カインは知らない、と

うそをつきましたが、神さまは何もかもご存知です。カインに仰せになりました——あなたの弟の血が土の中からわたしに向かって叫んでいる。あなたは弟の血によって土を汚した。だから、もう土を耕す者として生きていくことはできない。あなたは地上をさすらい歩く者となる。

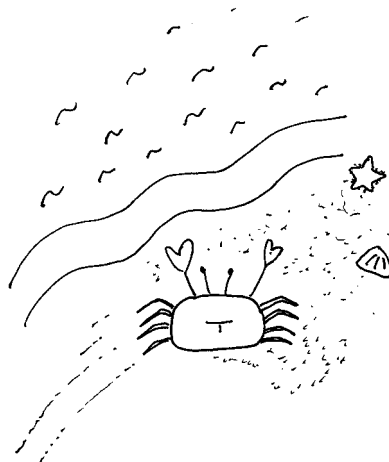
アダムとエバに与えられた兄弟のひとり殺す者となり、もうひとは殺される者となりました。ほんとうにおごそかなことです。アダムとエバの罪がここに受け継がれているのを見るのです。聖書は、アダムのすえであるすべての人間はアダムの罪を受け継ぎ、生まれながらに罪人であると語るのです。

しかし、弟アベルを殺したカインを、神さまはそれでも守ってくださいました。わたしの罪は重すぎて負いきれないと悲しみ嘆き、地上をさすら

うわたしを見つけた者はだれでもわたしを殺すでしょうと恐れるカインに、神さまはしるしをおつけになり、これはわたしのもの、と仰せになって、だれひとりカインの命を奪うことがないようにしてくださったのです。

人はみなアダムにあって生まれながらに罪人です。でも、神さまがカインにしるしをつけられたように、イエスさまもご自身を信じる者たちに、ご自分のしるしをつけてくださいます。これはわたしのもの、この者の身代わりとしてわたしが十字架に死んで、この者の罪をあがなった。それゆえに、この者はもはや罪ゆえに死ぬことがない——そういう目印をつけてくださいます。イエスさまはわたしたちのために十字架に死んでくださいました。ここに罪のゆるしがあり、ほんとうの命があります。 (木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ガラテヤの信徒への手紙 6章17節後半
わたしは、イエスの焼き印を身に受けているのです。



〈ねらい〉

殺人という罪の悲惨さは、幼児には実感できないかも知れない。罪から派生する弱さ、悲惨さを共感させよう。

〈展開例〉

家でお母さんがお留守の時に、お母さんが大切にしているカップをえりちゃんが割ってしまいました。どうしよう、叱られる、と思っているときにお母さんが帰って来ました。「ママー」と言っている様子にお母さんに抱きついていくのは、ちょっとできない気分でした。黙っていたら分からないかも知れない、そう思いました。お母さんは気が付かないようです。でも、いつ見つかるかとドキドキしていました。ずーっと見つからないといいなあ、と心から思いました。でも、お夕飯の支度が始まったときお母さんは気が付きました。「ママのカップ誰が割ったの？」とお母さんが聞きました。「わたし」とえりちゃんは言えよかったのに、えりちゃんは思わず、「わたし全然知らない」と言ってしまうました。お母さんはえりちゃんの顔をのぞきこんで「本当にしらな

い？」と尋ねました。えりちゃんはお母さんの顔を見ないで「うん」と首を縦にふりました。お母さんは何も言いません。えりちゃんはいっぱい困ってしまいました。もう黙っていられなくなって「えりちゃんが割っちゃった～」と言いながら泣いてしまいました。お母さんはえりちゃんを膝に抱いて言いました。「お母さんの大事なカップが割れちゃってとってもがっかりだけど、えりちゃんが嘘をついたことのほうがもっと悲しいわ。嘘をつくとどんどん嘘が増えちゃうのよ」えりちゃんはほんとにそうだな、と思いながら聞いていました。小さなことでも正直に本当のことを言うのは大変です。神さまが守ってくださらなければカインのような大きな悪いことだって起こるかも知れません。罪の力は大きいのです。そういうわたしたちを神さまは呼びかけ、神さまの子どもになるよう待っていてくださいます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしたちの罪をゆるしてください。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉**うそ？ ほんと？ ゲーム**

○動物の名前と鳴き声を言って、ほんとかうそかを当てよう。

○例

馬です。もーもーと鳴きます。(うそ)

犬です。わんわんと鳴きます。(ほんと)

ネコです。きっきっ、きっきつと鳴きます。(うそ)

○いろいろな動物を考えて準備します。

○代わって出題したい子どもがいたら、やってもらいましょう。

〈ねらい〉

死への恐れと罪との関係を述べた後、主イエス・キリストによる救いが、この死への恐れに打ち勝つものであることを明確にする。

〈展開例〉

1. 先生は小さい頃、死ということを考えると非常に不思議で、どう考えたらよいのか分からなくなりました。死んだ後、どうなるのだろうか。どこで、何をして、何を考えているのだろうか。何も分かりません。

そして、それと共に、捉え難い恐怖の念にも襲われました。皆さんはどうですか。

2. 死ぬことがなければいいのになあ、と思ったこともあります。どうして、人は死ななければならぬのでしょうか。

3. 聖書は教えています。私たちの罪が、死に関係しているということです。

「罪が支払う報酬は死です」(ローマ6:23)。人間の罪のために、人間には死が避けられないものとなっています。

「報酬」というのは、お父さん・お母さんのお手伝いをしたときに貰えるかもしれないご褒美・お小遣いのようなものです。お小遣いは嬉しいですね。でも罪というのはいが悪いものなので、それから貰えるのは私たちにとって悲しいことばかりです。その最たるものが死です。

4. では、私たちはもう諦めて、ただ死を受け入れるほかないのでしょうか。世の中には、それが賢い生き方だよ、と教える(誤った)考え方も

あります。しかし、聖書・キリスト教には、諦める、とか、仕方がない、といった発想は、基本的にありません。

5. 先ほどの御言葉には続きがあります。「しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです」。

「賜物」はプレゼントです。神さまが私たちにプレゼントをくださるのです。それは何かといえば、永遠の命です。

6. 私たちの罪のため、主イエス・キリストが十字架の上で、私たちの身代わりに死んでくださいました。それで、誰でもこのお方を救い主と信じるならば、その罪を赦していただけます。罪を赦されるとということは、永遠の命に生きることができるということです。

7. このように、信仰によって死に打ち勝つのです。

ただし、肉体がやがて死ぬことは避けられません。しかしそれは、信仰がないまま死ぬこととはまったく違います。

なぜなら、〇〇ちゃんのことを神さまがしっかり覚えてくださっていて、神さまはいつまでも共にいてくださるので、平安のうちにいつまでも守られるからです。

8. ですから私たちは、死を恐れるのではなく、生きている今を大切にして毎日を歩んでいきましょう。

それは神さまを信じて、前向きに生きることです。そしてお友だちをはじめ、すべての人に親切にし、仲良くすることです。

〈ねらい〉

罪の引き起こす悲惨を知り、主イエスのみもとに救しと平安があることを知る。

〈展開例〉**○ねたみの心**

人間にはだれにも、ねたみの心があります。皆さんのお友達が努力をしてよい成績をとったり、すばらしい作品をつくりあげたりしたら、皆さんはどう思いますか。一緒に喜んであげられるならすばらしいことです。でも、たとえばそれが自分よりもすばらしいものだったときには、心の中がおだやかではない、ということはないでしょうか。あるいは、自分が決められたことを守っていなかったときに、それをきちんと守っている人がとりにいたら、おもしろくないと思ったことはないでしょうか。

人間はだれでも、自分がほめられたいし、自分が一番でいたいのです。自分ではないほかのだれかがほめられたり、よい報いを受けたりすると、心の中が騒ぎ出して、おだやかでいられなくなるのです。

それは、人はみな自分がいちばん正しいと思っているからです。それで自分よりも正しい人があらわれると、その人を憎んだり、いっそ目の前からいなくなってしまうえばよいと思うのです。それがねたみの心です。

今朝はカインのことを学びました。カインは自分のささげものが神さまに受け入れられず、弟アベルのささげものが受け入れられたことをねたんで、アベルを殺してしまったのです。

でも、このお話をよく読んでみると、カインはほんとうはアベルをではなく、神さまをねたんだのだということがわかります。神さまを憎み、神さまなんかいなくなってしまう、と思ったのです。

○イエスを仰ぐ

この思いは、カインがアダムとエバから受け継いだものです。アダムとエバが、エデンの園で罪におちたとき、サタンはどのような言葉で罪に誘ったのでしょうか。この（善悪を知る）木の実を食べるなら、自分が神になれますよ、と誘ったのです（創世記3:5）。

人間が自分のことを神さまのように正しいのだと思い込むこと。それが罪です。そのとき、神さまが見えなくなります。神さまがアベルのささげものを受け入れ、カインのささげものを受け入れられなかったこと、その理由ははっきりとはわかりませんが、必ずそこにご計画があったはずで、それが最善であったはずで、けれども、カインにはそれが見えず、神さまへのねたみと憎しみをつのらせました。カインは顔を伏せて、神さまを仰ごうとしません。そういうことが、わたしたちにもあるのではないのでしょうか。カインと同じく、わたしたちもアダムの罪を受け継いでいます。わたしたちは、「戸口で待ち伏せて」いる罪をしりぞけなければなりません。どのようなどきにも神さまをほめたたえ、神さまのみこころに従うことこそが命を保つ道であることを思い起こさねばなりません。

罪の力は手ごわいので、わたしたちは自分の力で罪をしりぞけることはできません。けれども、わたしたちに代わって罪の力と支配とに勝利してくださった十字架のイエスさまがわたしたちの味方です。ねたみの心に支配されそうになったら、イエスさまのもとに避難をしてください。顔を上げて、イエスさまを仰ぎましょう。イエスさまの守りを祈り求めましょう。

〈お祈り〉

神さま、罪を犯すことはとても悲しいことです。どうかわたしたちを罪の思いから自由にしてください。罪に打ち勝つ力をお与えください。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

罪の悲惨と救いについて考える。

〈子どもカテキズム〉

問18：罪を犯した人間はどのようになりましたか。

答：神さまとの交わりを失い、
生きているあいだも、死んだ後も、
神さまの怒りを受けなければならなくなりました。
ですから、心が曲がって、自分中心になり、
お友だちとけんかをしたり、
うそをついたり、盗んだり、悪いことを
してしまうのです。

〈展開例〉

1. 罪の悲惨さについて考える

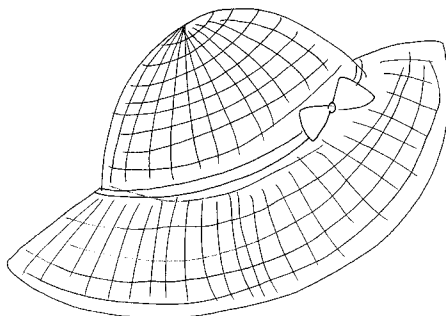
○ウェストミンスター小教理問答問17には、「墮落は、人類をどんな状態に落としましたか。墮落は、人類を罪と悲惨の状態に落としました」とあり、墮落によって、人類が今悲惨の状態にあると教えている。そして、その

悲惨な状態をこの子どもカテキズム問18は教えている。

- この悲惨さの第一にあげられていることは、神との交わりを失ったことである。神との間に大きな断絶が生まれたことこそ、私たち人間の最も大きな悲惨である。

2. 罪の悲惨を修復して下さったキリストの十字架について考える

- この神と人（私）との交わりの喪失（断絶）を修復し、神との平和な関係をもう一度築いて下さったのかイエス・キリストであることを覚えよう。
- イエス・キリストは、十字架上で、「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と叫ばれたが、あの叫びは神との断絶の叫びであり、本来私たち一人ひとりが叫ぶ言葉であった。しかし、イエス・キリストは、私たちの悲惨をすべて背負い、私たちの身代りとなって神との完全な断絶を引き受けて下さったのである。



このたとえ話は「自分は正しい人間だとうぬぼれて、他人を見下している人々」に対して語られたたとえ話です。それが誰であるかは特定されてはいません。たとえ話の中ではそれはファリサイ派の人の姿として描かれていますが、それはファリサイ派だけの問題であるとは言えないのです。主イエスの弟子たちの中でさえ、「誰が一番偉いか」という議論が起こり、主イエスから叱責を受けるということもありました。主の教会の中においても、自分は正しい人間だとうぬぼれて他人を見下すということが起こる危険性は常に存在するのです。いえむしろ、クリスチャンは徴税人のような明らかな罪人であるよりも、ファリサイ人のような隠れた罪人となる危険性の方が高いとさえいえるのではないのでしょうか。私たちは自分を徴税人の立場において安心するのではなく、自分自身の中にファリサイ人のような傲慢な姿勢が無いかどうか、吟味して見なければならぬのです。

このたとえ話の中のファリサイ人の祈りは、一応感謝の祈りの形を取ってはいますが、その内容は自分と他人との比較の中で他人を裁き見下げ、自分の行いを誇っているに過ぎません。彼は自分の義に対して、自分の行いを根拠に確信を持っています。つまりこのファリサイ人は、一応神に祈る格好をしながら、実は神に頼らず自分自身に頼っていたのです。私たちはこのようなあからさまな仕方で自分を誇り頼るといようなことは少ないかもしれませんが。しかし、他人との比較によって自分を評価し、根拠の無い優越感や劣等感にとらわれてしまうことは少なくないのではないのでしょうか。他人との比較の中で自分を評価している限り、本当の自分の姿は見えてこないのです。

一方それとは対照的に、徴税人は遠くに立って、目を天にあげようとしなかったということが記されています。神様の御もとに近づき礼拝を捧げるにふさわしくない、自分自身の罪深さを強く自

覚しているゆえの態度といえるでしょう。そして彼は胸を打ちながら言いました。「神様、罪人の私を憐れんでください。」彼は「罪人の私」と言いました。この表現は、「すべての人は罪人であり自分もその一人である」というようなことではなくて、他人のことは関係なく、「ほかならぬこの罪人である私」というような強い表現がなされています。他人との比較ではなく、自らの罪深さを徹底的に自覚している者の姿がここにあります。

それは「わたしは、その罪人の中で最たる者です。」(テモテ1:15b)と告白したパウロの言葉にも通じる罪の自覚です。自分自身の中に何も頼るものも誇るものもない、ただ神様の憐れみにすがりしかない、罪人としての深い自己理解がここに表されています。

そして主イエスはおっしゃいました。「言っておくが、義とされて家に帰ったのは、この人であって、あのファリサイ派の人ではない。だれでも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる。」神様は高ぶる者をしりぞけ、悔い砕けた魂に愛と憐れみを向けてくださるお方なのです(詩編51:19)。私たちは皆、他人との比較の問題ではなく、他でもないこの自分自身が神のみ前に出る資格のない罪人なのです。しかしそんな私達の為にイエス・キリストは来てくださり、十字架の上で私達の身代わりとなって死んでくださり、蘇ってくださいました。私たちはこの主イエスの御前に日々悔い改めて、全ての罪を赦された者として生活を整えてゆくことが求められているのであり、決してその逆ではありません。生活を整えることによって義と認められるのでは無いのです。私たちは真実な主の日の礼拝の中で、真実な悔い改めて主イエスへの信仰を新たにされ、全ての罪を赦された喜びを持って、新しい生活へと出発するのであります。(吉田 実)

子どもカテキズム

問19 あなたは罪人ですか。

答 はい、私も神さまの御前に罪人です。

ウェストミンスター小教理問答

問16 アダムの最初の違反で、全人類が墮落したのですか。

答 あの契約がアダムと結ばれたのは、彼自身のためだけでなく、子孫のためでもありました。

それで、普通の生まれかたでアダムから出る全人類は、

彼の最初の違反において、彼にあって罪を犯し、彼と共に墮落したのです。

〈罪の自覚〉

子どもカテキズムは、問15で人間の創造、問16で創造の状態からの墮落、問17で罪の定義、問18で罪のもたらす結果、これらを順に教えた上で、「あなたも罪人ですか」と問い、「私も神様の御前に罪人です」と答えることによって、罪の自覚を促す。確かに、罪の意味を知り、私たちが実際に犯している罪を思い起こすことによって、自分が罪人であることを認めることは大切である。しかし、「罪」とは決して自分が自覚しているものばかりではない。むしろ、自覚していない罪の方がはるかに多く、またその罪の方がより重大なのである。そのことを知るためには、「私も神の御前に罪人」であることが何に由来するかを正しく知る必要がある。

〈命の契約と原罪〉

ウ小教理は、問16において、アダムの最初の違反がもたらした結果を教える。答えの冒頭の「あの契約」とは、神様が墮落前のアダムに与えられた「命の契約」のことである。そして、「命の契約」

は、アダム個人のためだけのものではなく、彼からでるすべての子孫のためのものであったことを教える。その意味でアダムは命の契約の代表者であった。その契約にアダムが違反したということは、その結果についても彼のすべての子孫が負わなければならないというのである。すなわち、「アダムから出る全人類は、彼の最初の違反において、彼にあって罪を犯し、彼と共に墮落した」のである。これが罪の源としての「原罪」であり、私たちが含めたすべての人間はこの原罪があるがゆえに罪人なのである。

したがって、私たちが神の御前に罪人であるということは、私たち自身の自覚のあるなしに関わらず、私たちのおかれている現実である。ただし私たちは、神の御言葉である聖書と私たちの内に働く聖霊の御業を通して、私たちの罪の姿を知らされる。私たちが自らの罪の姿を知らされ、それを自覚する時、私たちに与えられる神の救いをも知ることができる。だからこそ、「私も神さまの御前に罪人です」との自覚と告白は私たちにとって大切な意味を持つのである。（松田基教）

テキスト ルカによる福音書 18章9～14節
カテキズム 子どもカテキズム 問19

〔単元のねらい〕

聖書の光に照らされるとき、人ははじめて真の自己を、また自身の罪の真相を知ることができる。しかしみ言葉をとおして罪を知らされ、罪の自分を悲しむ人はさいわいである。主イエスは罪人を救うために世に来られたからである。わたしたちははじめな罪人のままで主イエスのもとに行くことができる。その恵みをわかちあいたい。

「罪ゆるされる恵み」

ふたりの人が、お祈りをするために神さまの宮にのぼりました。ひとりの人はファリサイ人でした。この人はまっすぐ立って胸をはり、心の中でこう祈りました一神さま、わたしは週に二度断食することができます。また、いただいたお金の十分の一を献金しています。わたしがこのような者であることを感謝します。

もうひとりの人は、徴税人と呼ばれる人でした。この人は遠くに立って、目をふせたまま、胸を打ちながらこのように言うことしかできませんでした一神さま、罪人のわたしをあわれんでください。

ファリサイは立派な人です。週に二度も断食するというのはたいへんなことですが、この人にはそれができました。それから、十分の一の献金を守ることができるのも、すばらしいことです。

一方、徴税人のすがたははじめです。この人は自分の罪に打ちのめされて、神さまのもとに近づくこともできず、目を天に上げることもできず、ただ胸を打ちたいて、罪人のわたしをどうかあわれんでくださいと叫ぶことしかできなかったのです。

ふたりの人のうちのどちらが神さまに近いでしょうか。どちらの祈りを神さまはお喜びになるのでしょうか。イエスさまは、それはこのはじめな徴税人のほうであって、あの立派なファリサイ人のほうではないとおっしゃったのです。これは驚くべきことではないでしょうか。

イエスさまがそのようにおっしゃった理由を考えてみましょう。まず、確かにファリサイ人は立派でした。でも、この人は大きな思いがいをしていたのです。この人は、神さまに祈っているようで、実は自分の立派さを誇っていたのです。自分が断食や献金ができることを自慢していたのです。つまり神さまを仰いでいるのではなく、自分のほうを向いていたのです。

献金は神さまの恵みに対する感謝です。わたしたちが食べるものや着るものを日々与えられていること、この地上を生きるうえで必要なものを備えられていること、そのすべては神さまの恵みです。見えるものも見えないものも、すべて神さまがくださるのです。わたしたちが礼拝し、献金し、神さまを信じて生活することができることも、神さまがイエスさまを通してわたしたちを救ってくださったからこそです。わたしたちの生活のすべては、神さまの恵みに対する感謝の応答なのです。

でもこの人は、断食できることも献金できることも自分の力だと思っているようです。つまりこの人は神さまに祈っているように見えて、ほんとうはわたしは自分の正しさ、自分の力で生きていくことができるので、神さまなんかいらぬ、神さまに頼る必要もないと言っているのではないのでしょうか。だとすれば、神さまから遠く離れているのではないのでしょうか。

人はみな神さまのふとところで生きるのです。自分を誇り、神さまのもとを背き離れていくことを、

神さまは何よりも悲しまれるのです。

徴税人は確かにみじめです。けれども、自分が罪人であることを知っていました。実は、自分が罪人であることを知ることこそ、人間にとっていちばん大切な、必要なことなのです。

そして、そのような人こそ幸いな人です。なぜならその人は神さまのゆるしとあわれみがなければ生きていけないことを知っているからです。徴税人の祈りはほんとうの祈りです。この人は神さまに呼びかけるほかはありませんでした。そして、神さまは自分の罪をゆるし、自分を深くあわれんでくださるお方であることを知っていたのです。

人は、外側ではいろいろと正しいことができます。自分を正しい人に見せることができます。でも、自分を正しい人だと信じ、自慢していたファリサイ人は、ほかの人たちを見下げていました。

この罪にこの人は気づかなかったのです。わたしたち人間は、人の目から隠された、心の深い深いところにある罪をこそ、神さまにゆるしていただかねばならないのです。

そして神さまはわたしたちの罪をゆるすためにこそ、ひとり子イエスさまを十字架におつけになったのです。罪なきイエスさまのとうとき血潮によって、わたしたちは罪ゆるされたのです。

わたしたちは自分で自分を救うことはできません。わたしたちはみな生まれながらに罪人です。でも、イエスさまがわたしたちを救ってくださいました。わたしたちはみじめな罪人のままで、イエスさまに近づいたならよいのです。イエスさまがわたしたちをあわれんでくださるからです。十字架の恵みをあふれるほどに注いでくださるからです。イエスさまの招きにこたえましょう。

(木下裕也)

[今週の暗唱聖句] ホセア書 6章6節

わたしが喜ぶのは愛であって いけにえではなく
神を知ることであって 焼き尽くす献げ物ではない。



〈ねらい〉

いよいよ、子ども自身の罪の問題に目を向けます。幼児に罪の自覚がどれほどあるか、年齢、月齢にもよりますが、幼児の実生活にできる限り近づけて自覚を促しましょう。

〈展開例〉

水泳とか、体操とか、エレクトーンとか、英語などを習っているお友だちがいるかもしれません。どれも先生に教えて貰わないと上手になりませんね。でも皆さんは、こういうふうに嘘をつくど誰にもみつからないよ、と上手な嘘のつきかたをお母さんやお父さんに教えてもらったことがありますか？ お友だちのいじめ方を幼稚園の先生に教えてもらいましたか？ もちろん、嘘の付き方やいじめかたをお家の人や先生は教えません。でも嘘をついたことのない人はいません。おけいこごとは教えてもらわないと覚えられないのに、どうして悪いことは教えて貰わなくてもできてしまうのでしょうか。

「でもわたしは〇〇ちゃんよりは良い子だわ」と考えている人がいるかもしれません。けれども、

誰が見ていなくても、みんなに隠していても、どこにいても神さまはわたしたちのこを見ておられます。心の中で、「あの子だいきらい」と思っただけでも神さまは知っておられます。幼稚園で遊んでいるとき〇〇ちゃんが「そのおもちゃ貸して」って言っても貸してあげられない時もあります。優しくしてあげられないときもあります。いったいどうしたらいいのでしょうか。

神さまは悪い子を減ほしたいと思っておられるわけではありません。何とか救ってあげたい、守ってあげようと一生懸命になってくださるお方です。それで神さまはひとり子のイエス様をおくってくださいました。みんなの身代わりに罰を与えてイエス様を十字架にかけられました。「自分の中に罪という悪い黒い心があります。神さまごめんさい、助けてください」という人を神さまは待っておられます。

〈お祈り〉

天の父なる神さま、わたしのつみをゆるしてください。おねがいます。イエス様によって、アーメン。

〈やってみよう〉

「かみさまにかんしゃ」をうたいましょう

「かみさまにかんしゃ」（日本基督教団出版局『こどもさんびか（合本、2）』85番）

○準備するもの

タンバリン・鈴・カスタネットなど音の出る楽器をひとつ教師が持つ。

○こどもは輪になってまわりながらうたう。

○歌の途中で楽器の音がきこえたら、すぐ反対回りになる。

○慣れてきたら、小刻みに音を入れて方向転換を繰り返す。

○「よいもの」のところに、具体的な名詞をいれてうたってもいい。

〈ねらい〉

自分を罪人であると認めることが大切なこと。
それが神さまを求めるといへば至る。

〈展開例〉

1. 人間は皆、罪人です。しかし、そのことを認める人と認めない人がいます。

ある大人の人は、あなたは罪人であると言われて、怒り出しました。私は何も悪いことをしていない、というのです。

2. 自分は罪人などではない、と言う人は、だいたい、自分は法律に違反するようなことをしていない、自分は人の迷惑になるようなことをしていない、それなのにまるで泥棒か殺人犯であるかのように罪人呼ばわりをするのはけしからん、というのです。

でも、問題はそういうことではありません。神さまの前で、自分がどういう人間なのか、ということが問題です。

3. 法律に違反しないとか、人に迷惑をかけない、というのは当然のことですね。

しかし、きちんと世の中の規則を守っていても、私たちは罪人です（ザインではなくツミヒト）。神さまの御心に反することを、考え、欲し、行ってしまうのです。

4. 私は罪人ではない、と言う人は、そのように言うことによって、何かを誇っているかのようですね。

そうです、その人は自分を誇っているのです。自分を誇り、神さまを信じようとしなないのは、本当に大きな罪です。でも、自分を誇っている

限り、神さまのことはよく分かりません。いや、その人は自分自身のことさえも本当はよく分からないに違いないのです。

5. 人間は、どうしても自分自身の罪はなかなか認めがらないのです。しかし、他人の罪はよく分かります。

イエスさまは「あなたは、兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか」（マタイ7:3）と言われました。他人の罪はおが屑のように小さなものでもすぐ気がつくのに、自分の罪は、丸太のように大きなものでもなかなか気がつかない。でも、それではいけないのです。

6. 大切なことは、罪ということを考えるときに、他人の罪を非難することではなく、自分のこととして、この罪を考えなければいけないということです。神さまは私たちの心の隅々まで、すべてをご存じです。その神さまの前で、自分は罪人ではない、と言い切れるでしょうか。

7. 罪人である自分を神さまに赦していただきましょう。心から祈り求めるなら、神さまは赦してくださいます。

私たちの罪を赦すために、主イエス・キリストは十字架の上で私たちのために死んでくださったのです。

8. 罪を認めようとしなければ、罪はそのままその人に残ります。しかし、罪を告白するなら、赦していただけます。そのとき、その人は「罪を赦された罪人」となるのです。

〈ねらい〉

主イエスの罪の赦しの光のもとで、罪人である自分の姿を見つめる。

〈展開例〉**○たとえ話から**

イエスさまの今日のたとえ話には、二人の人が出てきました。

一人は、ユダヤ教の中でもきびしく律法を守ること（たとえば、安息日を必ず守る、断食を必ずする、貧しい人に決められただけはかならず施しをするなど）が信仰のすべて、と考えていたファリサイ派の人。もう一人は、イエスさまと出会う前のザアカイさんのように、人をだましても平気でお金をもうけていた徴税人です。当然のことながら、ファリサイ派の人は徴税人をひどく軽蔑し、見下していました。

しかし、イエスさまは、ファリサイ派の彼らのことを「白く塗った墓」（マタイ23:27）のようだ、と言いました。白く塗った墓の外側は美しく見えても、内側は死者の骨やあらゆる汚れで満ちているように、ファリサイ派の人々は、表面的には着飾り、律法を守り、よい行いをしているように見えても、心の内側では、他の人を見下して軽蔑する、冷たい心に満ちていることをご存知だったのです。

ここに、ファリサイ派の人々にとっての大きな落とし穴があったのです。落とし穴とは、自分は律法を守ることのできる強い人間だ、人々の見本になる良い行いのできる正しい人間だ、と自分のことをそう思いこんでいることです。「わたしは正しい」、「わたしは心の強い人間だ」、だから神さまに頼らなくても、神さまなしでも人々から尊敬を受けることができる……。それは「わたしは、神さまよりも正しくて、強い人間なのだ」と、神さまさえも軽んじて、見下していることに、気がついていないのです。イエスさまは、「もの見えない案内人」（マタイ23:16）とも言っています。信仰の目で神さまを見ることもできずに、大きな落とし穴にはまっているのにも気がついていないようですね！

イエスさまは、まったく新しい救いの恵みを与えるために、来てくださいました。表面的な正しい行いだけを誇る者のためではなく、自分の罪を悲しみ、自分の弱さを嘆く罪人を救うためにきてくださり、十字架におかかりくださったのです。うつむきながら、胸を打ちながら、「罪人のわたしをあわれんでください」とお祈りした徴税人のように、神さまに罪をゆるしていただいたことを心から喜び、神さまだけをより頼み、喜んで従ってゆくことを望んでくださるのです。

○堅固な土台の上に

では、わたしたちは、どうでしょうか？ みなさんもよく知っている「三匹のこぶた」のコブタたちが建てた家は、それぞれワラの家・木の家・石の家でできていました。ワラの家は、造るのにとっても簡単ですし、木の家も見た目には、おしゃれて立派に見えました。しかし、わらの家も木の家も、オオカミの息で吹っ飛んでしまいました。わたしたちの信仰の成長には、時間がかかるかもしれないかもしれませんが、表面的には、おしゃれて立派には見えないかも知れません。それでも、神さまにつながって、土台を据える為に、まず「悔い改め」の穴を掘って、その上に神さまにしっかりとした「救いの恵み」の土台を築いていただいて、堅固な石である「カテキズム」を一つずつ積み上げていけば、その家は決して倒れることも、吹っ飛ぶこともありません。

『子どもカテキズム』問31の答え、「神さまは私たちの罪を赦して義と認めてくださいました。ですから、私たちは、喜びと感謝をこめて、『私たちの神さま、天のお父さま』とお呼びします」。

〈お祈り〉

神さま、ごめんなさい、わたしも罪人のひとりです。わたしのためにも、イエスさまが十字架にかかってくださって、ありがとうございました。イエスさまのみもとに立ち帰って生きる幸いをありがとうございます。イエスさまの御名によって、アーメン。

〈ねらい〉

自分自身の罪を見つめる。

〈子どもカテキズム〉

問19：あなたは罪人ですか。

答：はい、私も神さまの御前に罪人です。

〈展開例〉

○これまで「人間の罪」や「罪の悲惨さ」について学んできたが、子どもカテキズムはこの問19において、直接、はっきりと私たち一人ひとりに強烈な問いを投げかける。

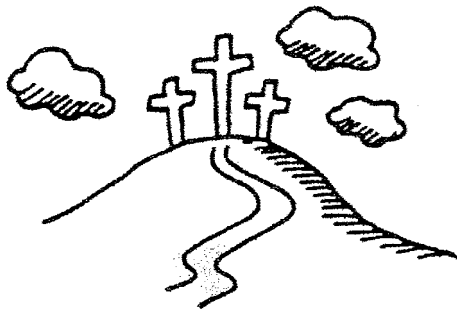
○この問いを自分自身への問いとして受け止め

る時、どのような答えが出てくるか一人ひとり考えてみよう。

○聖書の中には、多くの罪人の言動や罪についての教えが記されているが、実は、どの箇所においてもこの問いのように「あなたはごうですか。あなたも罪人ではないのですか」と私たち一人ひとりに問うているのである。

○神が与えた「罪の基準」である聖書と照らしあわせながら、自分自身の心をまっすぐ深く見つめ、そして、神の御前に立って、自らの罪を告白することを神は求めておられる。

○詩編32編1～5節を読み、教えられたことを発表しあってみよう。



いのちのパン

「わたしは命のパンである。」



わたしは、天から降って来た生きたパンである。



このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる。」

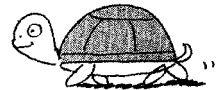
(ヨハネによる福音書 第9章48節・59節)

「ウサギとカメ」のお話を知っていますか？ 足のはやいウサギさんとカメさんが競争しました…。ウサギさんが、負けてしまったのです？ なぜでしょう？？ 先生はこう考えます…。

ウサギさんは、カメを見ていたからです。



それならなぜ、カメさんは 勝つことができたのでしょうか。



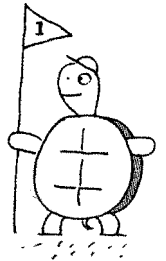
一、カメは、足がおそい じぶんじしんに負けなかった からです。

二、カメは、じぶんのベストをつくした からです。

三、カメは、ウサギさんを見ないで ゴールを見ていた からです。

それならゴールってどこ？ なあに？

こたえは、イエスさま!! 神さまです!

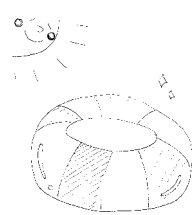


だから、今日も明日も、ゴールインできて、勝てるのです。人とくらべることはありませんよ! ウサギさんも起こしてあげて、みんなで ゴールしようね。

3ヶ月の間、「創世記」を はげましあって

のろのろと でも、こつこつと読んで行こう!!


いのちのばん

<p>7月7日(月) 創世記1章3節</p> <p>神は言われた。「光あれ」</p> <p>悪いことや悲しいことがたくさん起 きると「この世界は暗闇のようだ」と 思いたくなる。でも、神様はこの世界 を光に満ちた世界として造られた。美 しい花や星を見ればそれが分かる。優 しい心の人々を見ればそれが分かる。 まだ残る暗闇を神様は喜ばれない。神 様の光が世界に満ちるよう祈ろう。</p>	<p>7月10日(木) 創世記2章2節</p> <p>御自分の仕事を離れ、安息なされた</p> <p>お父さんが仕事を休んで一緒に遊 んでくれたら、とてもうれしい。神様 は日曜日にはそのお父さんのようだ。 御自分の仕事を離れて休んでくださ り、私と一緒に過ごして下さる。だ から私もいつもしていることを休も う。教会に出かけて、神様と一緒に過 ごすときを喜ぼう。</p>
<p>7月8日(火) 創世記1章16節</p> <p>大空に光る物があって地を照らせ</p> <p>世界中の人々が「太陽は神様の一人 だ」と思っていたけれど、太陽も神様 が造られたものだった。この世界の中 にはただ一人の神様しかいない。私の 命も本当の幸せも、神様だけが与えて くれる。守ってくれる。怖がらなくて よい。神様一人に頼っていれば、心に 安心が広がる。</p>	<p>7月11日(金) 創世記2章7節</p> <p>その鼻に命の息を吹き入れられた</p> <p>弱くてもがっかりしないでよい。神 様は人を土の塵で造られた。だから私 が弱くても、神様は私を喜んでくれ る。でも私は弱いだけではない。神様 は人の鼻に命の息を吹き入れた。私に は神様の息が通っている。神様と心を 通わせて生きることができると弱くても とても大切な私なのだ。</p>
<p>7月9日(水) 創世記1章27節</p> <p>御自分にかたどって人を創造された</p> <p>宇宙は限りなく広いけれども、人間 よりもすばらしい生き物は見つかっ ていない。人間であることは神様に似 ているということ、すごいことだ。神 様は私をそんなにすばらしいものに 造って、「一緒に歩こう」と言ってく ださる。神様に背を向けるのをやめよ う。神様に似た優しい人間になろう。</p>	<p>7月12日(土) 創世記2章15節</p> <p>人がそこを耕し、守るようにされた</p> <p>畑を耕し種をまくと、食べ物ができ る。神様がくれた世界がどんなによい か分かる。神様の言われるとおりに働 くと、この世界のすば らしさが分かる。大人 になって働けるよう、 今、準備しよう。勉強 し、体を大切にしよう。</p> 

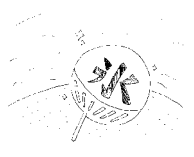
いのちのばん

<p>7月14日（月） 創世記2章18節</p> <p>人が独りであるのは良くない</p> <p>神様は最初の人アダムにお嫁さんのエバをくれた。いつも独りでしたら心が病気になってしまう。時々は独りもよいけれど、いつも独りなら寂しい。心も弱くなる。神様様くださった仲間を大切にしよう。家族や友だちや教会の人たちは、神様がくれた大切な仲間だ。優しい心で共に生きよう。</p>	<p>7月17日（木） 創世記3章17節</p> <p>お前は、～食べ物を得ようと苦しむ</p> <p>神様が「食べてはいけない」と言った実を食べたから、人はすぐに死ぬはずだった。でも、神様は人を死なせず、苦しみながらも生きるようにしてくれた。苦しみの中で神様に従うなら、天国に入れるようにしてくれた。苦しいときこそ神様を思い出そう。神様に従って天国への道を歩歩こう。</p>
<p>7月15日（火） 創世記3章6節</p> <p>賢くなるように唆していた</p> <p>神様に禁じられた木の実を食べたため、人は死ななければならぬことになった。その木の実を食べたら「賢くなる」と思ってしまったのだ。これは大きな間違いだ。神様に従わないで生きるなら、どんなに勉強ができてても本当は賢くない。神様に従う賢い人になろう。天国に入ろう。</p>	<p>7月18日（金） 創世記4章5節</p> <p>どうして顔を伏せるのか</p> <p>弟のアベルを神様が愛するのがくやくて、カインは怒り、弟を憎み、その悪い心を持ったまま顔を伏せて、神様を見上げようとしなかった。そしてついに弟を殺してしまった。神様を見上げたら心にある悪い思いは消え去る。顔を伏せずに神様を見よう。心からの祈りの時がその時だ。</p>
<p>7月16日（水） 創世記3章9節</p> <p>神は～呼ばれた。「どこにいるのか」</p> <p>神様のいいつけを破ったアダムは、神様から離れたら生きられないのに、神様を怖がり逃げてしまった。でも神様は「どこにいるのか」とアダムを呼び、見つけてくれた。だからアダムは死なずにすんだ。私が神様を忘れるとき、神様は「どこにいるのか」と探ししてくれる。お祈りで返事をしよう。</p>	<p>7月19日（土） 創世記4章9節</p> <p>わたしは弟の番人でしょうか</p> <p>「お前の弟アベルはどこにいるのか」と尋ねられて、カインは「わたしは弟の番人でしょうか」と答えた。冷たい心の答えだ。優しい心を持つ人は、家族や友の心配をするはずだ。優しい心で家族や友のため今日も祈ろう。</p>

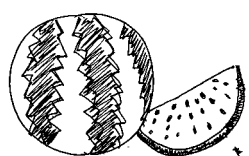

いのちのばん

<p>7月21日（月） 創世記4章23節 打ち傷の報いに若者を殺す</p> <p>「意地悪をされたらいっぱい仕返ししてやる」。神様から遠く離れたレメクは、そう言って自分の強さを自慢した。意地悪な人にも優しくすることがどんなに神様に喜ばれることか、レメクは知らなかった。でも、私たちは知っている。意地悪な人にも優しい心を忘れないでいよう。</p>	<p>7月24日（木） 創世記6章14節 あなたは～箱舟を造りなさい</p> <p>ノアは大きな箱舟を造れと言われた。自分の力と時間をぜんぶ使わなければ造れない大きさは、自分と家族と世界とを滅びの水から救うため、ノアは力の限り箱舟を造った。教会は箱舟のようだ。私と家族と世界とが滅びないために教会はある。教会に行こう。教会のために何かしよう。</p>
<p>7月22日（火） 創世記5章24節 エノクは神と共に歩み</p> <p>この世に生まれた人はいつか必ず死ぬ。寂しい気持ちがするけれど、大切なのは、その間をどう生きたのかということ。エノクの生き方はすてきだ。神様と一緒に歩み、その後は天国に入った。私も同じようにしよう。祈りながら神様と共に生きよう。それが天国に続く豊かな生き方。</p>	<p>7月25日（金） 創世記7章16節 主はノアの後ろで戸を閉ざされた</p> <p>箱舟で一番水が入りそうな所、それは入口の戸だった。動物を入れ終えた後で、急いで水が入らないようにしなければならぬ。でも、実際にその時が来たら、神様が戸を閉めてくれた。これなら絶対に安全だ。私の命の終わりにも、この神様が私を滅びから守ってくれる。絶対に安全だ。</p>
<p>7月23日（水） 創世記6章6節 後悔し、心を痛められた</p> <p>ノアの時代に、神様は悪い人々を洪水で滅ぼしたけれど、その前に、人を造ったことを後悔し、心を痛められた。神様は人を滅ぼすことを悲しまれる方。私が滅びることも神様には悲しみだ。そうならないように、神様はイエスを十字架にくださった。神様の愛に答えよう。イエスを信じよう。</p>	<p>7月26日（土） 創世記8章1節 神はノアと～家畜を御心に留め</p> <p>救われても、箱舟のノアは苦しかった。外は嵐、中はいっぱいの動物、閉じ込められた生活。でも、神様がノアを忘れなかったから、やがて外に出られた。救われているのに苦しいとき、神様は私のことを忘れないでいてくれる。安心。</p> 

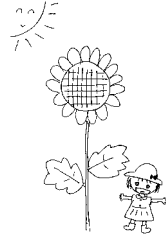

いのちのばん

<p>7月28日（月） 創世記8章11節</p> <p>鳩は～オリーブの葉をくわえていた</p> <p>嵐が止んでも外は水びたし。いつになったら新しい世界が始まるのか待ち遠しい。その時、鳩がオリーブの葉をくわえて箱舟に戻ってきた。新しい世界が始まっているしるしだ。箱舟で待つ人々を力づけるしるしだ。天国はまだだけど、喜びは教会で始まっている。私を力づけるしるしだ。</p>	<p>7月31日（木） 創世記9章15節</p> <p>すべて滅ぼすことは決してない</p> <p>古い世界が水で滅び、新しい世界が始まった時、神様は、どんなに人が悪くなくても水で全部の人を滅ぼしはしないと約束し、「虹を見たら私の約束を思い出しなさい」と言われた。今、私はそういう世界に生きている。神様が毎日私の悪いことを赦してくれる世界。神様の優しさが届いている世界。</p>
<p>7月29日（火） 創世記8章20節</p> <p>ノアは主のために祭壇を築いた</p> <p>滅びから救われて降り立った新しい世界でノアが最初にしたのは、祭壇を築いて神様を礼拝することだった。救われて入る天国で最初にすることも礼拝だ。天国に入れてくれた神様の優しさと力を喜んで心の限りに賛美して、輝くような天国が始まる。教会の礼拝は天国の礼拝に続いている。</p>	<p>8月1日（金） 創世記11章21節</p> <p>さあ、天まで届く塔のある町を建て</p> <p>バベルの町の人々は、神様のいる天まで届く塔を建て、神様と同じになろうとした。でも、ロケットに乗ってどんなに高く昇ってみても、神様と同じにはなれない。本当の幸せは神様と同じになることではない。いばることをやめて神様を賛美しよう。神様と一緒に生きよう。それが本当の幸せ。</p>
<p>7月30日（水） 創世記9章6節</p> <p>人は神にかたどって造られたからだ</p> <p>罪のため、たくさんの人が洪水で死んだ。人間の大切さが分からなくなってしまいそうだ。その時、神様が人間の大切さを教えてくれた。「人を殺してはいけない。人は神にかたどって造られたからだ」。神様が教えてくれるから、どんな時にも分かる。私も友だちも家族もみんな大切な人間。</p>	<p>8月2日（土） 創世記11章9節</p> <p>主はそこで全地の言葉を混乱させ</p> <p>話しても人の気持ちが分からず、私の心も分かってもらえないと、寂しい。バベルの町で人が神様と同じになろうとした時、お互いの言葉が分からなくなった。でもイエス様がくれるのは、いばらない優しい心。人と分かりあえる心。</p> 

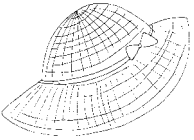

いのちのばん

<p>8月4日(月) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記12章4節</p> <p>主の言葉に従って旅立った</p> <p>主はアブラム(後のアブラハム)に生まれ故郷を離れて主が示す地に行くように命じられました。祝福を約束されました。地上のすべての民族が彼によって祝福されます。聖書は、主がその約束を実現された歴史を記します。アブラムが旅立って、救いの歴史が一步進みだしました。</p>	<p>8月7日(木) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記14章19節</p> <p>彼はアブラムを祝福して言った</p> <p>ロトを救出したアブラムを、神様の祭司メルキゼデクがパンとぶどう酒を持って来て祝福しました。アブラムは持ち物の十分の一を彼にささげて、勝利を与えられた神様に感謝しました。感謝に満ちた礼拝の姿です。</p> 
<p>8月5日(火) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記12章13節</p> <p>わたしの妹だ、と言ってください</p> <p>主の言葉に従って旅立つ信仰を持ったアブラムでしたが、エジプトに来ると恐れに負けました。妻が美しいので自分は人々に殺されるかもしれないと思い、妻に「わたしの妹だ」と嘘をつくように頼みました。主は、彼女を召しいれた宮廷に病気を流行らせ、アブラムを正されました。</p>	<p>8月8日(金) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記15章6節</p> <p>主はそれを彼の義と認められた</p> <p>アブラムは子供がいなことを悩んでいました。しかし主は空の星が数えきれないのと同じように、多くの子孫を与えることを約束されました。アブラムは主を信じました。主はその信仰のゆえに彼を義とされました。</p> 
<p>8月6日(水) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記13章15節</p> <p>見えるかぎりの土地をすべて</p> <p>主はアブラムを祝福し、多くの家畜や天幕を与えました。甥のロトと分かれて住むことにしたほどです。主は、見えるかぎりの土地をすべてアブラムとその子孫に与えること、大地の砂粒のように数えきれないほど子孫を増やすことを約束されました。この祝福の約束がやがて実現します。</p>	<p>8月9日(土) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記16章13節</p> <p>あなたこそエル・ロイです</p> <p>エル・ロイの意味は「わたしを顧みられる神」です。アブラムの子を宿したハガルは、妻サライを見下げたので、サライにつらく当たられました。逃げ出したハガルに、主は御使いを送り、彼女を励ました。主にカづけられた彼女は戻って、イシュマエルを生むことができました。</p>

いのちのばん

<p>8月11日（月） 創世記17章7節</p> <p>あなたとあなたの子孫の神となる</p> <p>神様はアブラムに、これからアブラムと名のるように言われ、彼と彼の子孫との間に永遠の契約を結ばれました。それは神様が“彼らの”神様とになってくださるという約束です。この契約はイエス様を信じる私たちにも与えられています。神様は“私たちの”神様とになってくださるのです。</p>	<p>8月14日（木） 創世記19章29節</p> <p>ロトを破滅の只中から救い出された</p> <p>アブラハムの祈りにもかかわらず、ソドムは自分たちの罪のために滅ぼされました。しかし主は、アブラハムのためにロトを救い出してくださいました。神様は罪に厳しいと同時に、憐れみを求める者を救われる方です。</p> 
<p>8月12日（火） 創世記18章12節</p> <p>サラはひそかに笑った</p> <p>アブラハムが天幕の入口に座っていると、三人の人がこちらを向いて立っているのに気づきました。アブラハムが急いで食事を用意すると、彼らの一人が、来年の今頃にはサラに男の子が生まれていると言いました。信じられなかったサラは笑いました。しかし主の約束は必ず実現します。</p>	<p>8月15日（金） 創世記20章9節</p> <p>その女は夫のある身だ</p> <p>アブラハムは再び同じ過ちを犯しました。ゲラルの王はサラが彼の妹だと聞かされて宮廷に召し入れました。しかし主は王の夢に現れて、彼女がアブラハムの妻であり、あなたはその罪のために死ぬと告げます。王が彼女を返し、アブラハムが祈ると、王と宮廷の女性たちはいやされました。</p>
<p>8月13日（水） 創世記18章32節</p> <p>十人しかいないかもしれません</p> <p>主は罪のはびこったソドムの町を滅ぼそうとされました。アブラハムは執り成して祈ります。50人の正しい人がいても町を滅ぼされますか？ 主は滅ぼさないと言われました。では45人だったら？……20人、10人なら？ 主はその10人の正しい人のために滅ぼさないと約束してくださいました。</p>	<p>8月16日（土） 創世記21章2節</p> <p>彼女は身ごもり～男の子を産んだ</p> <p>神様が約束された通りサラは男の子を産みました。「笑い」という意味のイサクと名づけられました。かつてサラは子を産むことを信じられずに笑いましたが、主の約束の実現に喜びの笑いがあふれました。</p> 

いのちのばん

<p>8月18日（月） 創世記21章18節 <small>かなら こ おお こくみん</small> 必ずあの子を大きな国民とする</p> <p>サラにイサクが生まれたことで、ハガルとその子イシュマエルはアブラハムのもとを離れます。荒れ野で死を待つばかりになっていたハガルに神の御使いが呼びかけます。「あの子を抱き締めてやりなさい。あの子を大きな国民とする。」やがてイシュマエルも一つの民の祖先となります。</p>	<p>8月21日（木） 創世記24章48節 <small>たびじ みちび</small> 旅路をまことをもって導いて</p> <p>アブラハムは息子イサクの嫁を故郷から迎えるために年寄りの僕を遣わしました。僕が祈ると、主はその祈りの通りに町外れの井戸にリベカを来させました。彼は主が導いてくださったことを喜び、主を礼拝しました。</p> 
<p>8月19日（火） 創世記22章12節 <small>こに てくだ</small> その子に手を下すな</p> <p>神様はアブラハムを試して、独り息子イサクを献げ物とするように命じました。彼はイサクと一緒に旅をして命じられた場所へ行き、イサクを祭壇の上にのせて刃物で切りつけようとしています。それを御使いが止めました。彼が独り息子すら惜しまず、神様に従うことがわかったからです。</p>	<p>8月22日（金） 創世記25章34節 <small>ちやうし けんり かる</small> エサウは、長子の権利を軽んじた</p> <p>イサクとリベカの間にエサウとヤコブという双子の息子が生まれました。狩から帰った兄エサウはあまりにお腹が空いたので、弟ヤコブの料理をもらうために、大切な長子の権利を軽んじて弟に譲ってしまいました。これは弟ヤコブを神様の民の祖先とする神様のご計画の始まりでした。</p>
<p>8月20日（水） 創世記23章19節 <small>つま ほうむ</small> 妻のサラを葬った</p> <p>アブラハムの妻サラが死にました。サラを葬るために、彼はマクペラという人の畑の洞穴を買いました。ここが彼の物となった唯一の土地ですが、やがてこの地方全体を彼の子孫イスラエルの物とする主の約束の先取りです。</p> 	<p>8月23日（土） 創世記26章14節 <small>かみさま しゆくふく おお さいざん</small> イサクをねたむようになった</p> <p>神様はイサクを祝福し、多くの財産を与えました。それを見たペリシテ人は彼をねたみ、彼の掘った井戸が自分たちのものだとして主張しました。イサクは次々に別の場所に井戸を掘って、争いを避けました。主は「恐れてはならない。わたしはあなたと共にいる」と約束してくださいました。</p>

いのちのばん

8月25日（月） 創世記27章27節

イサクは～祝福して言った

年をとったイサクは死ぬ前に長男エサウを祝福しようと思いました。妻リベカがそれを聞いて、イサクをだまし、弟ヤコブを祝福させました。多くの民がヤコブに仕えるという祝福は、主によって子孫イスラエルに実現します。しかし兄は怒り、ヤコブはしばらく逃げて暮らします。

8月28日（木） 創世記31章12節

ラバンの～仕打ちは～分かっている

ヤコブは伯父ラバンの娘たちと結婚し、多くの子供を与えられました。彼は20年間ラバンのために働きましたが、何度もラバンにだまされて苦労を重ねました。主はそれをすべて知っていて彼を守り、彼の働きを祝福してくださいました。そして故郷に帰るように命じられました。

8月26日（火） 創世記28章15節

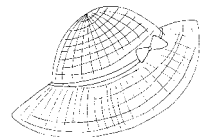
見よ、わたしはあなたと共にいる

ヤコブは不安の中、伯父ラバンの家へと旅立ちました。途中、夜になって石を枕にして寝ました。すると天から伸びる階段を天使たちが上り下りしている夢を見ました。主がヤコブの隣に立って言われました。「わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行ってもあなたを守る。」

8月29日（金） 創世記32章12節

わたしは兄が恐ろしいのです

ヤコブは故郷へと旅立ちましたが、兄エサウはまだ怒っているに違いありません。ヤコブの家族までも殺されないでしょうか？ ヤコブは必死で主に祈ります。子孫を海辺の砂のように多くするという主の約束の実現を。



8月27日（水） 創世記29章11節

ヤコブは～声をあげて泣いた

ヤコブはある井戸に着ました。そこに羊を集めていた人たちは伯父ラバンを知っていて、その娘ラケルが羊を連れて来ると言います。彼女に会うとヤコブは声をあげて泣きました。確かに主がここまで導いてくださったのです。








8月30日（土） 創世記32章27節

祝福してくださるまでは離しません

川を渡れば、いよいよ兄エサウに再会します。その前の夜、ヤコブが一人で川の手前に残っていると、主が彼と格闘されます。夜が明ける頃までヤコブは主を離さず祝福を求めます。主は彼をイスラエルと名づけて祝福しました。



いのちのばん

<p>9月1日(月) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記33章8節</p> <p>御主人様の好意を得るためです</p> <p>ヤコブさんは神様が相撲をとって負けました。神様が勝った、あの日から、神様を自分の本当の主として、従うことができたのです。あんなにひどいことをしたお兄さんを、今では「ご主人様」と呼びます。もう、えらぶって生きなくなりましたのです。</p> 	<p>9月4日(木) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記35章9節</p> <p>イスラエルがあなたの名となる</p> <p>イスラエルという名前には、神様のプリンス、王子様という意味があります。おじいちゃんのアブラハム、お父さんのイサク、そしてヤコブさんと、神様の祝福の約束は受け継がれてゆきます。そして今、あなたも神様のイスラエル。王子様とされるのです。うれしいね。</p> 
<p>9月2日(火) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記33章1節</p> <p>神がわたしに恵みをお与えに</p> <p>ヤコブさんは「神様が恵みを与えてくださったので何でも持っています」と喜びます。きっと持っていない物だってあったはず。神様が主となって、豊かな恵みを与えてくださることを信じたので、満ち足りていたのです。</p> 	<p>9月5日(金) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記35章12節</p> <p>続く子孫にこの土地を与える</p> <p>天天お父様は、ヤコブさんに続く人々にも天国の祝福を与え続けてくださいます。わたしは、イエス様を信じて、神様の子どもです。お友だちにも、神様の祝福を受け継がせるため、イエス様を伝えさせてください。</p> 
<p>9月3日(水) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記35章1節</p> <p>神のための祭壇を造りなさい</p> <p>神様は、ヤコブさんに礼拝する場所をきちんと造り整えるようお求めになりました。それがすべての基本なのです。私たちもそれぞれの教会で礼拝します。それだけではなく、お家でもお祈りする場所、時間をちゃんと決めておけると良いね。</p> 	<p>9月6日(土) <small>そうせい き しょう せつ</small> 創世記37章1節</p> <p>父がどの兄弟よりもヨセフを</p> <p>子どものヨセフはお父さんのヤコブから特別にかわいがられて育ちました。お兄さんたちはねたみます。ヨセフはそんなお兄さんの心を考えず、心に思ったことをそのまま口にしてしまいます。天のお父様、お友だちの気持ちを考えることができるように助けてください。</p>

いのちのばん

9月8日(月) 創世記37章14節
ヨセフを殺してしまおうと企み

お兄さんたちはヨセフを殺そうとたくらみ相談します。それは、どんな理由があっても決してゆるされないことですね。神様はヨセフの命を守ってくださいました。しかし、奴隷としてエジプトに連れて行かれてしまいます。でも忘れないで。すべては神様の御手の中にあることを。

9月11日(木) 創世記39章9節
神に罪を犯すことができましよう

ある日、ポティファルの妻がヨセフを誘惑しました。彼は「どうして大きな悪を働いて、神様に罪をおかすことができましよう」と断ります。そのせいで、わなにかけられて牢屋に入れられてしまいました。けれども、そこにも主なる神様が共におられたので、守られました。



9月9日(火) 創世記38章1節
ユダは兄弟たちと別れて

マタイによる福音書1章2節に、「アブラハムはイサクをもうけ、イサクはヤコブを、ヤコブはユダとその兄弟たちを、ユダはタマルによってペレツとゼラを」とあります。イエス様は、立派な人たちだけの子孫ではありませんでした。それはぼくたち罪人の友となってくださいるためです。

9月12日(金) 創世記39章10節
共にいることもしなかった

神様が共におられることを信じる人は誘惑のあるところに近寄りません。天のお父様、私たちも、ヨセフさんのような信仰の人にならせてください。弱いわたしを今日も悪からお守りください。



9月10日(水) 創世記39章2節
主がヨセフと共におられたので


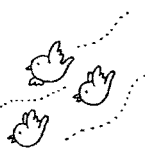

「彼はうまく事を運んだ」とあります。エジプトでは、王様であるファラオの宮廷に仕える役人ポティファルのもとで奴隷となったヨセフは、主人の家のすべてを任せられるまでになります。すべては、主なる神様が共に



9月13日(土) 創世記40章22節
ヨセフが解き明かしたとおり

牢屋の中にも神様は共にいてくださったので、夢を解き明かすことができました。それなのに、牢屋から出られません。君なら、「もう神様なんて信じない」と言いますか？ ヨセフさんは言いませんでした。エジプトで奴隷となって11年。それでも希望を捨てないヨセフさんです。

いのちのばん

<p>9月15日（月） 創世記41章16節</p> <p>わたしではありません。神が～</p> <p>二年後、遂に神様の時が来ました。給仕役の長が、ヨセフのことを思い出してくれたのです。彼はファラオ王様に、夢を解くことのできる人としてヨセフを紹介しました。しかしヨセフは、「わたしではなく、神様のお力によるのです」と、神様にのみ栄光をお返ししました。</p>	<p>9月18日（木） 創世記42章24節</p> <p>ヨセフは彼らから遠ざかって泣いた</p> <p>ヨセフはお兄さんたちが「自分たちは神様からヨセフにしたひどい仕打ちの罰を受けているのだ」と話し合っていることを聞きました。ヨセフは「うれし泣き」をします。仕返しをするためではなく、神様の前に悪いことをしたと気づかせたかったのです。</p> 
<p>9月16日（火） 創世記41章35節</p> <p>神の霊が宿っている人はほかに</p> <p>ヨセフさんは見事に夢を解き明かして見せました。王様は、「このように神の霊が宿っている人はほかにあるだろうか」と感心しました。ヨセフはエジプトの総理大臣になったのです。イエス様を信じているあなたにも神様の霊が宿っています。</p> 	<p>9月19日（金） 創世記43章9節</p> <p>その責任を私に負わせてください</p> <p>お兄さんたちは兄弟のシメオンを一人残したままイスラエルに帰っていました。しかし今、彼を助けるためではなく、食べるものがなくなってしまうので、もう一度エジプトに行きます。まだまだヤコブも兄弟たちも自分勝手。けれども、兄ユダの心は少しずつ変化し始めています。</p>
<p>9月17日（水） 創世記42章8節</p> <p>かつて兄たちについて見た夢を</p> <p>世界中で食べる物がなくなったとき、国の倉庫の中から食べ物を出すことができました。そこにはるばるお兄さんたちがやって来て、地面にひれ伏し食べ物を売ってくださいとお願いしました。子どもの頃に見た夢の通りです。神様のご計画はまちがいに進んでいきます。</p>	<p>9月20日（土） 創世記43章29節</p> <p>ヨセフは奥の部屋に入ると泣いた</p> <p>ヨセフは同じお母さんから生まれた弟のベニヤミンを見て、うれしくて涙がこぼれそうになりました。兄弟たちへの憎しみ、うらみは少しずつ取り除かれます。時間がかかっても、神様のご計画はちゃんと進みます。</p> 

いのちのばん

9月22日(月) 創世記46章16節
神が僕どもの罪を暴かれたのです
 ヨセフは、お兄さんたちが本当に神様を信じ悔い改めているのかを試しました。わざと弟ベニヤミンのかばんの中に自分の銀の杯をしのばせました。その時、兄のユダが言いました。ユダは運が悪いからこうなったとは言いません。神様を恐れ敬っていることがわかります。

9月25日(木) 創世記45章7節
大いなる救いに至らせるためです
 神様は牢屋の中でも総理大臣になってもヨセフと共にいてくださいました。摂理の神様は、うれしいときも悲しい時もいつも共にいて、私たちの役に立つように働いてくださいます。ヨセフさんのように、信じる人を必ず救ってくださる神様を信じ続けていきましょう。

9月23日(火) 創世記44章33節
何とぞ、この子の代わりに
 昔、ヨセフを売り飛ばしてしまおうと考えたユダさんは、今、ベニヤミンの命を救い出すために、自分が代わりに奴隷になりますとお願いします。神様はユダの心に悔い改めと信仰を与えてくださったのです。



9月26日(金) 創世記46章74節
「ヤコブ、ヤコブ」～「はい」
 神様は「ヤコブ、ヤコブ」と名前を呼ばれました。先生は、神様からこの耳で自分の名前を呼ばれたことも、み声を聞いたことも、一度もありません。でも聖書を通して神様から呼ばれていることを信じています。お祈りすることは「はい」と返事をする事です。



9月24日(水) 創世記45章8節
わたしをここに遣わしたのは～神
 ついにヨセフは自分を明かします。兄弟たちは皆、怖がってしまったかもしれません。しかしヨセフは、神様のご計画でお兄さんより先に遣わされたと言います。これは赦しの言葉です。そして本当のことなのです。神様を信じるヨセフさんは優しい心の人ですね。

9月27日(土) 創世記47章25節
私どもの命の恩人です
 エジプトの総理大臣ヨセフは、食べる物に困っている人々を救う仕事をしたので感謝されました。またヤコブはエジプトの王様に祝福の言葉を語りました(47:7)。「地上の氏族はすべてあなたとあなたの子孫によって祝福に入る」(28:14)という神様の約束通りです。



いのちのばん

9月29日（月） 創世記48章14節
彼は両手を交差して置いた
 年老いたヤコブは自分が受け継いだ神様からの約束と祝福をヨセフの子どもにも継がせます。ところが兄ではなく弟に与えました。間違えたのではありません。一番大切なことは、人間の考えどおりではなく神様のご計画がなることだと、長い信仰の生活で分かっているからです。

10月2日（木） 創世記50章20節
あなたがたはわたしに悪をたくらみ
 お兄さんたちがヨセフにしたことは、どう見ても悪いことです。ところが神様はそれを逆手にとってイスラエルを祝福してしまわれます。どんなに強い悪の力でも、神様が立てたご計画をねじ曲げることはできません。だから私たちはむしろ善いことをして今日の日を過ごしましょう。

9月30日（火） 創世記48章15節
わたしの生涯を今日まで～
 「～導かれた牧者なる神よ」。147歳のヨセフは、心から「神（イエス）様は羊飼いです」と言います。そして「子どもたちの上に祝福を」とお祈りしています。あなたもイエス様によって、ヨセフの子どもたちです。このお祈りは、あなたの上にも、今日、実現します。



10月3日（金） 創世記50章20節
神はそれを善に変え
 人間の悪事は、どんなに隠したり飾ったりしても神様の前に消えてなくなりません。ただイエス様が十字架の上で死んでくださったおかげで、消し去られます。そればかりか善にさえ変えられてしまうのです。ヨセフの物語はイエス様の十字架の恵みを私たちに教えてくれます。

10月1日（水） 創世記49章9節
ユダよ、～兄弟たちにたたえられる
 ヤコブが一番祝福したのはヨセフ。「実を結ぶ若木」と言われています。しかしユダの子孫からダビデ王様が、そしてイエス様がお生まれになります。ヤコブの思いをはるかに越え、神様のご計画が必ず実現します。



10月4日（土） 創世記28章20節
神は～必ず、顧みてくださいます
 ヨセフさんの遺した最後の言葉です。自分の人生を振り返って心の底から信じることができた真理です。ほんとうに天のお父様は、僕たちのために、どんなときにも共にいて、愛のまなざしの中にいてくださいます。だから今日も安心して過ごせますね。



2008年10～12月カリキュラム（第31号）

— 『子どもカテキズム』に基づく二年サイクル第1年—

月日 教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム	参考教理問答
		聖書箇所	暗唱聖句
単元の目標			
10月5日	神の怒り	問20	ウ小19、ウ大27-29、ハイデ10-11
		ルカ13:1-5	ルカ13:5（後半）
わたしも神の怒りに値する罪人である。神の御前に立ち、悔い改めに生きよう			
12日	贖い主の必要性	問21	ウ小20、ウ大30、ハイデ54
		エフェソ2:1-6	エフェソ1:5
怒りを受けるべきわたしたちを愛してキリストを与えてくださった神を仰ごう			
19日	二性一人格（一）	問22	ウ小21-22
		ヨハネ1:14-18	ヨハネ1:14（前半）
受肉の神秘を通して、人となられた神の御子が与えられていることを喜ぼう			
26日 宗教改革記念	二性一人格（二）	問22	ウ小21-22
		ヨハネ3:31-36	ヨハネ3:34（前半）
主イエスは上から来られたお方である。神の御子の権威を受け入れ、従おう			
11月2日	主は救い、イエス	問23	ハイデ29、34
		ヨハネ14:1-14	ヨハネ14:6
主イエスが道であり真理であり命である。主イエスの御名によって歩もう			
9日	神の御子、キリスト	問23	ハイ31、33、ウ大32、ジュネ34-36
		ヨハネ20:24-31	ヨハネ20:29
救い主に対する信仰を告白して、信じる者として生きる幸いを味わおう			
16日	謙卑のキリスト	問24	ウ小27、ウ大46-50、ハイデ43
		フィリピ2:6-8	フィリピ2:7-8
神の御子がへりくだり、しもべとなられた。へりくだりのキリストを喜ぼう			
23日	高擧のキリスト	問24	ウ小28、ウ大51-57、ハイデ45
		フィリピ2:9-11	フィリピ2:9
高く上げられ、今も働いておられる主イエス・キリストを仰ごう			
30日 アドベント	預言者イエス	問25	ウ小24
		ヨハネ1:1-5	ヨハネ1:18
まことの預言者として来られた主イエス・キリストの御声を聞こう			
12月7日 アドベント	大祭司イエス	問26	ウ小25
		イザヤ53章	ヘブライ7:24
わたしたちの罪を背負って犠牲となってくださった大祭司イエスを仰ごう			
14日 アドベント	真の王イエス	問27	ウ小26
		ルカ2:1-7	フィリピ2:9
皇帝アウグストゥスとの対比から、まことの王イエス・キリストの誕生を祝おう			
21日 降誕祭	御子イエスの誕生	—	—
		マタイ2:1-12	マタイ2:11
占星術の学者たちの物語。主イエスの前にひざまずき礼拝する人生を生きよう			
28日 年末	一年の感謝	—	—
		詩編146編	詩146:1-2
一年の歩みを振り返り、神の恵みに感謝し、主をほめたたえよう			

2008年度 年間カリキュラム

二年サイクル第1年（子どもカテキズム問1～36）

	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第29号	4月6日	進級式	第一部 人生の目的 人生の目的……礼拝	問1
	4月13日		神の栄光をあらわす	問1
	4月20日		救いの喜び	問2
	4月27日		神の子の喜び	問2
	5月4日		霊と真理による礼拝	問3
	5月11日	聖霊降臨祭 母の日	聖霊降臨祭・教会の誕生	問3
	5月18日		神と人を愛する（一）	問4
	5月25日		神と人を愛する（二）	問4
	6月1日		神の御言葉	問5
	6月8日	花の日	愛の手紙	問6
	6月15日	父の日	第二部 信仰の道 霊なる神	問7
	6月22日		唯一の神	問8
	6月29日		生ける神	問9
	30号	7月6日		三位一体の神（一）
7月13日			三位一体の神（二）	問10
7月20日			主権者なる神	問11
7月27日			天地創造（一）	問12
8月3日			天地創造（二）	問12
8月10日		(平和)	平和を創り出す	
8月17日			摂理の神（一）	問13
8月24日			摂理の神（二）	問14
8月31日			人間の創造	問15
9月7日			人間の罪	問16
9月14日		(敬老の日)	罪と墮落	問17
9月21日			罪の悲惨	問18
9月28日			わたしも罪人	問19

年・号	月 日	教会暦・行事	主 題	子どもカテキズム
2008年 第31号	10月5日		神の怒り	問20
	10月12日		贖い主の必要性	問21
	10月19日		二性一人格（一）	問22
	10月26日	宗教改革記念日	二性一人格（二）	問22
	11月2日		主は救い、イエス	問23
	11月9日		神の御子、キリスト	問23
	11月16日		謙卑のキリスト	問24
	11月23日		高挙のキリスト	問24
	11月30日	アドベント	預言者イエス	問25
	12月7日	アドベント	大祭司イエス	問26
	12月14日	アドベント	真の王イエス	問27
	12月21日	降誕祭	御子イエスの誕生	—
	12月28日	年末	一年の感謝	—
2009年 第32号	1月4日	新年	恵みのみ	問28
	1月11日		選びと有効召命	問29
	1月18日		キリストとの結合	問30
	1月25日		罪の赦しと義認	問31
	2月1日		神の子とされる幸い	問31
	2月8日	(信教の自由)	聖化の恵み	問32, 33
	2月15日	レント	愛の歩み	問32, 33
	2月22日	レント	神の民の祈りの家	問34
	3月1日	レント	キリストの体なる教会	問34
	3月8日	レント	再臨の約束	問35
	3月15日	レント	再臨に備える	問35
	3月22日	レント	死のときの祝福	問36
	3月29日	レント	復活のときの祝福	問36

教案誌会計報告

○教案誌編集部より

中部中会日曜学校委員会発行『教会学校教案誌』は、日本キリスト改革派教会中部中会の事業として、中部中会に会計報告をし、会計監査を受けています。けれども、収入の多くが教案誌の売り上げと自由募金であり、教案誌上において会計報告をすることが必要であると判断し、2006年度分より報告しています。

2007年度の教案誌会計は以下の通りです。なお、内容は、中部中会2008年度第一回定期会において報告したものと同一です。

教案誌会計（2007年2月23日～2008年2月15日）

収入		支出	
中会財務より	100,000	出版費	1,450,050
売り上げ（※1）	1,233,210	送料	96,890
自由募金（※2）	245,200	謝礼	105,535
		庶務費	9,030
		会議費	27,250
		交通費	22,350
		雑費	13,948
小計	1,578,410	小計	1,725,053
繰越金	991,168	繰越金	844,525
合計	2,569,578	合計	2,569,578

※1 講読教会数

改革派教会が54教会、他派が3教会、計57教会

個人購読3名

定期購読部数 306部

※2 教案誌自由募金 31教会団体・2個人

教会団体分内訳

【改革派教会】

鈴蘭台教会日曜学校、丸亀教会教会学校、尾張旭教会、仙台教会、名古屋教会、宇都宮教会、坂出飯山教会、宝塚教会、犬山教会、八事伝道所、浜松伝道所、那加教会、高松東教会、四日市教会、坂戸教会、灘教会、青葉台キリスト教会、高蔵寺教会、高松教会、名古屋教会婦人会、滋賀摂理伝道所、大垣伝道所、津島教会、南浦和教会、山梨栄光教会、豊明教会、大屋伝道所、厚木教会、奈良伝道所教会学校、稲毛海岸教会

【その他の教会】

日本基督教団高岡教会

〈執筆者よりひとこと〉

- 賜物を頂いている兄弟姉妹！奉仕の勇気を！ピンチヒッターより（石川千鶴子）。
- 子どもたちにも理解できるように、教理を噛み砕くことの大変さと重要さを改めて知りました（恵泉教会、大場雅子）。
- 明るく楽しく毎日を過ごしたいと願っていますが、人生そんなふうにはなかなか行かないものです（関口康）。
- 一人でも多くの子どもたちが、若い時に主を信じていることができますようにお祈りしています（立石彰）。
- この夏各中会、教会で持たれるキャンプや修養会が、子どもたちが神さまと出会うよき時となりますよう（木下裕也）。
- 夏の諸行事を通じて、子どもたちの信仰が養われますように願っています（辻幸宏）。

〈あとがき〉

- 今号の「諸教派の教会教育事情」は日本キリスト教会です。澤正幸牧師より文章をお寄せいただきました。日本キリスト教会の真摯な取り組みから学び、対話することができればと願っています。
- 表紙のイラストは、秩父教会の引間裕子姉の作画です。本文・いのちのパンのイラストには、さまざまな兄弟姉妹のご協力をいただいています。心からの感謝を申し上げます。滋賀摂理教会の信濃郁恵姉は日曜学校の生徒です。子どもたちのイラストをお送りくだされば、掲載いたします。お待ちしております。
- 副読本『主は羊飼いい』（木下裕也著）を再刷いたしました。ぜひ各教会の学びのテキストとしてお用いください。

〈購読の申し込み〉

- 『教会学校教案誌』をぜひご購入ください。また、別冊『子どもカテキズム』（300円）と副読本『主は羊飼いい』（800円）をぜひお買い求めください。バックナンバーもあります。第24号までは一部500円で販売しています（品切れの号もあり）。

名古屋岩の上伝道所 相馬伸郎まで
〒458-0021 名古屋市緑区滝の水2-2012
Tel/Fax. 052-895-6701

☆ 執筆者一覧 ☆

まえがき	辻幸宏 (大垣伝道所協力牧師)
牧田吉和 (山田教会牧師)	坂井孝宏 (熊本伝道所宣教教師)
巻頭説教	木下裕也 (名古屋教会牧師)
宮崎彌男 (つくばみことば伝道所宣教教師)	分級展開例
教会学校・日曜学校訪問	幼稚科
中田稔 (岡山西伝道所宣教教師)	石川千鶴子 (横浜教会教会学校教師)
諸教派の教会教育事情	小学科下級
澤正幸 (日本キリスト教会福岡城南教会牧師)	恵泉教会教育委員会
聖書研究	小学科上級7・8月
三川栄二 (稲毛海岸教会牧師)	関口康 (松戸小金原教会牧師)
漆崎英之 (金沢伝道所宣教教師)	小学科上級9月
中根汎信 (那加教会牧師)	教案誌編集部
貫洞賢次 (札幌伝道所宣教教師)	中学科
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	立石彰 (東仙台教会牧師)
千ヶ崎基 (草加松原教会牧師)	いのちのパン (子ども聖書日課)
吉田実 (神戸長田教会牧師)	7月 山中雄一郎 (板宿教会牧師)
カテキズム研究	8月 大西良嗣 (滋賀摂理伝道所宣教教師)
梶浦和城 (豊明教会牧師)	9月 相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)
中根汎信 (那加教会牧師)	イラスト作画
吉田崇 (坂出飯山教会牧師)	表紙 引間裕子 (秩父教会)
松田基教 (高松教会牧師)	本文・いのちのパン
説教展開例	信濃郁恵 (滋賀摂理伝道所)
小野静雄 (多治見教会牧師)	岡野美佳 (青葉台教会)
相馬伸郎 (名古屋岩の上伝道所宣教教師)	相馬直子 (名古屋岩の上伝道所)
望月信 (高蔵寺教会牧師)	

☆ 編集部 ☆

相馬伸郎 (長)	名古屋岩の上伝道所宣教教師
木下裕也	名古屋教会牧師
辻 幸宏	大垣伝道所協力牧師
望月 信	高蔵寺教会牧師
梶浦和城	豊明教会牧師

日本キリスト改革派教会 中部中会 『教会学校教案誌』

2008年7・8・9月号 (季刊)

第30号

2008年5月25日発行

発行	日本キリスト改革派教会 中部中会 日曜学校委員会
発行所	日本キリスト改革派教会 中部中会 教会学校教案誌編集部 名古屋岩の上伝道所 宣教教師 相馬伸郎
	〒458-0021 愛知県名古屋市緑区滝の水2-2012
	Tel/Fax. 052-895-6701
郵便振替口座	00890-2-148183 「伊藤治郎」
編集・印刷	株式会社あるむ
	〒460-0012 愛知県名古屋市中区千代田3-1-12 第三記念橋ビル3F
頒価	900円 (本体価格)
